福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1321 集

比恵78

比恵 78

HIE

－比恵遺跡群第 140 次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一三二一集　福岡市教育委員会

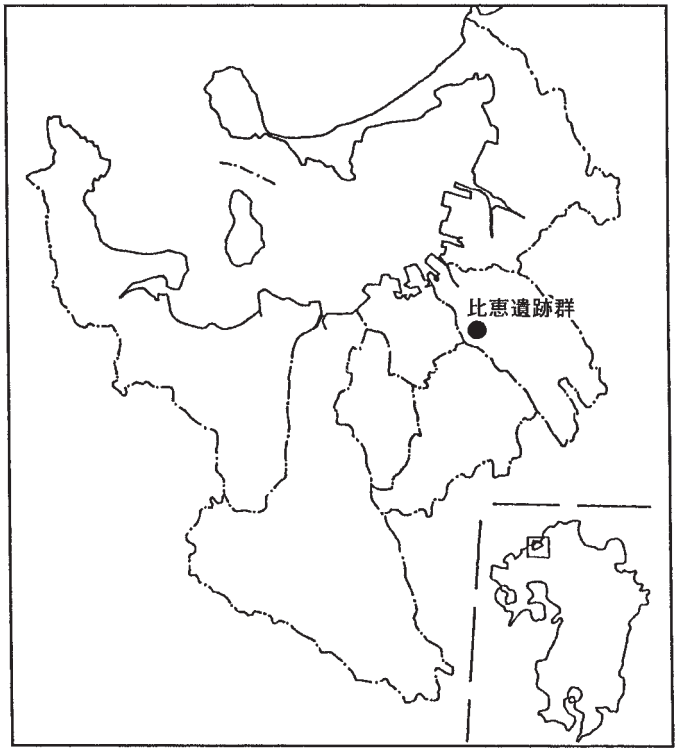
２０１７

福岡市教育委員会

HI　E

比恵 78

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1321 集



調査番号　１５２８

調査略号　HIE-140

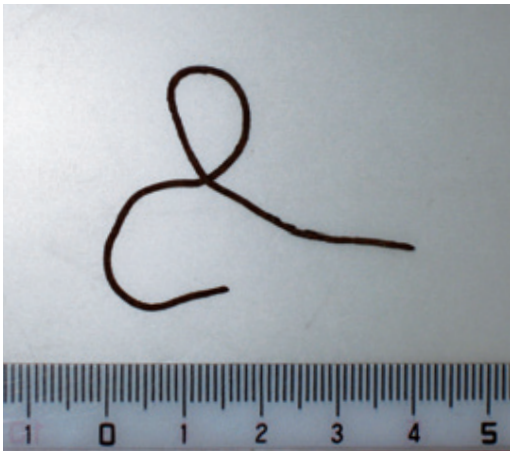
２０１７

福岡市教育委員会

1．調査２区全景（南西から）

2．SE09 遺物出土状況（北西から）

3．鋼線と出土土器 92



4．鋼線 81

序

現在、九州の中枢都市として発展をつづける福岡都市圏の人口は、増加の一途をたどっています。そして、これらにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため、発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、本市博多区博多駅南４丁目において発掘調査を実施した比恵遺跡群第 140 次調査の記録を収録したものであります。

調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての、集落と道路状遺構、最古期の鋼線等が出土し、貴重な資料を得ることができました。

調査に際し快くご理解とご協力をいただきました株式会社ケイコー様には心よりお礼申し上げます。また、ご協力をいただきました関係者各位、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝致します。この報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献する事ができましたなら幸いに存じます。

平成 29 年 3 月 27 日

福岡市教育委員会
教育長　　星 子 明 夫

例　　言

1．本書は株式会社ケイコーが実施した博多区博多駅南４丁目 62・63 番地内における共同住宅建設にともなう事前調査として、福岡市教育委員会が平成 27 年度に実施した比恵遺跡群第 140 次調査の調査報告書である。
2．本書で用いる方位は日本測地第２座標系による座標北で、磁北はこれに 6° 0′ 西偏する。
3．調査区は予定建物を基軸として任意の 3m 方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は西交点とした。
4．遺構の呼称は略号化し、竪穴住居→ SC・不定形遺構→ SX・井戸→ SE・土壙→ SK・溝→ SD・柱穴→ SP とした。
5．本書に使用した遺構実測図は加藤良彦・辻節子・中村桂子による。
6．本書に使用した遺物実測図は大庭友子･熊埜御堂和香子･山口朱美･米倉法子･加藤による。
7．製図は副田則子・米倉・加藤による。
8．本書に用いた写真は加藤による。
9．本書の執筆・編集は加藤が行った。
10．本書にかかわる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

Ⅰ．はじめに……1
　１．調査に至る経緯……1
　２．調査の組織……1
Ⅱ．調査区の立地と環境……5
Ⅲ．調査の記録……6
　１．調査の概要……6
　２．弥生時代中期の調査……6
　３．弥生時代後期の調査……16
　４．古墳時代の調査……21
　５．古代・中世の調査……35
　６．混入その他の資料……36
Ⅳ．小結……38

挿図目次

Fig.1　周辺遺跡分布図 (1/25,000) …… 2
Fig.2　調査区位置図 (1/4,000) …… 2
Fig.3　調査区周辺測量図 (1/500) …… 3
Fig.4　遺構全体図（1/150） …… 4
Fig.5　弥生中期遺構分布図（1/300） …… 6
Fig.6　SC18･47･30･31･32 実測図（1/60）…… 8
Fig.7　SC18･47･30･31･32
　出土遺物実測図（1/4･ 石器 1/3） …… 9
Fig.8　SK10･11･12･16･22･24･28･
　33･34 実測図（1/40)）……10
Fig.9　SK10･11･12･33･34
　出土遺物実測図（1/4）……10
Fig.10　SK37･40･41･44･
　SD26･29･SX14 実測図（1/40） ……13
Fig.11　SK16･22･37･40･44･SD29･SX14
　出土遺物実測図（1/4･ 石器 1/3） ……14
Fig.12　柱穴出土遺物実測図（1/4・1/3）……16
Fig.13　弥生後期遺構分布図（1/300） ……16
Fig.14　SE45･SK13（1/40）・
　出土遺物実測図（1/4）……17
Fig.15　SD05･20･21･23 実測図（1/60）……18
Fig.16　SD05 出土遺物実測図（1/4・1/3） …… 19
Fig.17　SD21 出土遺物実測図（1/4）…… 20
Fig.18　SD20 出土遺物実測図（1/4）…… 21
Fig.19　古墳時代遺構分布図（1/300） …… 21
Fig.20　SE09 実測図（1/20） …… 22
Fig.21　SE09 出土遺物実測図（1/4･1/3･1/2）…… 23
Fig.22　SD06･19･25･36 実測図（1/60）…… 25
Fig.23　SD06 出土遺物実測図 .1（1/4）…… 26
Fig.24　SD06 出土遺物実測図 .2（1/4･1/3）…… 27
Fig.25　SD19 出土遺物実測図 .1（1/4）…… 28
Fig.26　SD19 出土遺物実測図 .2（1/4）…… 30
Fig.27　SD19 出土遺物実測図 .3（1/4）…… 32
Fig.28　SD19･25
　出土遺物実測図 .4（1/4･1/3･1/2）…… 33
Fig.29　SD03･04 実測図（1/60）・
　出土遺物実測図（1/4) …… 34
Fig.30　古代・中世遺構分布図（1/300） …… 35
Fig.31　SK01･02･SD17 実測図（1/40）
　出土遺物実測図（1/4）…… 35
Fig.32　混入その他の遺物実測図（1/4･1/3） …… 37
Fig.33　古墳前期溝分布図（1/1000）…… 39

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市博多区博多駅南４丁目 62・63 番において、株式会社ケイコーより共同住宅建設計画の策定に当たって、平成 27 年６月 18 日に埋蔵文化財の有無の照会が埋蔵文化財審査課（現埋蔵文化財課）になされた事により始まる。申請面積は 1,431.39㎡、受付番号は 27-2-285 である。

申請地は過去の申請で平成７年 11 月９日に確認調査が実施されており、GL 下 30㎝で遺構が検出されて、30㎝の盛土を行う設計変更により保護層を確保することによって遺跡を保存し、建築を実施した経緯がある。今回の開発計画は RC 造の共同住宅建設であったため設計変更も不可能であったことから、遺跡の破壊を免れない建物部分に限定して記録保存のため発掘調査を実施する事となり、同社と福岡市との間で委託契約が締結された。

発掘調査は平成 27 年 10 月 26 日に着手、28 年１月 14 日に全ての工程を終了した。

調査番号	1528	遺跡略号	ＨＩＥ-140
調査地地籍	博多区博多駅南４丁目 62・63 番	分布地図番号	37（東光寺）0127
調査地面積	1,431.39 ㎡	調査実施面積	441.18 ㎡
調査期間	151026 ～ 160114	事前審査番号	27-2-285

２．調査の組織

【調査委託】株式会社 ケイコー
【調査主体】福岡市教育委員会
（発掘調査：平成 27 年度・整理報告：平成 28 年度）
【調査総括】経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課　課長　常松幹雄
同課調査第１係長　吉武学
【調査庶務】埋蔵文化財審査課　管理係長　大塚紀宜
管理係　川村啓子
【発掘調査】埋蔵文化財調査課調査第１係　主任文化財主事　加藤良彦
【発掘作業】谷政則　辻節子　三谷朗子　富永遵儀　桑原美津子　豊辻義弘　梅野眞澄
村山巳代子　中村桂子　松本順子　藤野幸雄　許斐拓生　桒野孝子
安東昌信　上野照明　林春治郎　阿部洪太郎　中島秀司　鹿児島秀雄
遠竹卓馬　原野容子　室井三太郎
【整理総括】経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課　課長　常松幹雄
【整理庶務】埋蔵文化財課　管理係　松原加奈枝
【整理担当】埋蔵文化財課調査第２係　主任文化財主事　加藤良彦

【整理作業】国武真理子　窪田慧　副田則子　三宅恵子

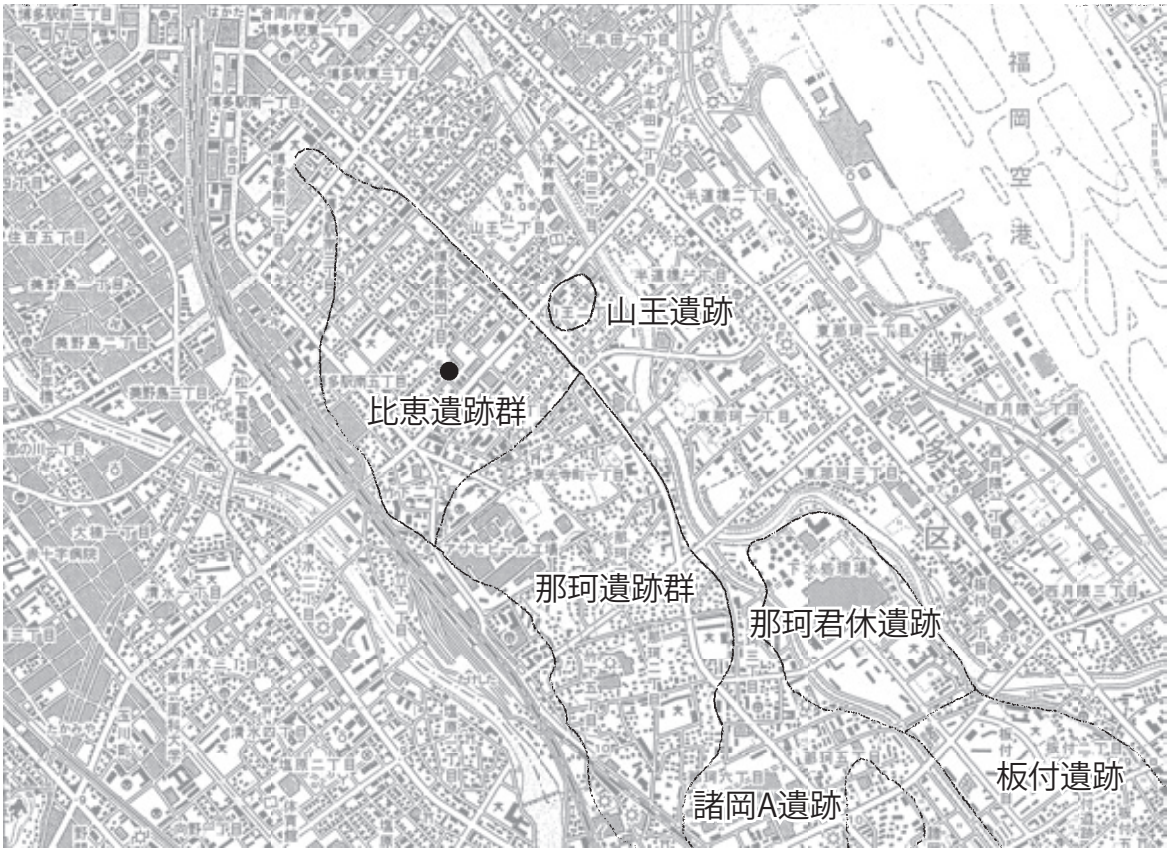


Fig.1　周辺遺跡分布図 (1/25,000)

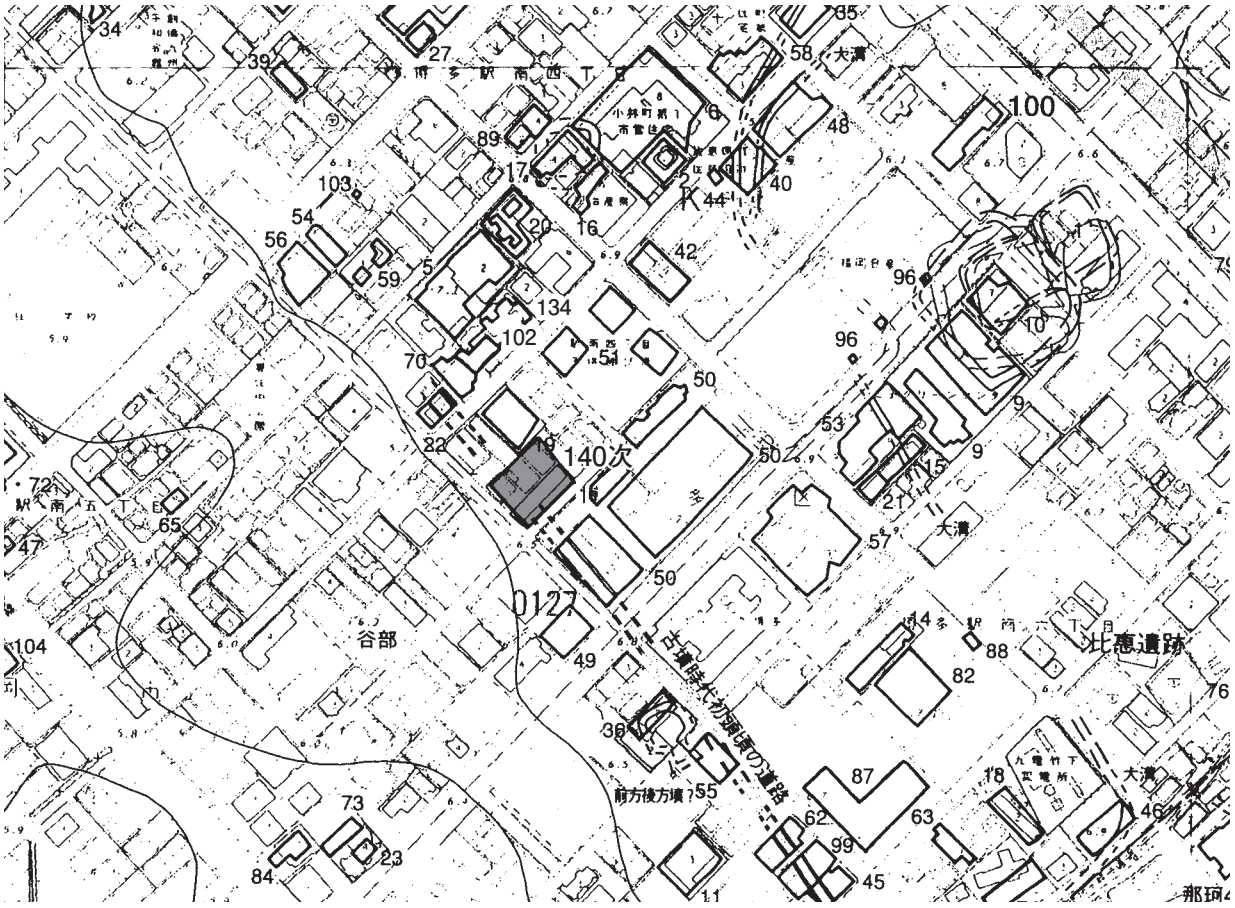


Fig.2　調査区位置図 (1/4,000)

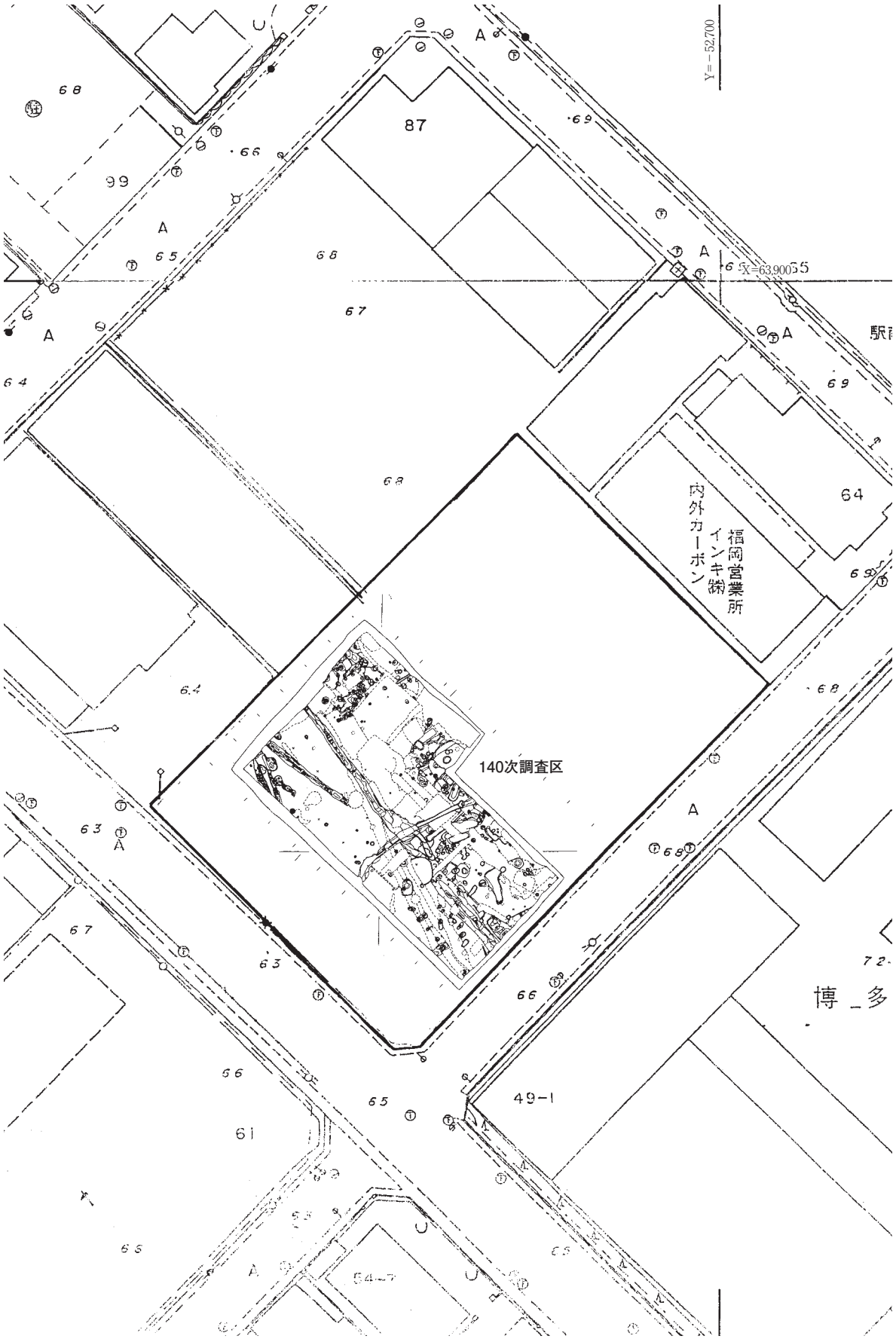


Fig.3 調査区周辺測量図 (1/500)

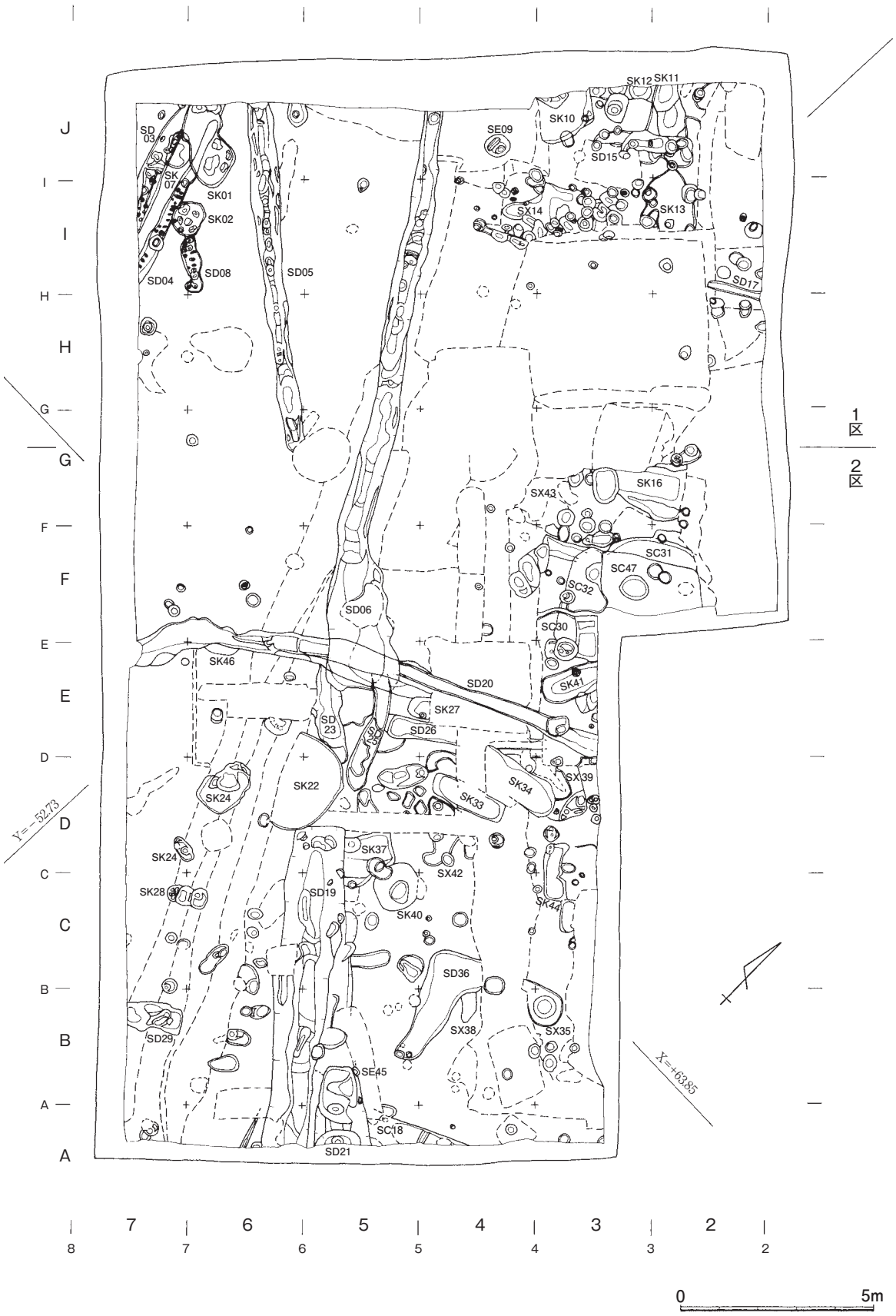


Fig.4 遺構全体図（1/150）

Ⅱ．調査区の立地と環境

本調査区は福岡市の都心部より東へ 1km、海岸線より南へ 4.1kmの地点、福岡平野の中央部を流れる那珂川と御笠川に挟まれた北側の洪積台地上に位置する。

本調査区が立地する比恵・那珂遺跡群は、春日丘陵から断続的に長く延びる阿蘇山の火砕流堆積物（Aso4）による八女粘土層・鳥栖ローム層に覆われた洪積台地上に立地し、南の須玖遺跡群から北の井尻Ｂ遺跡・五十川遺跡・本遺跡群へと連なる、殊に弥生時代から古代にかけて中枢域を示す重要な遺跡が分布する（Fig.1）。

本遺跡群は標高５～ 10m 南北 2.5 東西 1.0km程の範囲に広がり、台地縁辺部の旧地形は那珂川・御笠川の開析作用により樹枝状の複雑な形状を成している。台地中央の東西方向の鞍部を挟んで便宜的に北部を比恵遺跡群・南部を那珂遺跡群と呼称しており、本調査区は比恵遺跡群の中央東寄りに位置する。周辺には多くの既存調査地点が集中し、北に第 19 次調査区が南に第 50 次調査区が隣接し、東に第 51 次調査区が近接する（Fig.2）。地表面標高は 7.0 ｍを測る。

周辺の調査では、第 19 次調査で竪穴住居 9・掘建柱建物 9・柵 1・土壙 7・井戸 2・溝 4、第 51 次調査で竪穴住居 32・掘建柱建物 3・井戸 12・溝 9・土壙多数他と弥生中期後半の中国戦国期の鋳造鉄斧など弥生中期後半～古墳前期を中心とした、第 50 次調査では直径が 12m を超える竪穴住居をはじめ竪穴住居 57・掘建柱建物 38・井戸 40・溝 32・土壙 180 他の同様の時期の 347 もの遺構と 3,000 を越える柱穴が検出されるなど、周辺 300 ｍ程は遺跡群内での遺構密集地帯である。また、第 50 次調査Ｄ区と本調査区北側の第 22 次調査区では古墳前期に遺跡群を南北に縦貫する、並列二条溝に挟まれた幅６～ 10m の道路状遺構の一部が検出され、本調査区もその一部が検出されている（Fig.3）。

遺跡群の歴史的環境では、後期旧石器・縄文時代の遺物は、昭和初期区画整理による削平の浅い台地縁辺に散漫に分布。遺構の初現は突帯文期で、台地縁辺の低位部に展開し集落を取り巻く二重環溝が検出される。弥生前期は比恵では北西部の低位部に貯蔵穴・貯木土壙・水溜遺構等が、前期末以降中期には集落が縁辺部から高位部に拡大し竪穴住居・貯蔵穴等が各所に広がる。また、集落周辺には甕棺墓群の形成も始まり、比恵６次調査では細型銅剣を副葬する中期初頭～前半の墳丘墓が、那珂でも中期中頃～後半の墳丘墓が検出される。比恵東側の沖積地では中期中頃～後期前半の水田が出土し、中期中頃以降は中央部に集住が始まり井戸・掘立柱建物が出現する。中期後半から後期に集落は爆発的に増加し、中期末から古墳時代前期前半をピークに遺跡範囲は 100ha を越え、列島最大級の遺跡となる。青銅器・ガラス工房関係の複数地点での出土、多数の直線的な大溝・方形の区画溝の掘削、井戸の大量掘削、銅鏃・銅製鋤先・鉄器・水銀朱原料（辰砂）の多数出土等多くのものが高密度の拠点であることを、また広域に広がる掘立柱建物群や半島系土器を含む国内外の広範囲にわたる外来系搬入土器の出土等、交易の一大拠点であることを示している。古墳時代初頭前後には須玖岡本遺跡が衰退するなか、交替に遺構が微増し、延長 1.5kmにわたる並列二条溝（道路？）の掘削、方形周溝墓群と那珂中央の全長 85m 九州最古期の那珂八幡前方後円墳の築造は、「奴国」の中枢の移動を示している。古墳時代前半以降一時衰退するが、那珂で５世紀末に剣塚北前方後円墳築造以降集落が拡大し、６世紀代には竪穴住居と掘立柱建物群が数カ所に広がり、６世紀後半全長 140m の東光寺剣塚前方後円墳築造時には集落が増大し、７世紀中頃まで集落から隔絶した高所に多重柵列・大型掘立柱建物群が数カ所で造営され、「那津官家」に関わる官衙的な建物群とされる。６世紀末以降建物群は那珂に収斂され、７世紀中頃～末には正方位の溝が縦横に掘削され、瓦･硯の出土等官衙的な内容を濃くする。

Ⅲ．調査の記録

1．調査の概要

本調査区は比恵遺跡群の中央東寄りに位置し、北東側の第42・51次調査区を最高所として、北西から開析された谷への西落ち際に立地している。区画整理以前の地形図では台地の縁が本調査区の西隅で北東側に切れ込んでおり（Fig.33）、本調査区のGL6.2mの北東高位部と5.5mの南西低位部に近似し、近世には縁辺部を切り下げて水路も開削し水田に改変している。現地表高は7.0 mである。

層序は高位部で20cmの客土ａ・10cmの茶褐色畑作耕土ｂ（Fig.6）が、低位部で25cmの客土ａ・25cmの畑作耕土ｂ・35cmの灰色粘質水田耕土ｃ・ｄ（Fig.15）が堆積し明黄褐色シルトの地山面となる。

調査は建築予定部を一気に検出する予定であったが、諸般の都合で基礎解体作業が一部未了であったため、調査区を南北で二分し排土を反転して調査を実施することとし、測量基準線は建物の基準線に合わせ、任意で3mグリッドを設定した。北半部を調査１区として10月26日より重機による表土剥ぎに着手し、翌日より作業員を導入し遺構検出を開始した。11月27日に測量・実測を完了し、同30日より重機による排土反転を開始し南半部・２区の表土剥ぎ・遺構検出を開始した。翌年１月13日に測量・実測を完了し、同日重機による埋め戻し、14日に調査機材を撤収し調査を完了した。

検出したおもな遺構は、弥生時代中期竪穴住居４軒・土壙16基・溝４条・不整形土壙１基、中期末～後期井戸１基・土壙１基・溝４条、終末～古墳時代前期井戸１基・土壙２基・溝４条、後期溝２条、古代土壙２基・不整形土壙１基、中世溝１条である。柱穴は96検出した。台地縁辺部に位置するため周囲の調査区に比べると遺構数は少なめである。遺物は弥生土器・石器・土師器・須恵器などコンテナ38箱分検出している。

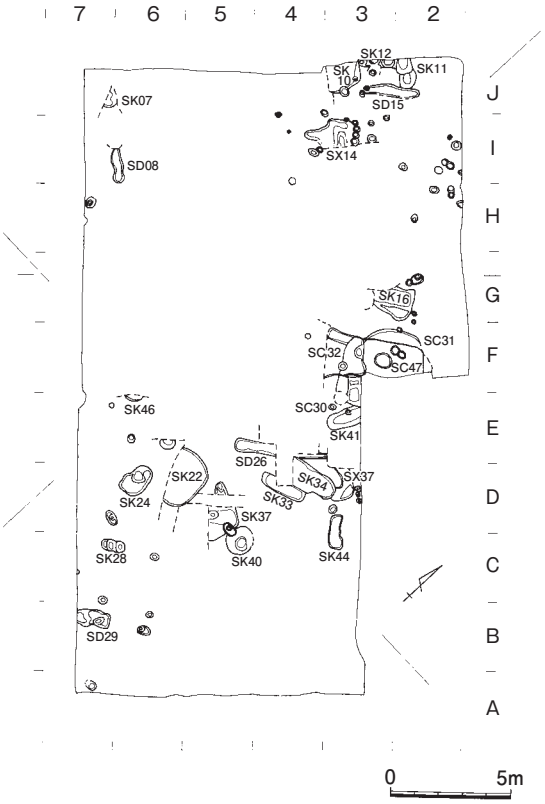


Fig.5　弥生中期遺構分布図（1/300）

2．弥生時代中期の調査

中期の遺構は後半代を主に、竪穴住居４軒･土壙16基･溝４条・不整形土壙２基を検出し、全体の６割を占める中心的な時期である。出土遺物総量の７～８割は該期の土器であり、同様の傾向である北隣地の第19次調査区にかけて集落が広がっている。

１）竪穴住居　調査区中央東側で４軒が重なって検出され、いずれも方形プランで方位も近い。

SC47（Fig.6 PL2-5）F3グリッドの住居集中部に位置し、SC30・31･32に切られる。3.5 × 3.0m・深さ20cmの小型の住居で、方位をＮ－56°－Ｅにとる。壁溝は無く、主柱穴は明確にできない。遺物は弥生土器・黒曜石剥片が数片出土しているが、図化にたえる資料は少ない。

出土遺物（Fig.7）　5は甕の底部片で、外底脇はくびれ、底面厚は1.5cm程でやや厚い。外面にタテハケ、内面にナデを施す。胎土に石英粒を多く含む。外面橙色、内面は暗黄灰色を呈する。中期前半～中頃。

SC30（Fig.6 PL2-3）E3 グリッドに位置し、SC47･32 を切る。半分以上が調査区外に延びるが 2.44 × 1.6+ α m・深さ 6cmの小型の住居で、方位をＮ－ 45°－Ｅにとる。東壁に接して幅 80cmの屋内土壙 SK41 を設ける。壁溝は無く、主柱穴は不明瞭で土壙の可能性もある。遺物は中期前半～後半の弥生土器・石器片がコンテナ 1/4 程出土している。

出土遺物（Fig.7）6・7 は「逆Ｌ字」口縁の甕で、摩滅のためともに調整は不明。6 は胎土に石英粒を多く含む。内外面灰白～鈍い黄橙色、7 は胎土に石英粒を多く含み、内外面浅黄橙色を呈する。8 は大型筒形器台の口縁部で、鍔径 22.6cmを測る。体部に幅 2.6cmの方形透かしを穿ち、外面に丹塗磨研が残る。胎土に石英粒を少量含む。9 は石英斑岩円礫の叩石で、上下両端に敲打痕が残る。5.3 × 2.3 厚 1.9cm 34g を測る。10 は石英斑岩製の磨石。11.7 × 7.7 厚 3cm 372g の扁平円礫を用い、表裏の平坦面に磨痕、中央と上下端部に細かな敲打痕が残る。中期後半。

SC31（Fig.6 PL2-4）F2 グリッドに位置し、SC32 に切られ SC47 を切る。大部分が調査区外に延びるが 3.0+ α × 2.0+ α m・深さ 13cmの小型で、方位がＮ－ 45°－Ｅで SC30 と同方向にとる。壁溝は持たず、主柱穴は明瞭でない。遺物は弥生土器・石器片がコンテナ 1/4 程出土している。

出土遺物（Fig.7）11・12 は「逆Ｌ字」口縁の甕で、内面が稜を成す。ともに胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含み、内外面にヨコナデを施し橙色を呈する。13・14 は壺の底部。13 は底径 8.8cmの広い底部で、外底脇のくびれは緩い。器壁は薄く外底は若干上底となる。調整は不明。胎土に石英粒を多く含む。内外面鈍い黄橙色を呈する。14 は底径 6.9cm。外底脇のくびれは長く胴が強く張る。底は若干上がる。調整は不明。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含む。外面は橙色、内面は鈍い黄橙色を呈する。15 は支脚で口径 6.8cm。上面が 4 輪花状に浅くくびれる。器壁は 3cmと厚く、外面に指頭･ヘラの粗いナデが残る。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量、一部に籾殻を少量含み、内外面橙～浅黄橙色を呈する。16 はホルンフェルス製の偏平打製石斧の転用叩石で、8.4 × 4.4 厚 1.3cm 79g を測る。刃部は激しい使用で端部が残らず剥離し、両側面が窪む程敲打に使用する。中期後半。

SC32（Fig.6 PL2-4）F3 グリッドに位置し、SC30 に切られ SC31･47 を切る。大部分を撹乱に切られ 2.1 × 1.8+ α m・深さ 3cmを測る最小で、方位をＮ－ 57°－Ｅにとる。北壁に幅 44 深さ 5cmの幅広い壁溝を持つ。主柱穴は明瞭でない。遺物は弥生土器・石器片が少量出土している。

出土遺物（Fig.7）17 は「鋤先」口縁の甕で内端が突出する。外面に丹塗磨研が残り内面はヨコナデを施し、胎土に石英粒を少量含む。内外面赤褐色を呈する。18･19 は壺。18 は短い「鋤先」口縁で、調整は不明。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含む。内外面は鈍い黄橙色を呈する。19 は底径 9.6cmの広い底部で、器壁は薄く外底脇のくびれは緩い。調整は不明。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含む。内外面鈍い黄橙色を呈する。中期後半。

２）土壙　削平の著しい西部を除いて、ほぼ全面に 16 基が分布する。

SK33（Fig.8 PL4-1･2）調査区東部の D4 グリッドに位置する長方形の土壙で、中央部を撹乱に切られる。2.05 × 0.6m・深さ 42cmを測り、横断面は箱形縦断面は船底形を呈する。床から 10cm以上浮いた状態で、西から流れ込んだ状態で甕がまとまって出土しており、土壙墓の副葬品ではない。

出土遺物（Fig.8）20 ～ 22 は厚い上底の甕。20 は口径 23 器高 29cm底厚 3cmを測る。断面三角口縁で内面は稜を成す。摩滅のため調整は不明。胎土に石英粒を多く含む。外面は鈍い橙色外底は赤褐色、内面は浅黄橙内底は褐灰色を呈する。21 は上半を欠き現況で器高 23cm底厚 3.2cmを測る。外面にタテハケを施し内面は摩滅のため調整不明。胎土に石英粒を多く含む。外面は橙～暗褐色外底は赤褐色、内面は褐灰色内底は黒褐色を呈する。22 は底部で、底径 7.7 底厚 3.5cmを測る。摩滅のため調整は不明。胎土に石英粒を多く含む。外面は橙色、内面は鈍い黄橙内底は黒褐色を呈する。中期初頭。

SK34（Fig.8）SK33 の北に並行して隣接する長方形の土壙で、西南部を撹乱に切られる。2.45+ α × 0.8m・深さ 22cmを測り横断面は船底形縦断床面は平坦である。遺物は少量の甕と石器が出土する。

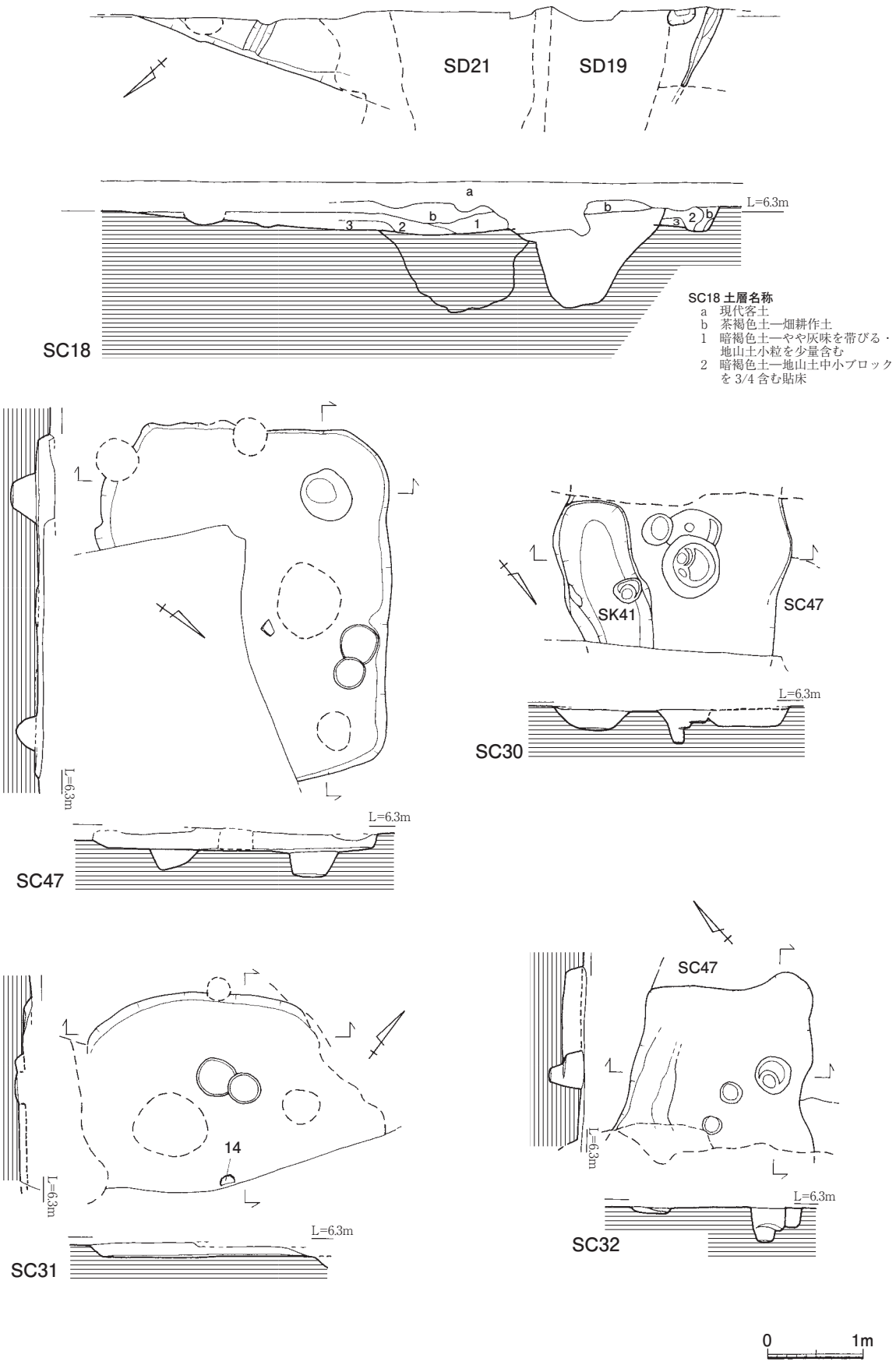


Fig.6 SC18･47･30･31･32 実測図（1/60）

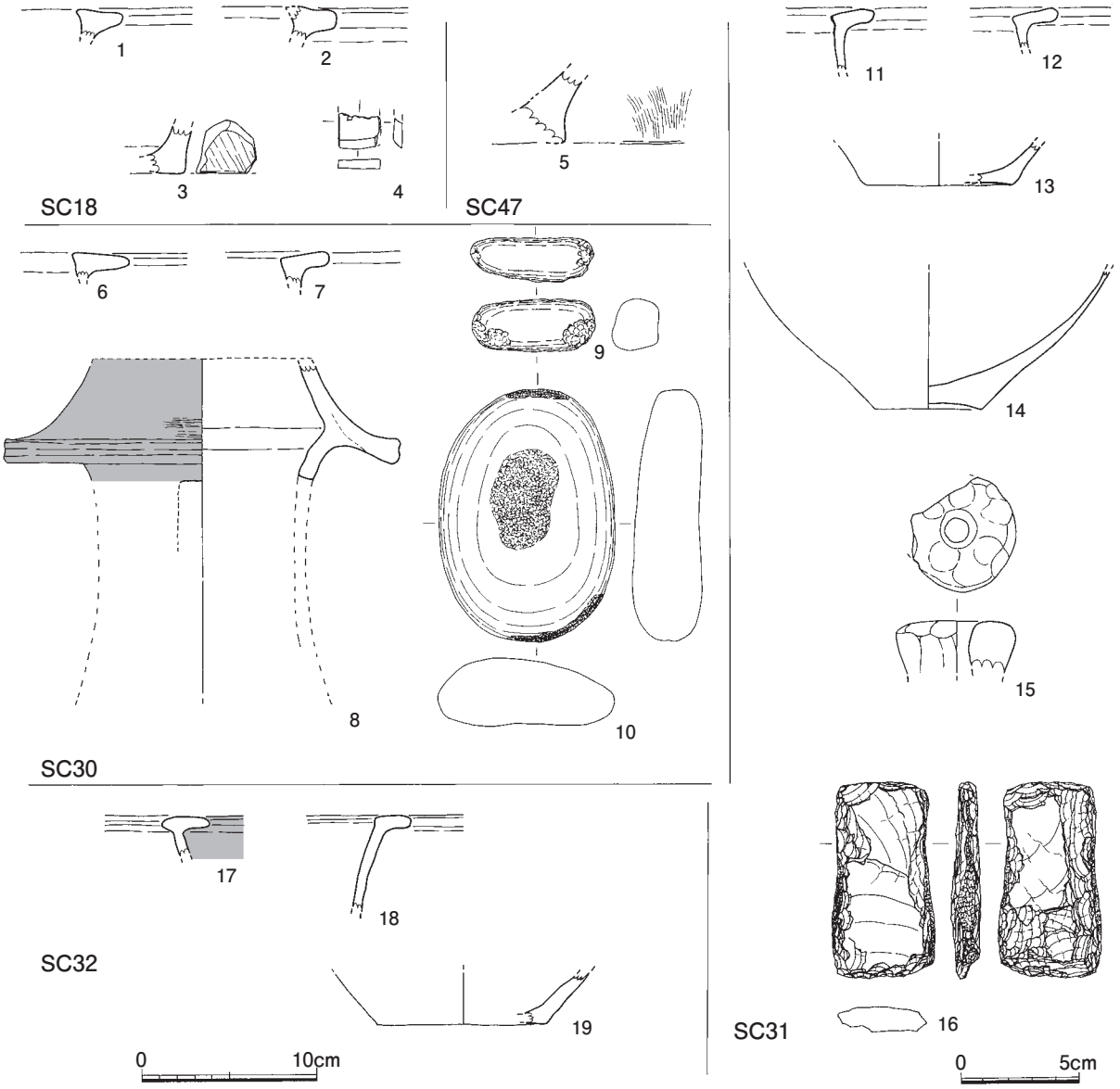


Fig.7 SC18･47･30･31･32 出土遺物実測図（1/4･ 石器 1/3）

出土遺物（Fig.8）23･24 は甕。23 は厚い上底の甕。口径 25.8、器高は 22.5cmを越える。底厚 3.8cmを測る。短い断面「逆Ｌ字」口縁で外端にハケ工具で刻目を施す。内面は稜を成す。外面にタテハケ内面にヨコハケ後ナデを施す。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含む。外面は鈍い橙色外底は赤褐色、内面は浅黄橙内底は黒褐色を呈する。24 は同様の口縁で、刻目はない。口縁内外にヨコナデ、外面口縁下にタテハケを施す。胎土に石英粒を多く含む。内外面ともに橙色を呈する。中期初頭。

SK10（Fig.8 PL2-6･3-1）調査区北部の J3 グリッドに位置し、南を近世の造成で切られ東は調査区外に延びる。1.45+ α × 1.15+ α m・深さ 24cmを測る平面円形プランで、上端の一部が柱穴に切られ崩落し、見かけ上方形に見える。床面は平坦で、床直上近くに器台等の土器がまとまって出土する。上層に茶褐色土、下層に黒灰色土が堆積する。

出土遺物（Fig.8）25 は高坏口縁部片。短い断面「逆Ｌ字」口縁で外端に小さな平坦面をつくる。内端は若干突出する。内外面にケンマを施す。胎土に石英粒を含む。鈍い黄橙色を呈する。26 は短い断面「逆Ｌ字」口縁の甕で外端は丸く収める。調整は摩滅のため不明。胎土に石英粒を多く赤

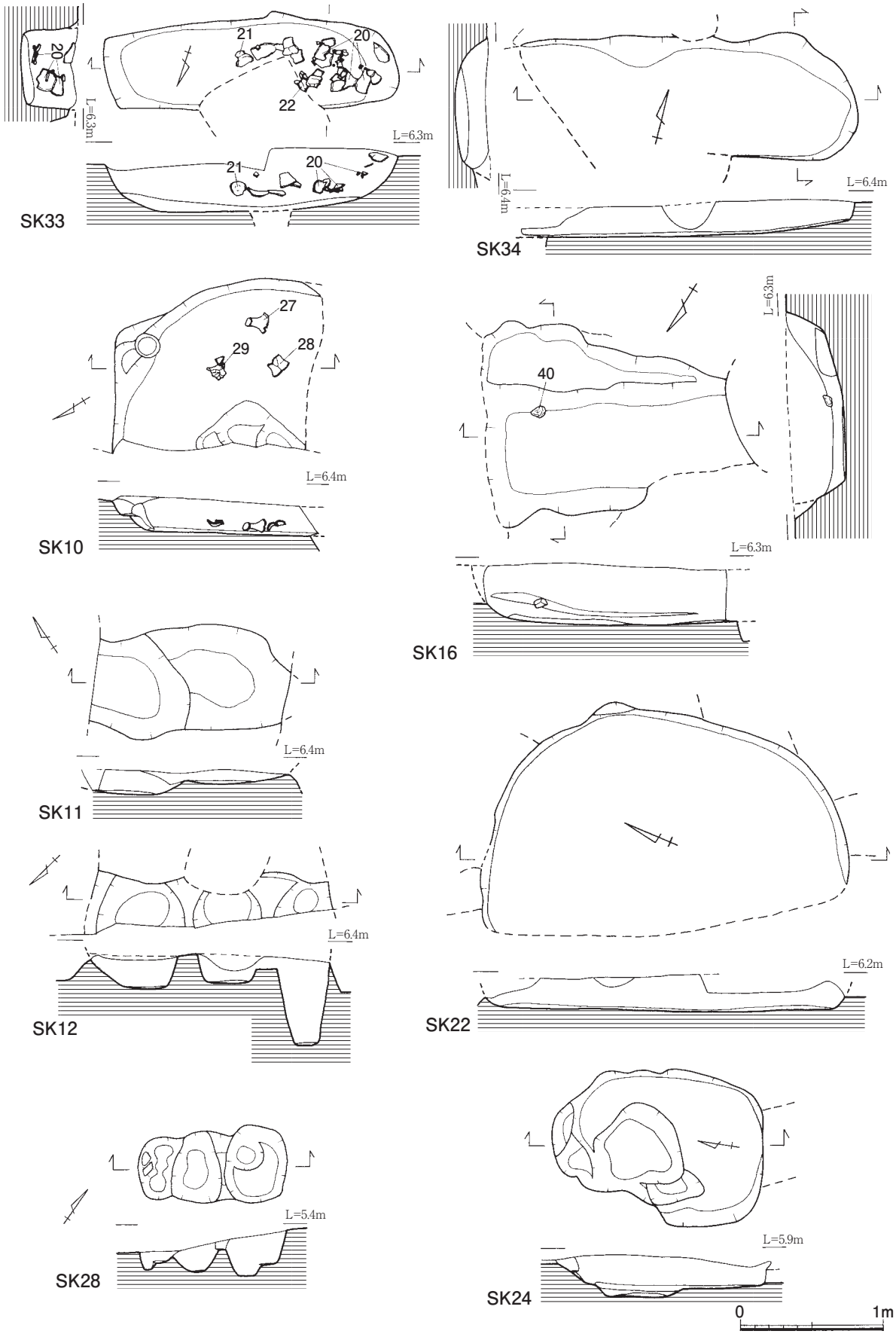


Fig.8 SK10・11・12・16・22・24・28・33・34 実測図（1/40）

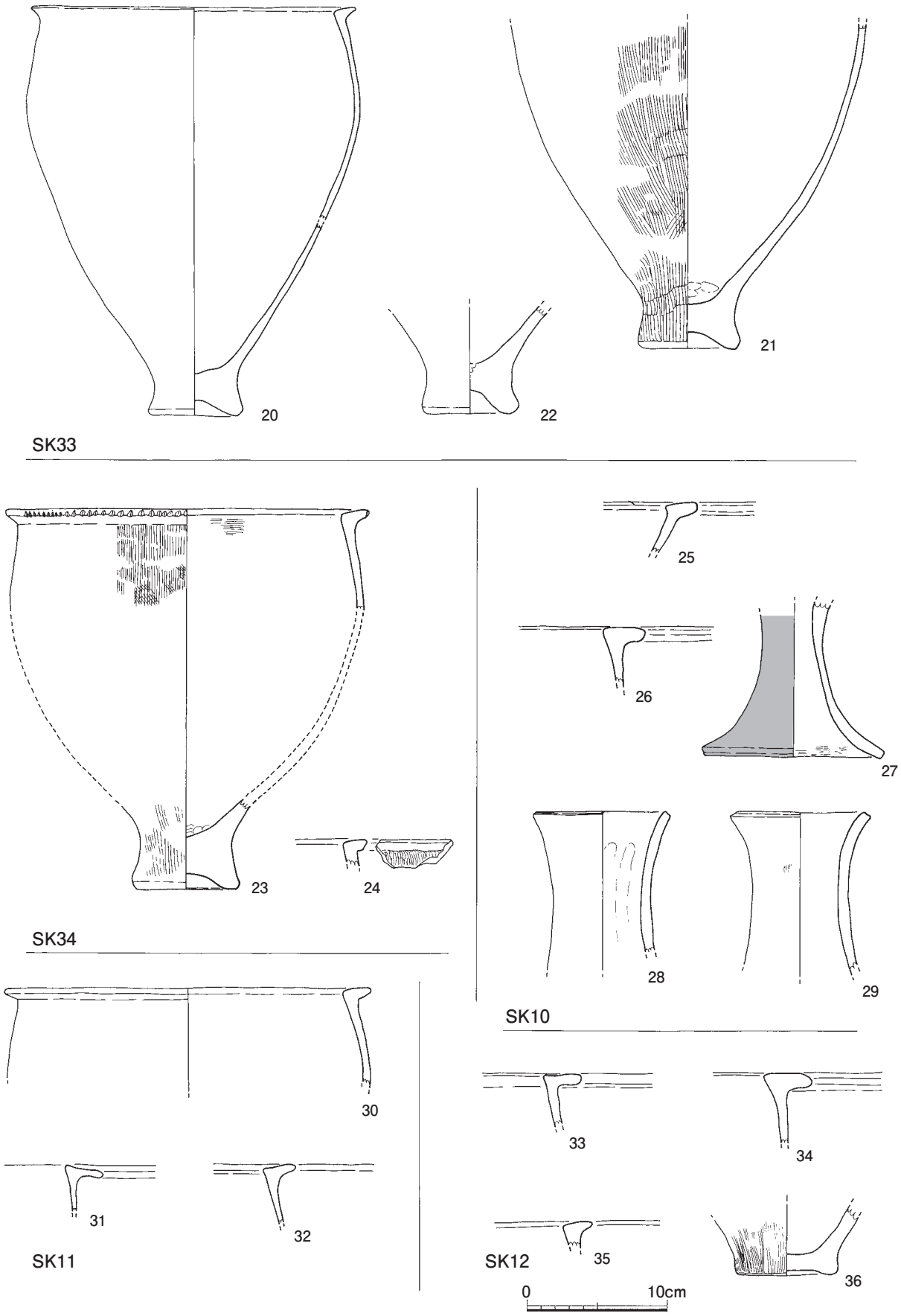


Fig.9 SK10･11･12･33･34 出土遺物実測図（1/4）

色粒を少量含む。橙色を呈する。27 は丹塗磨研の高坏脚部。径 25.4cmを測る。脚端部を浅く窪ませる。内面下位にヨコハケ後ヨコナデ、上位にシボリ痕が残る。胎土に石英粒を含む。橙色を呈する。28･29 は器台。28 は口径 9.7cm、くびれは中位にあり端面に凹線を施す。器壁が荒れ調整不明。胎土に石英粒を含む。橙色を呈する。29 は口径 10cm、くびれはやや上位にあり端面が若干窪む。外面にタテハケ内面にタテナデが残る。胎土に石英粒を含む。橙色を呈する。中期中頃。

SK11（Fig.8）北部の J2 グリッドに位置し、西が調査区外に延びる。1.35+ α × 0.75m・深さ 17cmを測る縦断面 2 段の長方形土壙で、溝端部の可能性もある。遺物は弥生土器が少量出土する。

出土遺物（Fig.8）30 ～ 32 は甕。30 は「逆 L 字」口縁の甕で口径 26cmを測る。外端は丸く収め、胴部が張る。外面にタテハケ調整が残る。胎土に石英粒を多く含む。黄橙色を呈する。31 は「逆 L 字」口縁で器壁が薄く、上面が外傾し端部は丸く収める。調整は不明。胎土に石英粒を多く含み、橙色を呈する。32 は「逆 L 字」口縁で上面が内傾し、内端が稜を成し胴部が張る。調整は不明。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含み、橙色を呈する。中期後半。

SK12（Fig.8）SK10･11 間に位置し、SK10 を切り SK11 に切られ、大部分が調査区外に延びる。1.68+ α × 0.32+ α m・深さ 8cmを測る不整形土壙で、壁際に径 35 ～ 60cmの柱穴が並ぶ。遺物は弥生土器・石器が数片出土する。

出土遺物（Fig.8）33 ～ 36 は甕。33・34 は「逆 L 字」口縁で胴が張る。33 は器壁が薄く、口縁内端下を若干窪め外端は丸く収める。調整は不明。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含む。橙色を呈する。34 は口縁が肥厚し外端は丸く収める。胎土に石英粒を多く含み、鈍い黄橙色を呈する。35 は断面三角口縁で上面が内傾し、内端が稜を成し胴部が張る。調整は不明。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含み、橙色を呈する。36 は底部で、外底は浅い上げ底で底径 7.2cm底厚 1.5cmを測る。外底脇のくびれはやや強く、タテハケを，内面にナデを施す。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含む。内外面は橙色外底は黄褐色を呈する。中期後半。

SK16（Fig.8 PL3-2･3）北東部の G3 グリッドに位置し、大部分が撹乱に切られる。1.88+ α × 1.45m・深さ 40cmを測る長方形土壙で、南側に幅 35cm程のテラス部がある。床は平坦で、上層に茶褐色土、下層に黒灰色土が堆積する。遺物は弥生土器・石器が少量出土する。

出土遺物（Fig.11）37 は壺胴部で、径 24.4cmを測り中位に低い「M 字」突帯を貼付する。朝顔口縁と思われる。器壁が荒れ調整は不明。胎土に石英粒を少量含み、明褐色を呈する。38･39 は「逆 L 字」口縁甕で、38 は口径 27cm。外端は丸く収める。外面にタテハケが残り下半に煤が付着する。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含み、暗褐色を呈する。39 は口径 29cm。器壁が薄く、外端は丸く収め、内端が若干突出し口縁下を若干窪める。調整は不明。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含む。暗褐色を呈する。40 は砂礫岩の角礫を用いた有溝砥石片で、砥面に幅 2 ～ 5.2mm深さ 0.5 ～ 2.5mmの 5 本の溝状砥痕が残る。側面が自然面、他は破断面である。中期後半。

SK22（Fig.8 PL3-4）中央付近の D5 グリッドに位置し SD23 に切られる大型の円形土壙で、西半部を近世の造成で削平される。2.6 × 1.55+ α m 深さ 23cmを測る。床面は平坦で、壁溝･柱穴は無く、住居とは異なる。遺物は弥生土器・石器が少量出土する。

出土遺物（Fig.11）41 は「逆 L 字」口縁甕片で、外端は丸く収め内端がやや突出し口縁下を窪める。摩滅のため調整は不明。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含み、明褐色を呈する。他に丹塗磨研甕・器台等の小片が出土する。中期後半。

SK24（Fig.8 PL3-5）SK22 の西 3m の造成斜面に位置する。1.46 × 1.08m 深さ 23cmを測る隅丸方形の底面に径 65cm深さ 6cmの 2 段に下がる土壙で、大型建物の柱穴・掘方に似るが、周辺に対になるものが無く柱穴状も浅いため土壙とした。遺物は中期の弥生土器が 2 片出土する。

SK28（Fig.8 PL3-6）SK24 の南 3m の造成斜面に位置する。1.04 × 0.55m 深さ 33cmを測る。径 40cm前後の柱穴が 3 連結した形状で、それぞれの底面レベルは揃っている。遺物は中期後半の弥生土器

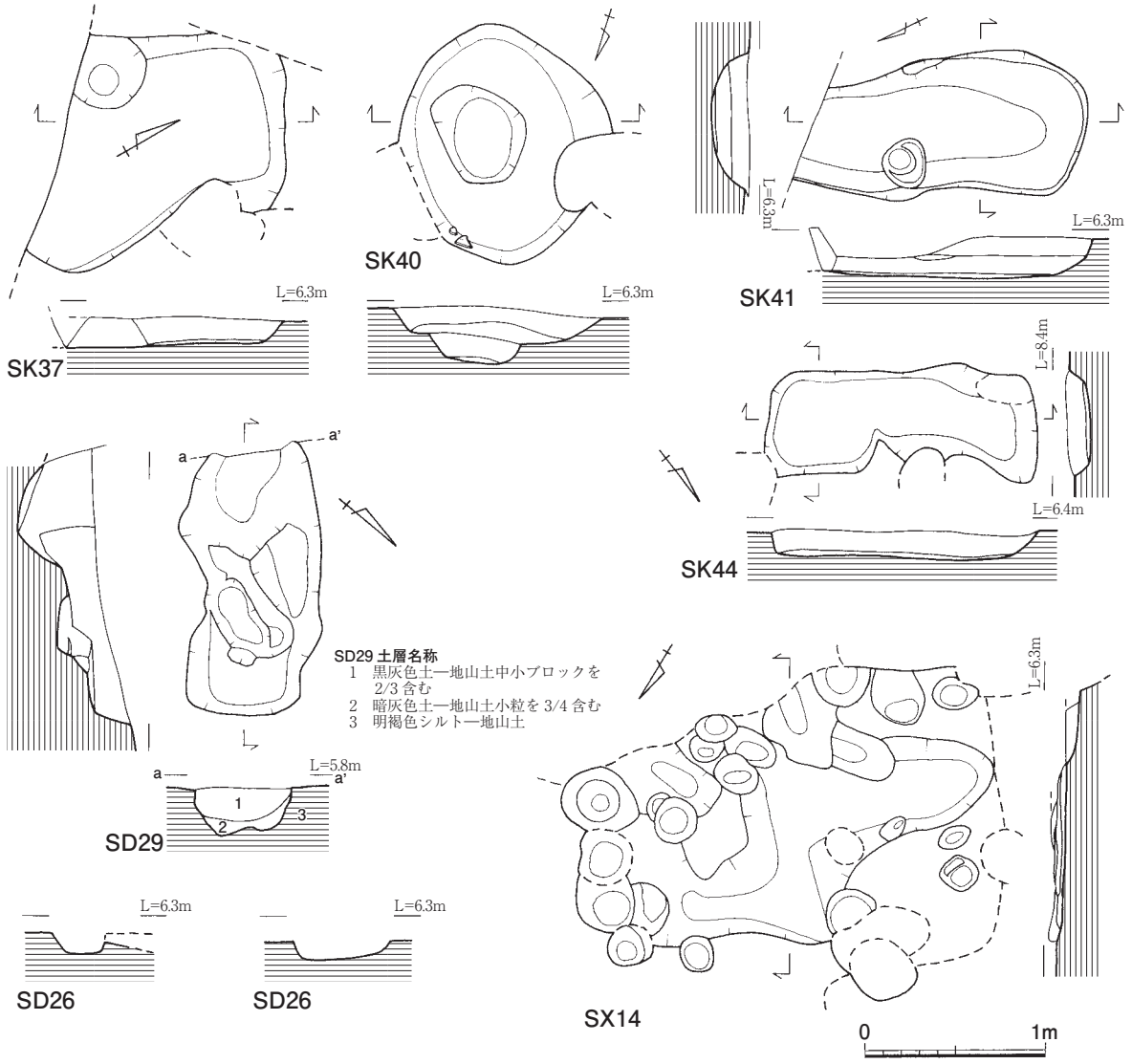


Fig.10 SK37･40･41･44･SD26･29･SX14 実測図（1/40）

片が 10 数片出土する。

SK37（Fig.10）SK22 の東､D5 グリッドに位置し SD19 に切られる不整方形土壙で､1.96+ α × 1.3m 深さ 16cmを測る。床面は平坦である。遺物は弥生土器が少量出土する。

出土遺物（Fig.11）42･43 は甕。42 は「逆 L 字」口縁甕片で、外端は丸く収め内端がやや突出し口縁下を窪め胴が張る。口縁内外はヨコナデを施す。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含み、明褐色を呈する。43 は底部で､底径 8cm底厚は 1.5cm程。外底脇のくびれは長く､タテハケを, 内面はナデを施す。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含む。外面は橙色内面は浅黄橙色を呈する。44 は器台。口径 10cm、くびれは中位にあり口縁端面は丸く収める。脚端内面は浅く窪ませる。外面に細かなタテハケ内面にナデを施す。中期中頃。

SK40（Fig.10）SK37 の東に隣接する、C5 グリッドに位置し、SK24 同様 1.18 × 1.2m 深さ 18cmを測る隅丸方形の底面に径 50cm深さ 15cmの 2 段に下がる土壙で、大型建物の掘方・柱穴に似るが、単独で周辺に対になるものが無く、土壙とした。遺物は弥生土器・石器が少量出土する。

出土遺物（Fig.11）45 は甕底部で、底径 8.4cm底厚は 0.7cmで薄い。外面にタテハケ，内面にナデを

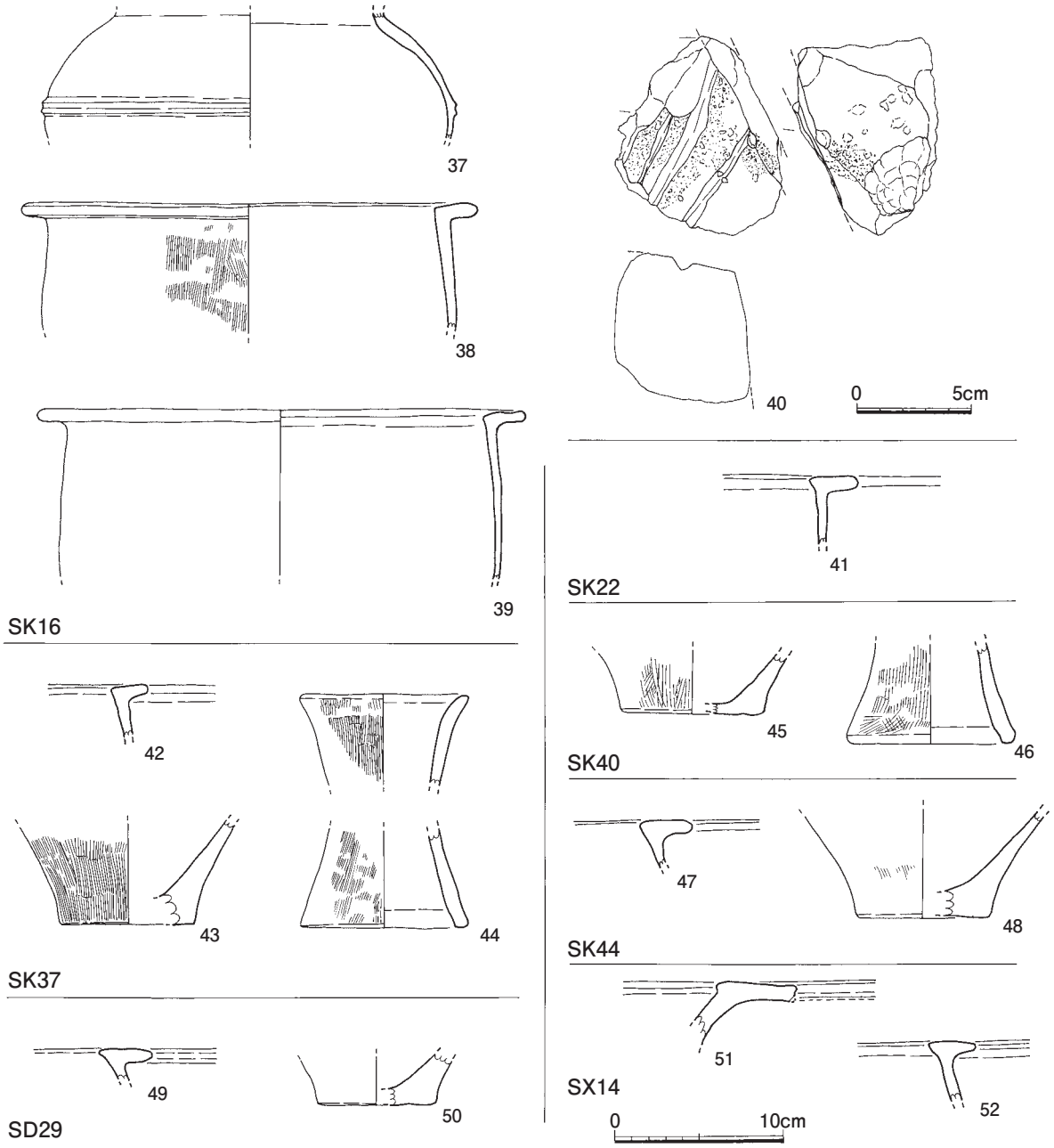


Fig.11 SK16･22･37･40･44･SD29･SX14 出土遺物実測図（1/4･ 石器 1/3）

施す。胎土に石英粒を多く含み､外面は暗赤褐色内面は暗褐色を呈する。46 は脚径 10cmを測る器台で、脚端内面は浅く窪ませる。外面にやや粗いタテハケ内面にナデを施す。中期後半。

SK41（Fig.10）E3 グリッドに位置する SC30 の屋内土壙で、SC30 の東壁に接して 1.55+ α × 0.8m 深さ 22cmを測る。縦・横断面は船底形。遺物は弥生中期後半の弥生土器片を 20 数片出土する。

SK44（Fig.10）南東部の D3 グリッドに位置する不整長方形の土壙で､1.5 × 0.55m 深さ 15cmを測る。床面は平坦である。遺物は少量の弥生土器・石器片を出土する。

出土遺物（Fig.11）47 は「逆 L 字」口縁甕片で、外端は丸く収め内端は稜を成す。胴が強く張る。口縁内外はヨコナデを施す。胎土に石英粒を多く含み、明黄褐色を呈する。48 は壺底部で、底径 8cm を測り底厚は 1.5cm程。外底脇のくびれは長く、外面にタテハケが若干残る。胎土に石英粒をを少量

含む。外面は橙色内面は鈍い黄橙色を呈する。中期後半。

３）溝　中期後半の短い溝を、主に地形との直交方向に散漫に４条検出した。

SD26（Fig.10）E4・5グリッドに、SD25と撹乱に切られ、途切れながら4mにわたって検出した。方位をN－50°－Eにとり、東端で幅30西端で幅50cmに広がり、深さ10cm程で底面は谷側に5cm程下がる。弥生中期中頃の弥生土器片が少量出土した。

SD29（Fig.10）調査区南部のB7グリッド近世造成斜面で検出した溝端部で、大半は西の調査区外に延びる。方位をSD26同様N－50°－Eにとり、幅70cmで、底面は深さ10～20cmの３段の階段状に西に下がる。上層に客土（１層）下層に暗灰色土（２層）が堆積する。少量の弥生土器片を出土している。

出土遺物（Fig.11）**49**は無頸壺口縁。外端は丸く収め胴が強く張る。調整は不明。胎土に石英粒を少量含み、褐色を呈する。**50**は甕底部で、底径7cmを測り底厚は1cmと薄い。外底は若干の上底。器壁が荒れ調整は不明。胎土に石英粒を多く含み、橙色を呈する。中期後半。

４）不整形土壙　１区と２区のそれぞれで２基検出した。

SX14（Fig.10）調査区北部のI3グリッドに位置し、南側の大半を造成で削平される。2.35+α×1.63mの不整形プランで中央が枝状に10～15cm程窪み、径15～30cm程の小穴が周縁に多数分布する。倒木痕の底面近くの遺存の可能性がある。遺物は少量の弥生土器・石器片を出土している。

出土遺物（Fig.11）**51**は「鋤先」口縁の壺口縁部片。上面が緩く外傾し外端面を浅く窪ませる。上面から内面はヨコナデ、外面にヨコナデ後粗いケンマを施す。胎土に石英粒を少量含み、橙色を呈する。**52**は「T字」口縁の甕で胴が張る。口縁内外はヨコナデを施し、内端下に一部接合痕が残る。胎土に石英粒を多く含み、橙色を呈する。中期後半。

５）柱穴出土遺物　柱穴は、96穴中、該期のものが69で７割近くを占め、中心的な時期であることを示しているが、大部分は区画整理による削平後の竪穴住居の遺存分と考えられる。

出土遺物（Fig.12）**53**はJ3グリッドSP5出土の甕。口径25.6cmの「逆L字」口縁で、上面はやや内傾し、外端は丸く収め内端がやや突出し口縁下を窪める。調整は摩滅のため不明。胎土に石英粒を多く赤色粒・角閃石を少量含み、鈍い橙色を呈する。**54**はD3グリッドSP1出土の甕。口径29cmの「鋤先」口縁で、外端は丸く収め胴が強く張る。口縁内外から内面はヨコナデ、胴外面に粗いタテハケを施す。胎土に石英粒を多く含み、鈍暗褐色を呈する。**55**・**56**はE3グリッドSP4出土。**55**は投弾の残片。3.6+α×2.5cmを測る。胎土に石英粒を含み、橙色を呈する。**56**は上端で径4mm下端で径3mm残存長21mmを測る棒状の鉄器。上位の斜め方向に木片が付着する。**57**はB7グリッドSP1出土の黄灰色中粒砂岩を用いた砥石片で、平坦面の砥面中央が1.5mm程浅く窪む。右側面も砥面に使用し、左側面は自然面、下面は破断面となっている。現況で8.1×8.7×1.6cmを測る。

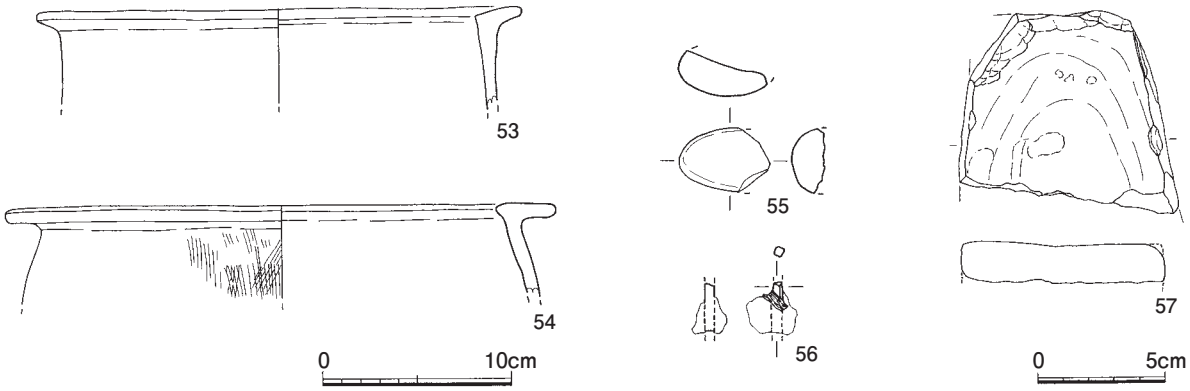


Fig.12 柱穴出土遺物実測図（1/4・1/3）

3．弥生時代後期の調査

後期の遺構は、竪穴住居１軒・井戸１基・土壙１基・溝４条・柱穴２を検出した。全体の 16% 程で、周辺調査区同様集落の縮小期にあたる。主体は溝で、南東から北西に直線上に連なるものと、北東から南西に延びる溝が中央部で直交する。

1）竪穴住居　SC18（Fig.6 PL2-1）A5 グリッドに位置し、SD21 を切り SD19 に切られる。大半が調査区外に延びるが、一辺 5.5m を越える、調査区内では大型の住居である。深さは 20 ㎝程で、主柱穴は不明である。方位をＮ－62°－Ｅにとる。西壁に厚さ 10㎝程の貼床（3 層）を切って幅 30 ㎝程の壁溝を設ける。遺物は１層を主にコンテナ 1/4 程の弥生土器と石器を検出している。

出土遺物(Fig.7)　1～3 は甕の小片。1･2 は短い「逆 L 字」口縁で、上面を若干窪ませる。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含む。色調は橙色を呈する。3 は底部片で、外面に粗いタテハケ、内面にナデを施す。底面厚は 1.0㎝でやや薄め。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含む。外面は鈍い橙色を、内面は明褐色を呈する。4 はホルンフェルス製の小型扁平片刃石斧片。幅 1.8 厚 0.4 残存長 1.5㎝を測る。層理を縦にとり、全面を研磨で仕上げる。SD21 を切るため、後期初頭以降である。

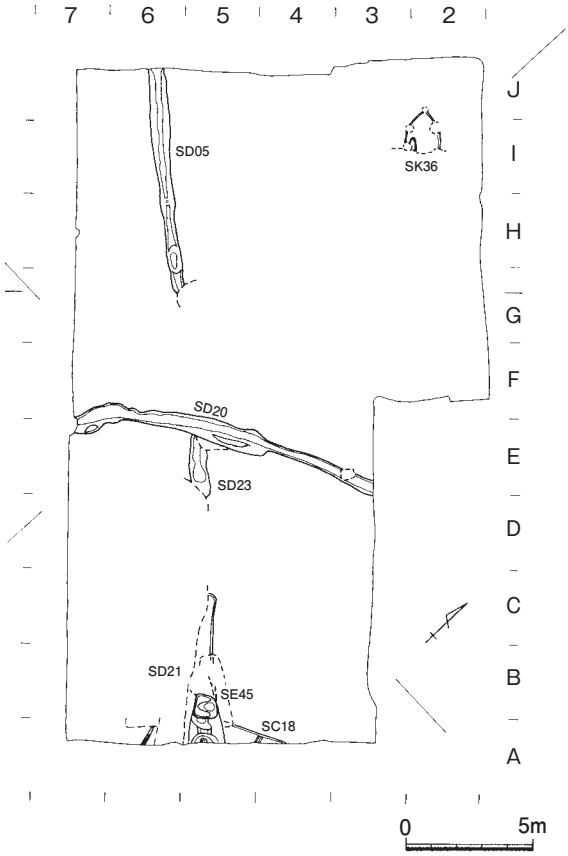


Fig.13 弥生後期遺構分布図（1/300）

2）井戸　SE45（Fig.14 PL6-2）B5 グリッドで１基のみ検出され、大部分を溝 SD21 に切られる。円形プランで上端で径 90㎝を測る。下部の遺存で、下端で 60 ㎝の円形となり、底面は浅い凹凸がある。深さは 80 ㎝。遺物は中期末～後期初頭の弥生土器小片が 20 数片出土した。

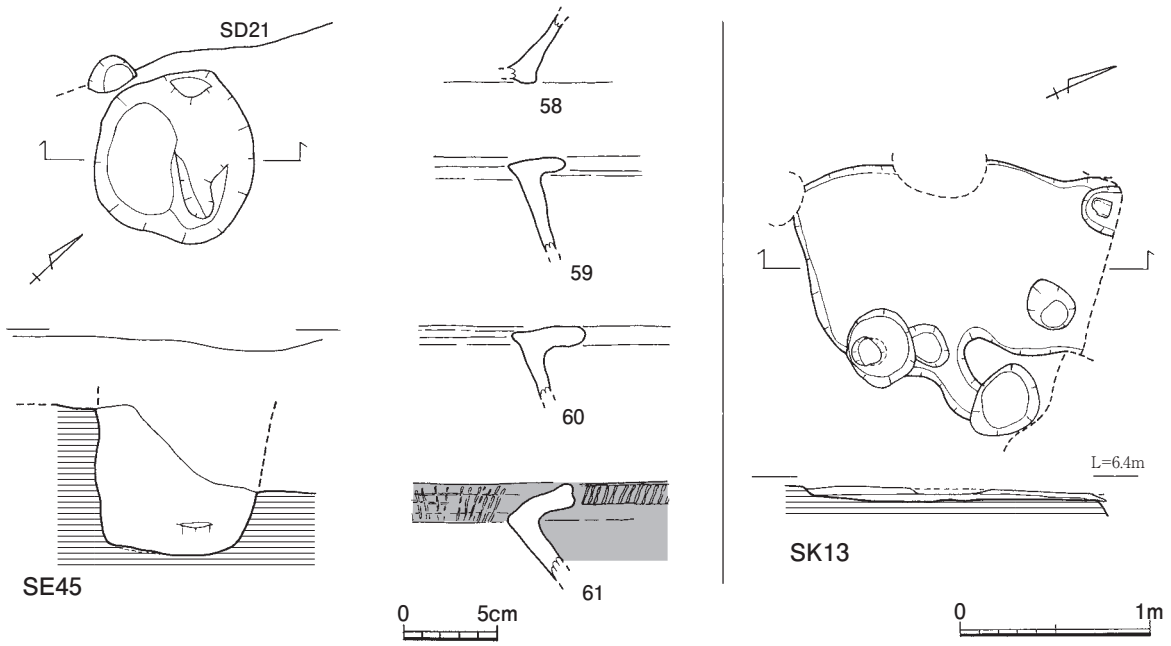


Fig.14 SE45･SK13（1/40）・出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（Fig.14）58 ～ 61 は甕。58 は外底が若干上げ底の底部。摩滅で調整は不明。胎土に石英粒を多く含み、黄橙色を呈する。59・60 は「逆Ｌ字」口縁片で、外端は丸く収め内端がやや突出し口縁下を窪める。上面は若干内傾し、胴が張る。摩滅のため調整は不明。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含み、59 は外面橙色内面暗黄褐色、60 は外面鈍い橙色内面浅黄橙色を呈する。61 は丹塗磨研甕。「く字」口縁で、胴が強く張る。口縁外端は窪め細い刻目を、上面に放射状の暗文を施す。胎土に石英粒・赤色粒を少量含み、露胎部は鈍い黄橙色を呈する。後期初頭。

３）土壙　SK13（Fig.14）土壙は北端部 I2 グリッドで１基のみ検出した。不整方形で、南を造成で切られる。1.6+ α × 1.35m 深さ７㎝と浅く、底面は平坦である。遺物は中期～内面ハケ調整の後期の弥生土器小片が 30 数片出土したが、図化に耐える資料はない。

４）溝　溝は該期の中心となる遺構で、台地西縁に沿って途切れながら直線状に並ぶ SD05・21・23 と、中央部で北に緩く弧を描いてこれと直交する SD20 の４条を検出した。

SD05（Fig.15　PL4・5）H ～ J6 グリッドに位置する。全体が近世造成面にあるため、本来は 1m 前後深いと思われる。見かけは幅 40 ～ 65㎝程の小溝で、南東端部で深さ 50㎝、9m 先の調査区北端で 90㎝を測り底面は北西に下がり、底面の凹凸が著しい（下面）。方位は N － 56° － W にとる。子細に見ると、主軸が一直線で通らず、２～ 3m 単位に平面はくびれ主軸も細かく振れており、縦断底面もこの単位に呼応して浅い船底形を呈している。規格が画一化された溝ではなく、掘削面を横からではなく、上面から２～ 3m 単位の細長い土壙状にとり、溝状に繋げた結果と思われる。底面に地山土が流入した暗灰褐色土、黒灰色粘質土（4・3 層-下層）が自然堆積後 30㎝程地山土で客土し（2 層-中層）、一度粗い底浚えを実施し底面が著しい凹凸となる（上面）。さらに暗灰褐色土が自然堆積し（1 層-上層）、砂を含む水流は無い。遺物は上層でコンテナ 1/3、中下層で少量出土している。

出土遺物（Fig.16）62 ～ 66 は上層出土。62 ～ 64 は「逆Ｌ字」口縁甕で、外端は丸く収め内端がやや突出し口縁下を若干窪める。胴がやや張る。62 は口縁がやや厚く、口径 41.2㎝を測る。口縁内外から内面はナデ、外面三角突帯下に一部タテハケが残る。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含

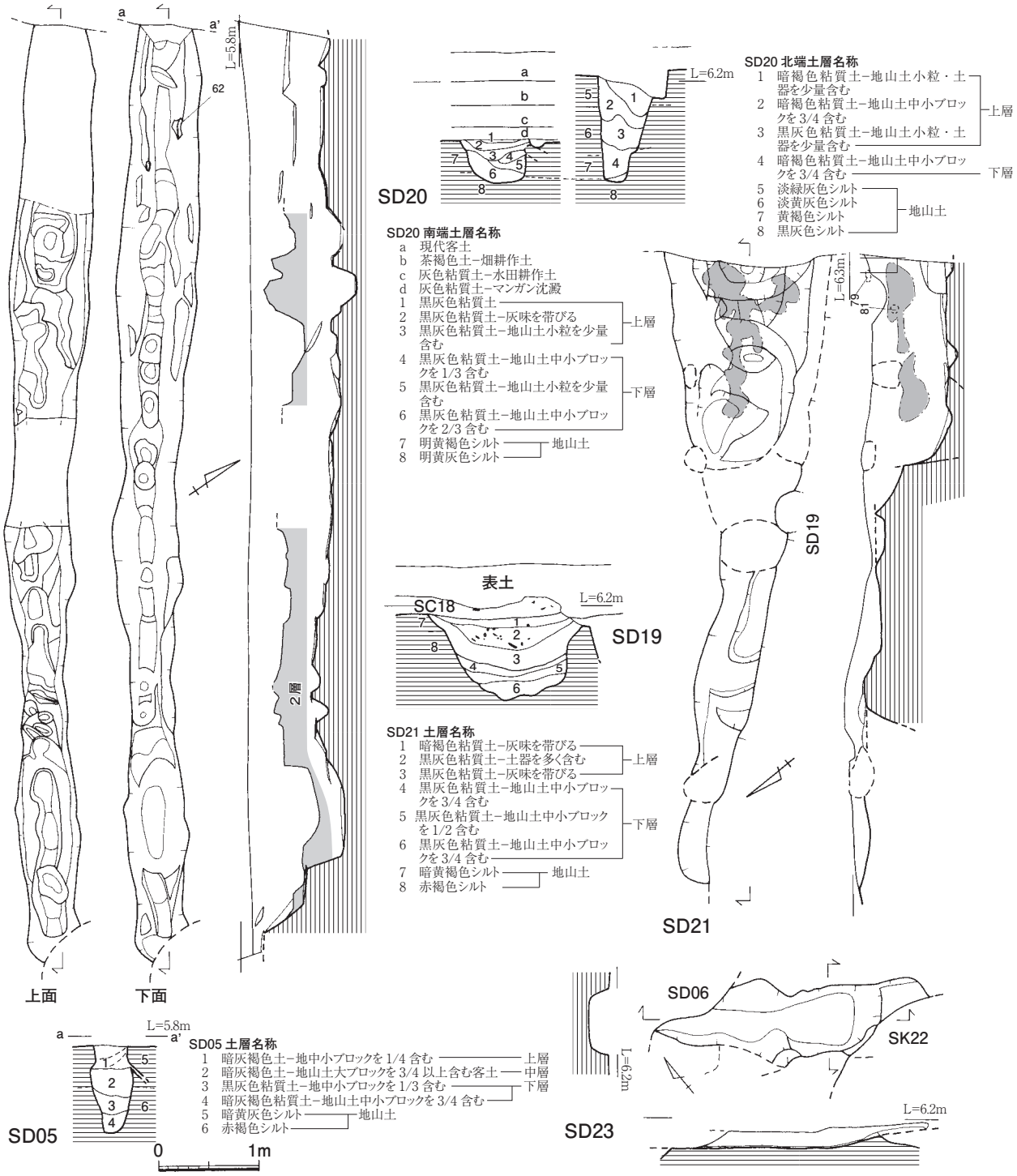


Fig.15 SD05･20･21･23 実測図（1/60）

み、外面は鈍い黄橙内面は橙色を呈する。63 は口縁が薄く、口径 33cmを測る。器壁は摩滅し調整不明。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含み、内外面ともに鈍い橙色を呈する。64 は口径 31cmを測り、器壁は摩滅し調整不明。胎土に石英粒を多く含み、内外面ともに明赤褐色を呈する。65 は瓢形か樽形の丹塗磨研壺の広い底部。底径 10cmを測り、外面底部脇のくびれは若干残る。胎土に石英粒・赤色粒を少量含み、露胎部は浅黄橙色を呈する。66 は支脚。径 10cmを測り、器壁が 3cm

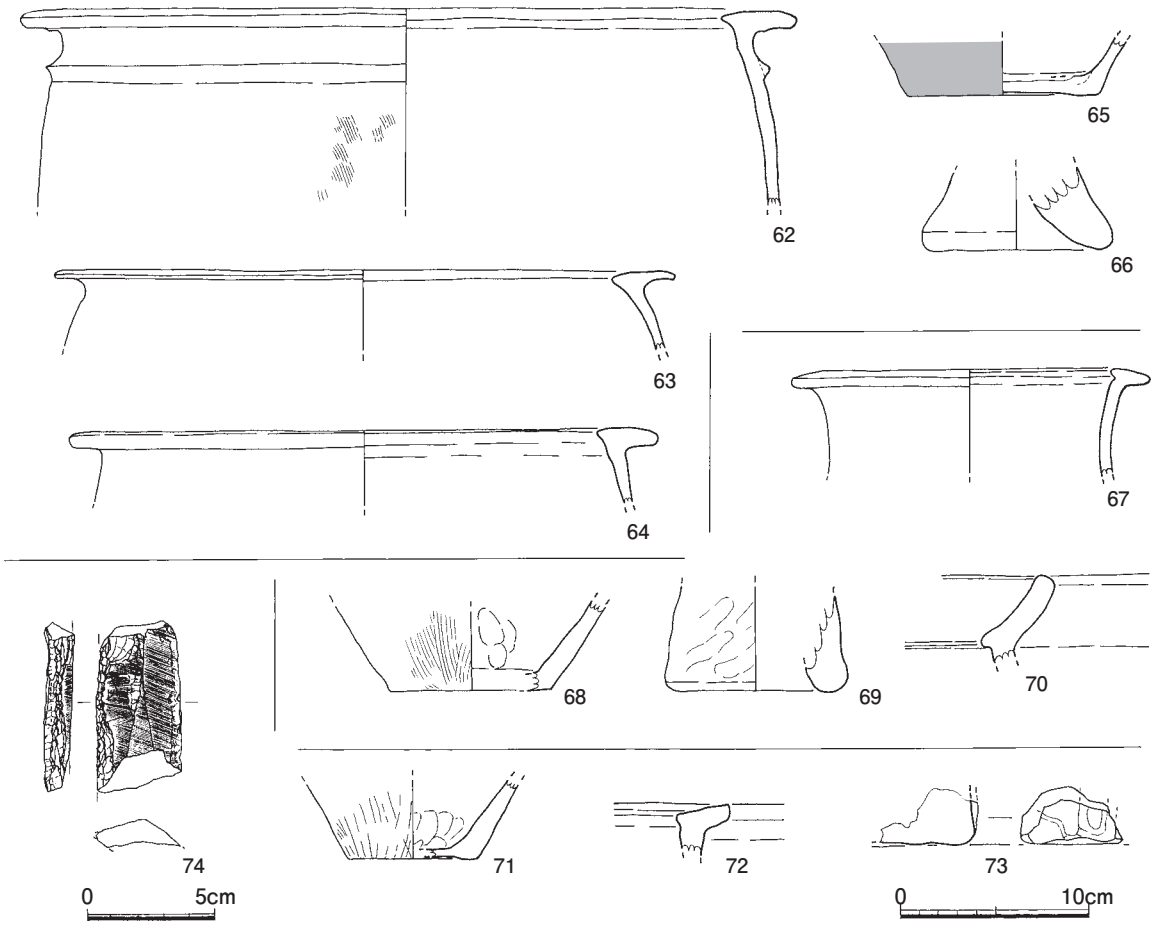


Fig.16 SD05 出土遺物実測図（1/4・1/3）

と極めて厚い。調整は不明。胎土に石英粒・赤色粒を多く含み、浅黄橙色を呈する。67 ～ 70 は中層客土出土。67 は口径 19cmを測る、短い「鋤先」口縁の壺。口縁上面は外傾し、外面にケンマを施す。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含み、外面は鈍い橙色内面は黄橙色を呈する。68 は甕の底部。底径 8.6cmを測り、器壁は薄く外面底部脇のくびれは無い。外面にやや粗いタテハケ内面にナデを施す。胎土に石英粒を少量含み、外面は黒褐色内面は鈍い浅黄橙色を呈する。69 は支脚。脚径 9.6cmを測り、器壁は 2cmと厚い。外面に粗いナナメユビナデを施す。胎土に石英粒・赤色粒を多く含み、外面は浅黄橙色内面は灰白色を呈する。70 は「く字」口縁の甕で、緩く湾曲し端部は丸く収める。内端が突出する。内外面にヨコナデ施す。胎土に石英粒を多く赤色粒を少量含み、外面は鈍い橙色内面は暗赤褐色を呈する。71 ～ 74 は下層出土。71 は甕底部。底径 7cmを測り、器壁は薄く外面底部脇のくびれは直線気味に長く若干残る。外面に粗いタテハケを内面に指頭圧とナデを施す。胎土に石英粒を多く角閃石・赤色粒を少量含み、灰黄褐色を呈する。72 は短い「逆Ｌ字」口縁甕で、外端は面取り気味にヨコハケ後ヨコナデ、内端が若干突出する。上面がやや内傾し 2 条の凹線様に窪ませ、内外面にヨコナデを施す。胎土に石英粒を多く含み、外面暗赤褐色内面暗褐色を呈する。73 は径 14cm程の、坩堝かガラス勾玉鋳型の脚部に似る土製品である。造作が粗く外面にタテ方向の粗いナデ痕が残る。底面は平坦で籾他の圧痕がある。74 は灰色ホルンフェルス製磨製石剣片の石器素材転用品で、両刃部に刃潰しの敲打を行い、縦に二分している。残存で 6.8 × 3.4 × 0.9cm 32g を測る。中期末に掘削し、後期初頭に客土を施工したと考えられる。

SD23（Fig.15）調査区中央の台地上、E5 グリッドに位置し、SD20・06 と北を近世造成に切られ

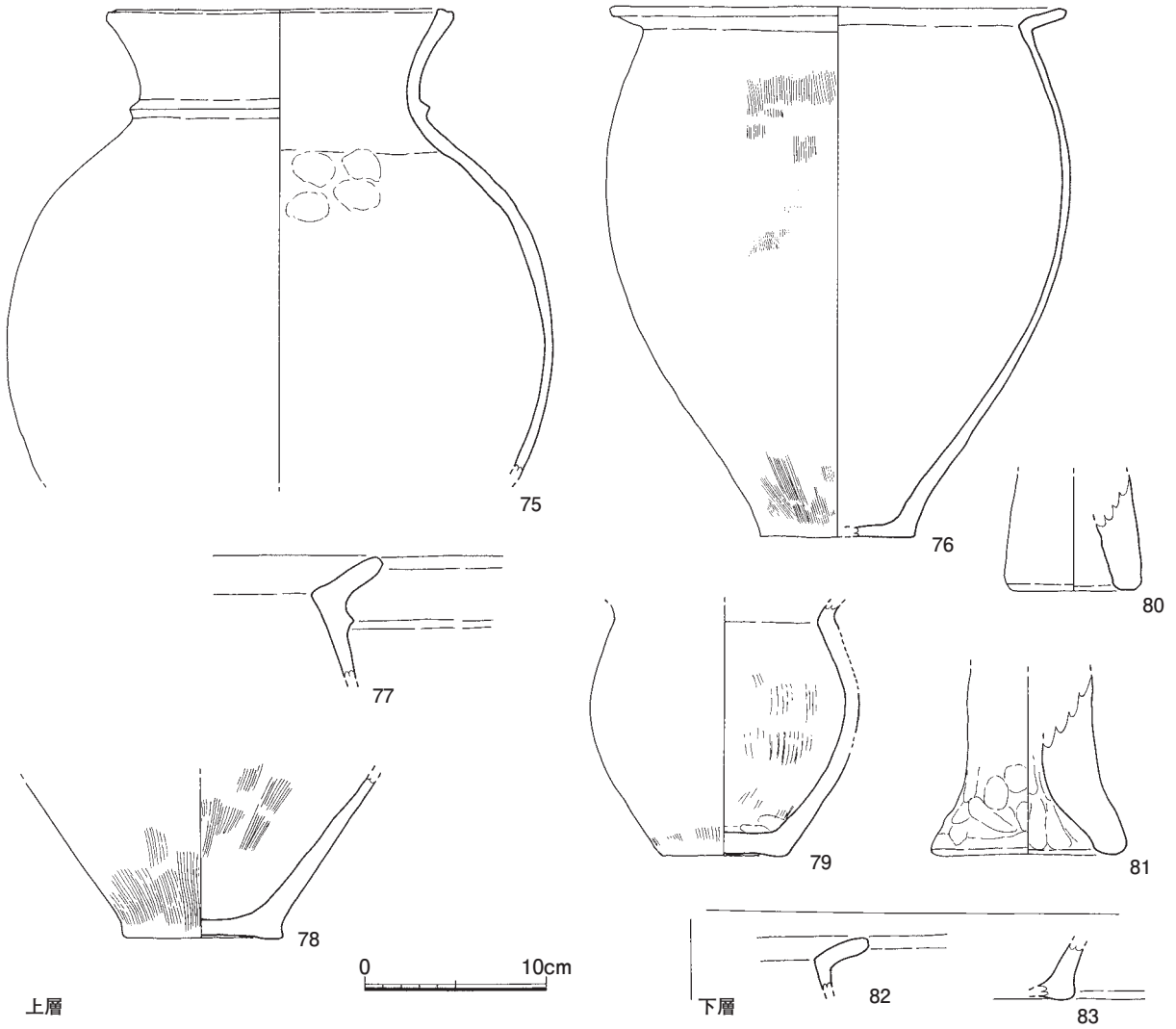


Fig.17 SD21 出土遺物実測図（1/4）

る。SD05 の延長線上にあり、残存長で 2.7m 幅 65 ～ 90cmを測り、溝端部が南西にあって深さ 7cm と 20cmの 2 段となっており、SD05 東端部の可能性がある。SD05 東端部底面から 90cm程高い。方位は N － 50° － W にとる。遺物は、掘削時 SD06 の一部と誤認していたため、06 に混在している。

SD21（Fig.15　PL5）調査区南部の台地上 A ～ C5 グリッドに位置する。SE45 を切り、SC18 と、**SD19** に北側の大半を切られるが、SD05・23 の延長上にあり、調査区南端部で幅 1.46m 深さ 80cm、中部で深さ 30cm、6m 先の北西端部で深さ 15cmと、縦断面が 3 段からなる。SD05・23 の様相と相似し、SD23 との間に 4m 弱の陸橋部を持つ一連の溝である可能性がある。方位は N － 49° － W にとる。底位に地山土が流入した黒灰粘質土（6 ～ 4 層-下層）が、上位に地山土を含まない黒灰色粘質土（3 ～ 1 層-上層）が自然堆積し、遺物は上層の 2 層土中に集中する。SD05 同様砂を含み水流は無いが、明らかな客土層（中層）も無い。遺物は上層でコンテナ 1/3、中下層で少量出土している。

出土遺物（Fig.17）**75** ～ **81** は上層出土。**75** は口径 19cm。短頸壺で口唇がやや肥厚し端面が窪む。頸部に三角突帯を 1 条施し、調整は不明。石英粒を多く赤色粒を少量含み浅黄橙色。**76** ～ **79** は甕で、**76**・**77** は断面「く字」口縁で外端は丸く収め内端が稜を成す。**76** は口径 25 器高 29 底径 8.4cm。胴が上位で張り底部は薄い。外面に細かなタテハケが残る。石英粒を多く含み内外面ともに橙色～暗褐色。**77** は外面口縁下に三角突帯を 1 条施す。調整は不明。石英粒を多く含み橙色。**78** は底部で

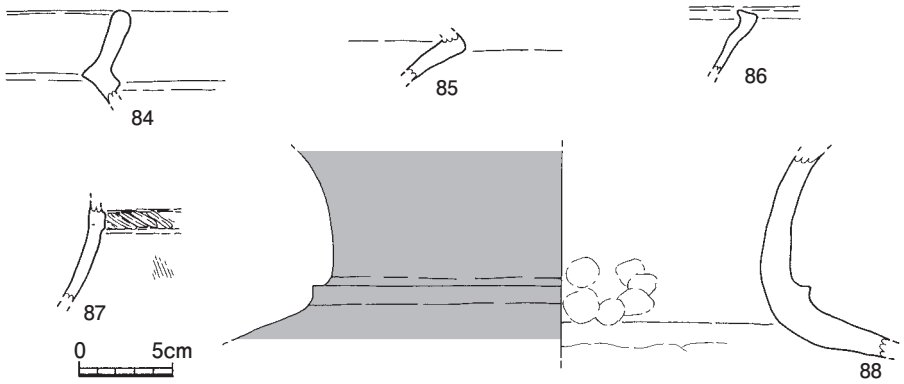


Fig.18 SD20 出土遺物実測図（1/4）

底径 8.8cm底厚 1cmと薄い。内外面に細かなタテハケを施す。石英粒を多く含み鈍い黄橙色。79 は小型の甕で口縁端部を欠く。底径 6.7cm。外底脇は直線的で胴が中位で張る。外面に細かなタテハケが残り内面に粗いタテハケ後ナデ底面に指頭圧痕が残る。石英粒を多く含み外面橙色内面は鈍い橙色。80 は器台。脚径 7.4cmを測り器壁は 2.2cmと厚い。調整は不明。石英粒を多く含み内外面ともに浅黄橙色。81 は支脚。脚径 10.7cm器壁は最大 3cmを測る。外面下位に指頭圧痕を上位と内面にタテナデを施す。石英粒を多く赤色粒を少量含み内外面ともに浅黄橙～橙色。82・83 は下層出土の甕。82 は「く字」口縁。外端は丸く収め内端が稜を成す。調整は不明。石英粒を多く含み内外面は橙色。83 は底部で外底脇のくびれは緩く底厚は 5mmと薄い。調整は不明。石英粒を多く含み内外面は鈍い橙色。中期末に掘削され、後期初頭まで使用されている。

SD20（Fig.15　PL5）E3 ～ E7 グリッドの台地上から低地の近世造成面の東西方向に位置する。北に緩い弧を描き、SD06 に切られ SD23 を切る。幅 50 ～ 100cm程の小溝で、台地上で深さ 105cm、低地部で 40cmを測るが、底面高はともに EL5.2m 程でほぼ水平である。SD05 の様な平面のくびれは有るが部分的で少ない。土層は、台地上で同じように底面に地山土が流入した黒褐～暗褐色粘質土（4・3 層）が自然堆積後、40cm程地山土で客土（2 層）しさらに暗褐色粘質土（上層）が堆積する。砂を含む堆積は無い。遺物は各層から少量出土している。

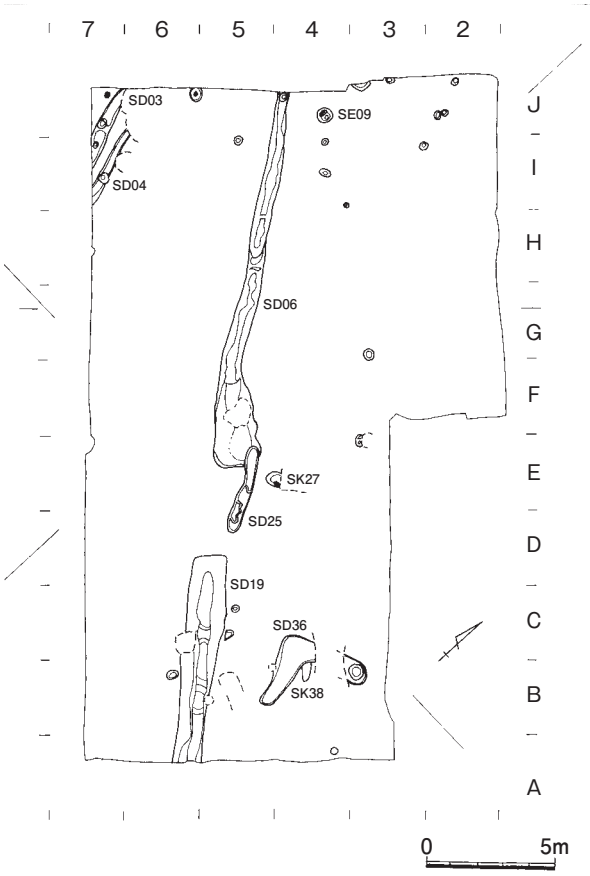


Fig.19 古墳時代遺構分布図（1/300）

出土遺物（Fig.18）84 は上層出土の「く字」口縁甕。口縁は緩く湾曲し外端は丸く収め内端が稜を成す。口縁下に三角突帯を施し調整は不明。石英粒を多く含み内外面は橙色。85 ～ 88 は下層出土。85 は二重口縁壺の屈曲部小片。調整は不明。石英粒を少量含み内外面は浅黄橙色。86 は器台の口縁小片。端面を浅く窪め内端が突出する。調整は不明。石英粒を多く赤色粒を少量含み外面は橙色内面は浅黄橙色。87 は壺胴部小片。外面に「コ字」突帯を施し細くナナメに刻む。外面に一部タテハケが残る。石英粒を多く赤色粒を少量含み外面は鈍い橙色内面は黄橙色。88 は丹塗大壺。頸部径 26cmで低い三角突帯を施し、器面は摩滅し内面に指頭圧痕が残る。石英粒を多く含み露胎部は橙色。後期前葉と思われる。

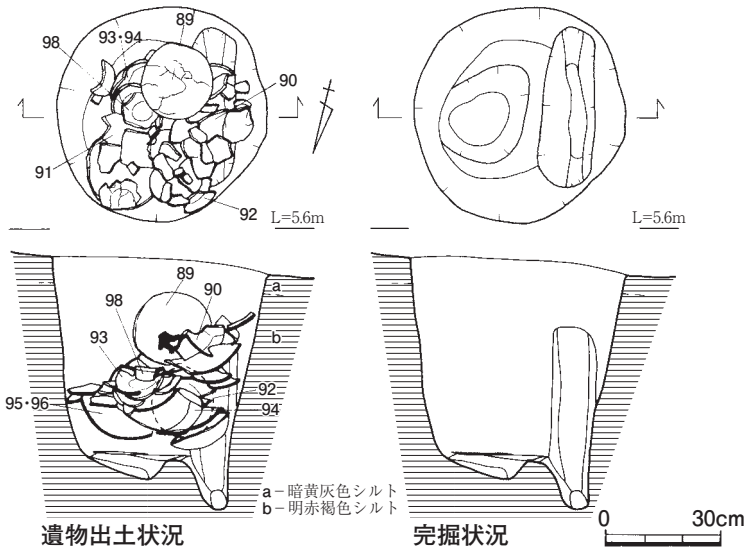


Fig.20 SE09 実測図（1/20）

4．古墳時代の調査

古墳時代の遺構は、前期で井戸1基・土壙2基・溝4条・柱穴16、後期で溝2条・柱穴6を検出し、18%程で、台地上を中心に散漫に分布する。住居の検出は無い。南東から北西に直線で延びる前期の溝は弥生後期の溝と重なり、2条並列溝の一部である。

1）井戸　SE09（Fig20　PL6-3･4）調査区北端のJ4グリッドの台地落ち際に位置する。円形プランで0.54×0.56m深さ58cmの小型の井戸で、底部分が残る。底面中央は径25cm深さ7cm程窪む。この底面の西側に42×13cm深さ48cmの地山白色脈を掘り抜いて板を差し込む様な掘り込みがあり、床面から3～5cm程粗砂礫が堆積し、この上位40cm程までに穿孔や打ち欠いた畿内系甕10個体前後の破損品が重なって出土した。図の上方にさらに堆積していたが、掘削中に雨水の流入で崩落した分は実測時に取り除いている。土器間には灰褐色粘質土が堆積する。遺物はコンテナ4箱分出土し、横になった甕内部から鉄製針金が出土している。

出土遺物（Fig.21）　**89**～**96**は畿内系の甕。**89**は口径15.8器高22.3cm。口縁の1/3を欠く。口縁はやや内湾し端部をハケ工具で面取り内端が突出する。胴部は球形を成す。胴外面上半はタテハケ後ヨコハケ下半は左上がりハケ後中位にヨコハケを施す。下半に12cm程の帯状に煤が厚く付着。内面頸部以下の上半に右上がりの中位にヨコケズリ下位に指頭圧･ナデを施す。使用後胴上位に径3.3×2.2cmに穿孔する。外面灰白～黒褐色内面灰黄褐～黒褐色。**90**は口径16.6器高25cm。全周の1/3を欠く。口縁は直線的で端面を窪ませ内端が突出する。胴外面上半はタテハケ後ヨコハケ下半に細かなタテハケを施す。下半に8cm程の帯状に煤が厚く付着。内面頸部以下の上半に右上がり中位に左上がりケズリ下位に多くの指頭圧・ナデを施す。使用後胴上位に径2.5cm程の穿孔をする。灰白～暗黄灰色。**91**は口径17器高22cm。全周の2/3を欠く。口縁は若干内湾し端面に沈線を施し内端が突出する。胴外面上半に細かなヨコハケ後1条の波状文を下半に左上がりハケを施す。内面頸部以下の上半に右上がり下半に左上がりケズリを施す。灰白色。**92**は口径15.4器高20.5cm。口縁の1/4を欠く。口縁は若干内湾し端部を面取り内端が突出する。胴外面上半に細かなヨコハケ後1条の沈線を中位にヨコナナメハケ下位にタテヨコハケを施し下半に煤が付着。内面頸部以下に右上がりのケズリを施し、横位に埋没したため横にマンガンが沈殿する。鈍い黄橙～黒灰色。内部から鉄製針金101が出土している。**93**は口径16.2器高20.1cm。口縁の1/2を打ち欠く。口縁は若干外反し端部を丸く収め内端が突出する。胴外面上半に右上がりの平行タタキを下半に細かなタテハケを施し中位に10cm程の帯状に煤が付着。内面頸部以下の上半に右上がり・ヨコのケズリを下半に左上がり・タテのケズリを施す。明黄褐～灰黄褐色。**94**は口径17.5器高26cm。胴部の1/4を欠く。口縁は若干内湾し端部を窪ませ内端が若干突出する。胴部は長めの底の広い球形を成す。胴外面上位に細かなヨコハケ後2条の沈線を中位にタテナナメハケ下位にタテハケを施し下半の8cm程の帯状に煤が厚く付着。内面頸部以下上位に右上がり中下位に左上がりのケズリを施す。浅黄橙色。**95**は口径15.8器高19.9cm。口縁の1/3を欠く。口縁は直線的に延び端部に面取り内端下が若干窪む。胴外面上半に細かな左上がり・ヨコのハケ後1条の

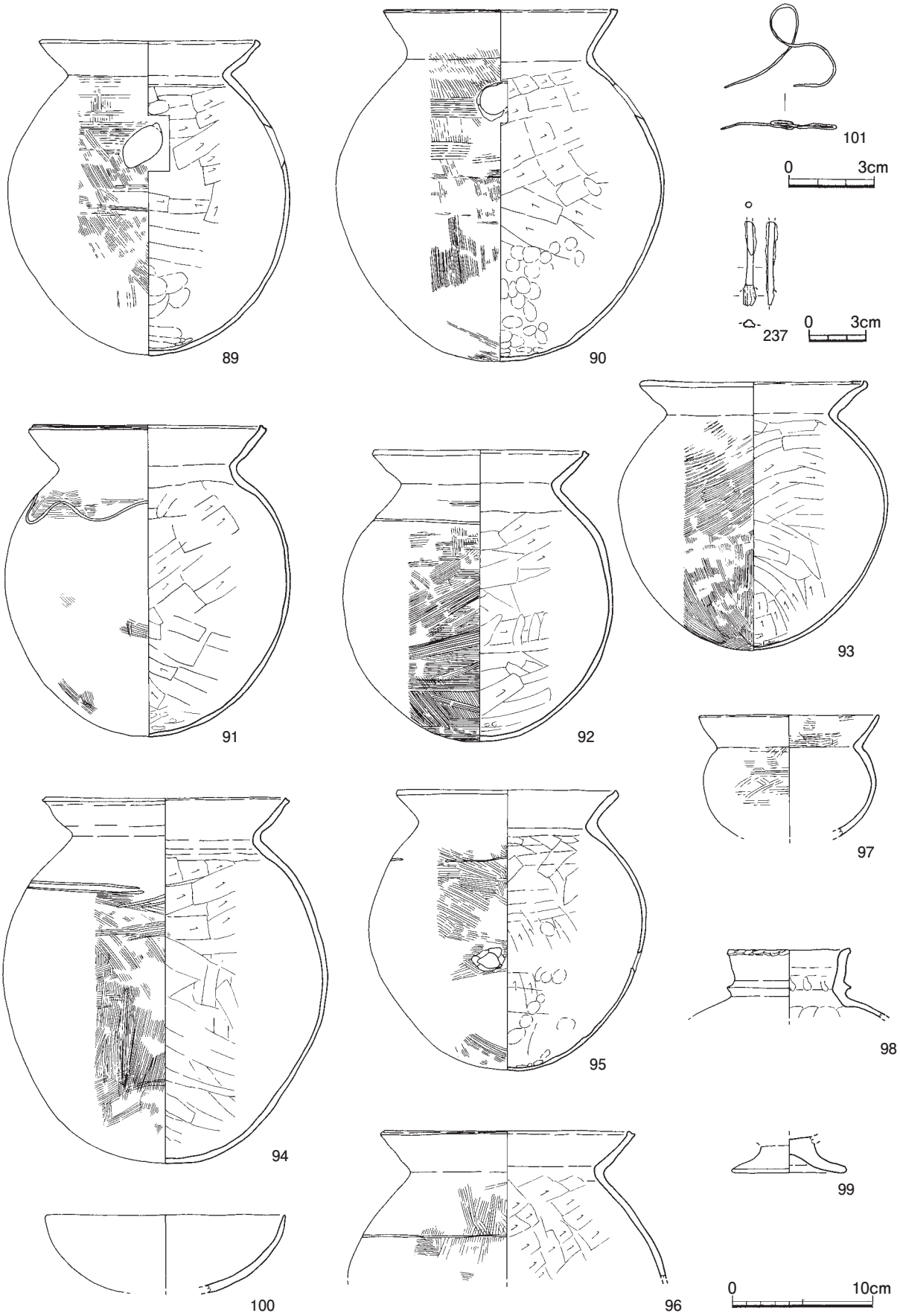


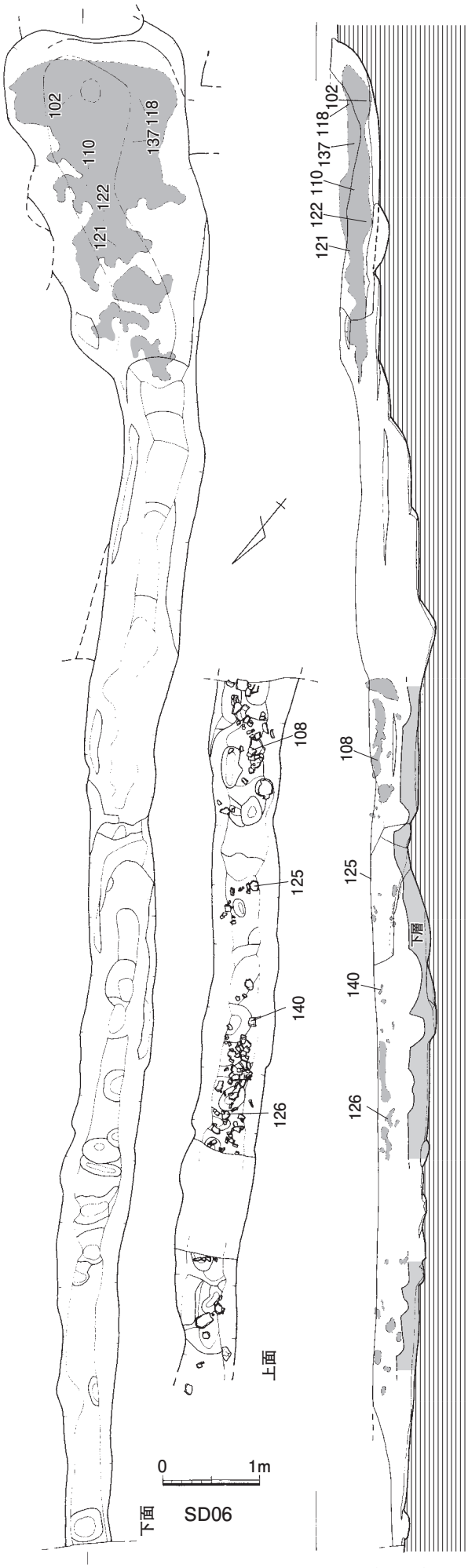
Fig.21 SE09 出土遺物実測図（1/4･1/3･1/2）

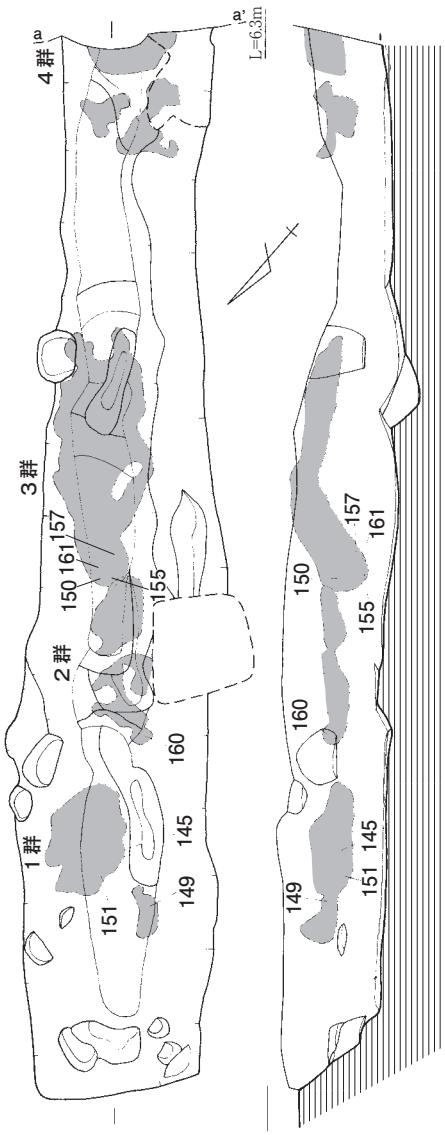
沈線を下半にナナメハケを施し全面に煤が付着する。内面頸部以下の上位に右上がり中位にヨコ下位にタテケズリを施す。使用後胴中位に径1.7 × 1.2cmに穿孔する。鈍い黄橙～灰黄褐色。96は口径18cm。口縁は若干内湾し内外にヨコハケ後ヨコナデ端部を窪ませ内端が若干突出する。胴外面上位にタテハケ後緩いナデ、1条の沈線を施す。内面頸部以下上位に右上がりのケズリを施す。鈍い黄橙色。97は小型丸底坩で口径12.8cm。口縁は直線的に延び端部を丸く収める。内面はヨコハケ後ヨコナデ。胴は扁球状で外面にヨコナナメハケ後緩いナデを施す。黄褐色。98は口縁打ち欠きの二重口縁壺で口径8cm。外面頸部に三角突帯を胴内面頸部下にケズリを施す。橙色。99は山陰系低脚坏の脚部。脚径8.2cm。調整は不明。橙色。100は坏で口径17cm。調整は不明。浅黄橙色。101は92内出土の鉄製針金。断面は径0.95 ～ 0.7mmの円形。茶褐色に錆化するが表面だけで、本体は白銀色のメタルが残る。恣意的に握り曲げた状態で、延べ10.6cm 0.4gを測る。引きによる整形と思われるが表面の錆化で痕跡は伺えない。剛性は高く押すと反発する。端面は斜めで端が引き延びており鏨によるに切断と思われる。237は棒状鉄製品。断面3mmの円形で現況で全長4.4cm 3gを測る。端面が幅6mmに広がり裏面が剥離するため用具容器の柄と考えられる。前期中頃を示す。

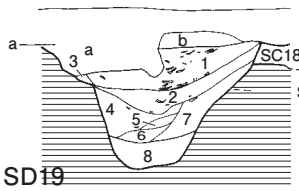
２).溝　溝は前期で、弥生後期の溝と重なって台地西縁に沿い陸橋部を挟んで直線に連なるSD06・17・25と、東部で直角に屈曲するSD36、東の低地部で南北に並行する後期のSD03・04を検出した。

SD06（Fig.22　PL6 ～ 8）E5 ～ J4グリッドに位置する。台地上で幅180低地部で幅40 ～ 80cm程で、SD05同様平面3 ～ 4.5m単位の長細い土壙が主軸を細かく振れながら、縦断底面は浅い船底形が連なった状態である。南東端部で深さ50cm・GL－5.7mから、低地部に深さ10 ～ 20cm程の階段状に40cm下がり、15m先の調査区端で40cm・GL－5.4mを測り底面は北西に下がる（下面）。方位はN－37°－Wにとる。底面に低地部で地山土が流入した黒灰色粘質土、台地部で暗褐色土（2・3層-下層）が自然堆積し一度粗い底浚えを実施し底面が著しい凹凸となる（上面）。この上に黒灰色粘質土が自然堆積し、（1・2層-上層）遺物の大半は上層の中位からまとまって出土する。台地上の東端部で下層に粗砂を含む。遺物は上層でコンテナ12箱分、下層で少量出土している。

出土遺物（Fig.23・24）全て上層出土で102 ～ 104・107は畿内系二重口縁壺。102は口径20.4cm。屈曲部は三角突帯状に整え下面は水平。上位は緩く外反し端部が窪む。橙色。103は庄内系で口径20cm。緩く内湾外傾する下半から稜を成して屈曲し上位は緩く外反し端部は丸く収める。内面頸部直下に指頭圧痕が2段に残る。調整は不明瞭。浅黄橙色。104は小型で口径16cm。屈曲部は三角突帯状に整え下面は水平で頸部は狭い。石英粒を少量含み橙色～浅黄橙色。107は布留系で口縁上位下部に連続竹管文を施す。端部は面取り。外面は黒色内面は灰白色。105は山陰系二重口縁壺。口径19cm。屈曲部は稜を成し上位は緩く外湾外傾し端部を丸く収める。頸部のくびれが無くなだらかに胴部に移行する。外面頸部にヨコハケ後丹塗りを内面頸部下にケズリを施す。浅黄橙色。106は口径40cm前後の豊前系二重口縁壺。口縁屈曲部は稜を成し上位は緩く内湾外傾し端部を丸く収める。浅黄橙色。108・109は布留系直口壺。108は口径15cmで狭い口縁が緩く外反し外面にケンマを肩部に細かなヨコハケ以下にナナメハケを、内面頸部以下の上位にヨコ中位に左上がりケズリを施す。鈍い黄橙色。109は口径14.8cmで口縁端面に沈線を施し内端が若干突出する。内外をヨコナデし、内面頸部以下に右上がりケズリを施す。鈍い橙色。110は庄内甕のフォルムの壺で口径21cm。口縁が甕の倍近い長さで外反し端部は丸く収め内端下を若干窪める。外面にタテハケ後ヨコナデし胴上位に細かなヨコ中位にナナメ下位にタテハケを施し、緩い稜の内面頸部下に、中位にヨコ上位に左上がりケズリを施す。鈍い橙～黄橙色。111・112は畿内系壺底部で111は径4.3cmの小さな上げ底で、底面中央を径1cm程窪ませ外底脇を若干窪ませ胴が強く張る。外面橙色内面浅黄橙色。112は径5.5cmのレンズ底で尖底に近い。底面中央を小さく窪ませ外底脇が若干窪む。内底に蜘蛛の巣状のハケメが残る。橙色～浅黄橙色。113は小型の直口壺で口径11.9cm。器壁が薄く、浅黄橙色。114 ～ 116は小型丸底坩。114は



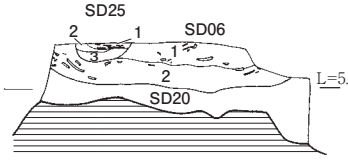




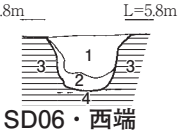
SD19 土層名称

- a 現代客土
- b 茶褐色土−畑耕作土
- 1 暗褐色粘質土−褐味を帯びる・土器を多量に含む
- 2 暗褐色粘質土−灰味を帯びる・土器を多量に含む
- 3 暗褐色粘質土−地山土小粒を3/4含む
- 4 暗褐色粘質土−黒味を帯びる
- 5 黒灰色粘質土
- 6 黒灰色粘質土−灰味を帯びる
- 7 暗褐色粘質土−黒味を帯びる
- 8 黒灰色粘質土−地山土中小ブロックを3/4含む

（1〜8：上層／7〜8：下層）



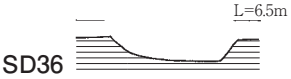
SD06・E5



SD06・西端

SD25 土層名称

- 1 黒灰色土−土器を多く含む
- 2 黒灰色土
- 3 黒灰色土−地山小粒・粗砂を1/2含む



SD36

SD06 西端土層名称

- 1 黒灰色粘質土−地山土中小ブロックを1/3含む・土器を多く含む ── 上層
- 2 黒灰色粘質土−地山土中小ブロックを3/4含む ── 下層
- 3 暗黄灰色シルト ── 地山土
- 4 明赤褐色シルト ── 地山土

SD06・E5 土層名称

- 1 褐色土−土器を多く含む ── 上層
- 2 暗褐色土−やや砂質を帯びる・土器を多く含む ── 上層
- 3 暗褐色土−地山土中小ブロック・粗砂を2/3含む ── 下層

Fig.22 SD06･19･25･36 実測図（1/60）

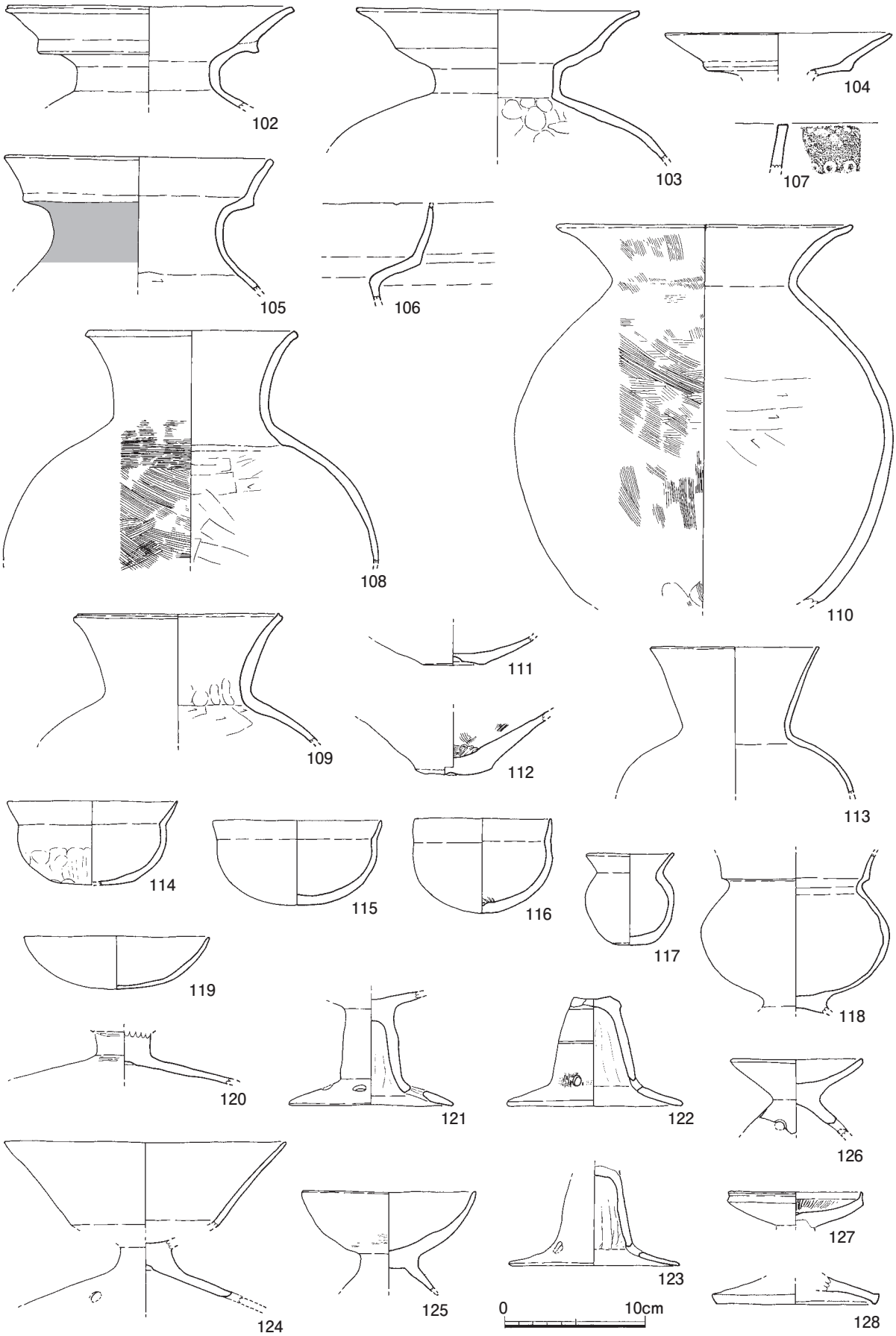


Fig.23 SD06 出土遺物実測図 .1（1/4）

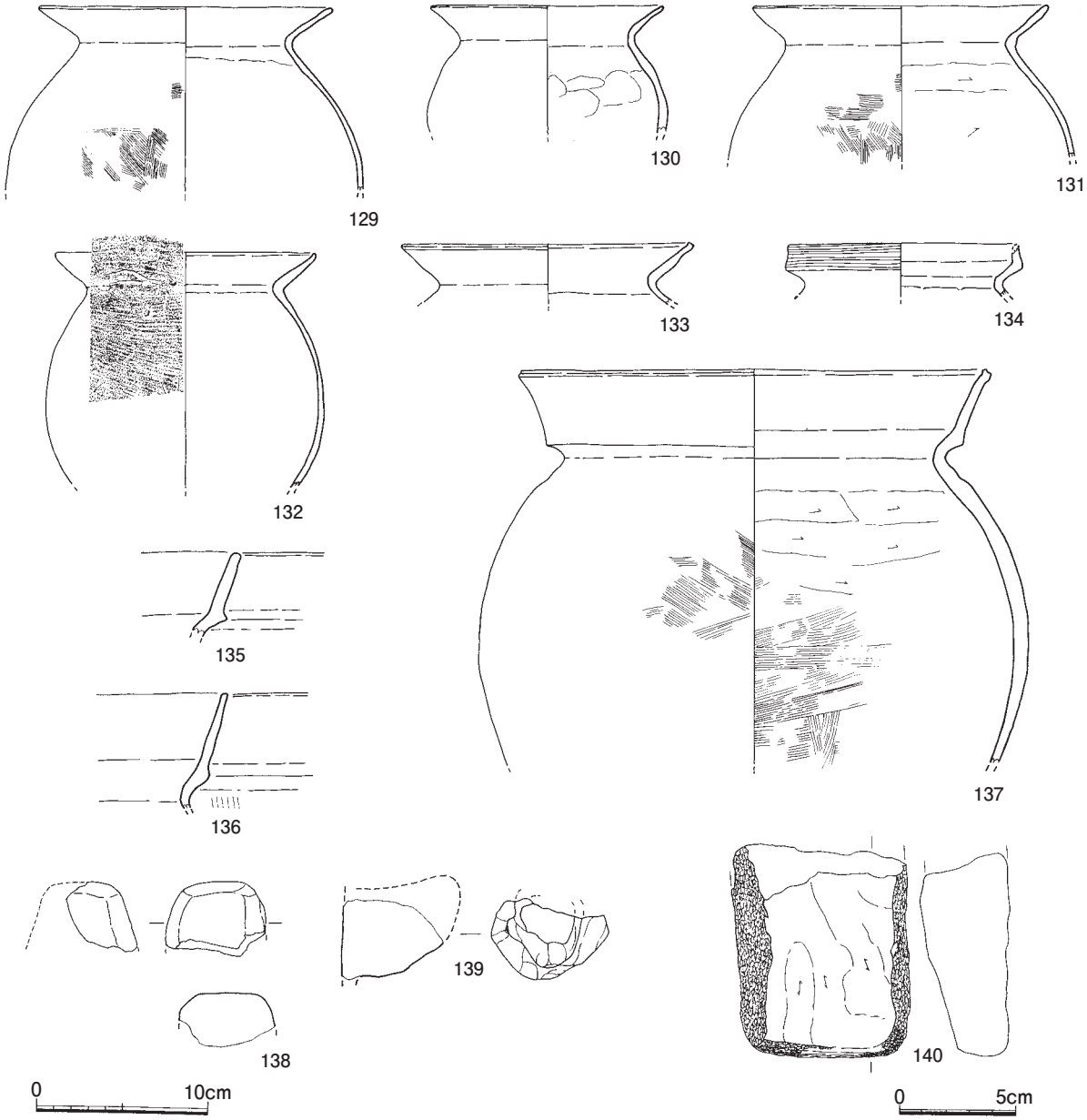


Fig.24 SD06 出土遺物実測図 .2（1/4・石器 1/3）

口径 12 器高 5.9cm。口縁がやや外傾し端部は細く仕上げる。体部外面下半はケズリ後粗くナデる。橙色。115 は口径 12 器高 6cmで、口縁は短く内湾外傾する。内外をヨコナデ。橙色。116 は口径 9.7 器高 6.7cm。口縁は短く内湾直立する。内底にヘラ当て痕が残る。外面灰白内面黒褐色。117 はミニチュアの坩。口径 6.2 器高 6.5cm。橙色。118 は山陰系の脚付二重口縁壺。口径 12cm程で低脚。橙色。119 は坏で口径 13 器高 3.8cm。浅い器体で内外にヨコハケ後ナデを施す。橙色。120 は山陰系の低脚坏の脚部。径 16cm以上で大きく、上面は接合面で剥離する。内底は径 1.5cm程窪む。橙色。121 ～ 125 は高坏。121 は円柱に近い脚部で脚径 11.6cm。裾部が稜を成して屈曲し径 1cmの透かし孔を 4 ヶ所施す。外面橙色内面浅黄橙色。122・123 は湾曲して裾に太くなる脚部で、122 は脚径 12.4cm。外面に細かなタテハケ後ナデ・ケンマを中位に沈線を 1 条施す。裾部に径 8mmの透かし孔を 3 ヶ所施す。坏部は丁寧に打ち欠く。橙色。123 は脚径 12cm。裾部は緩く外反し径 8mmの透かし孔を 2 ヶ所施す。坏接合面に放射状ヘラ刻みがある。浅黄橙～黄橙色。124 は山陰系の低脚坏で口径 20cm。体部が深く下位

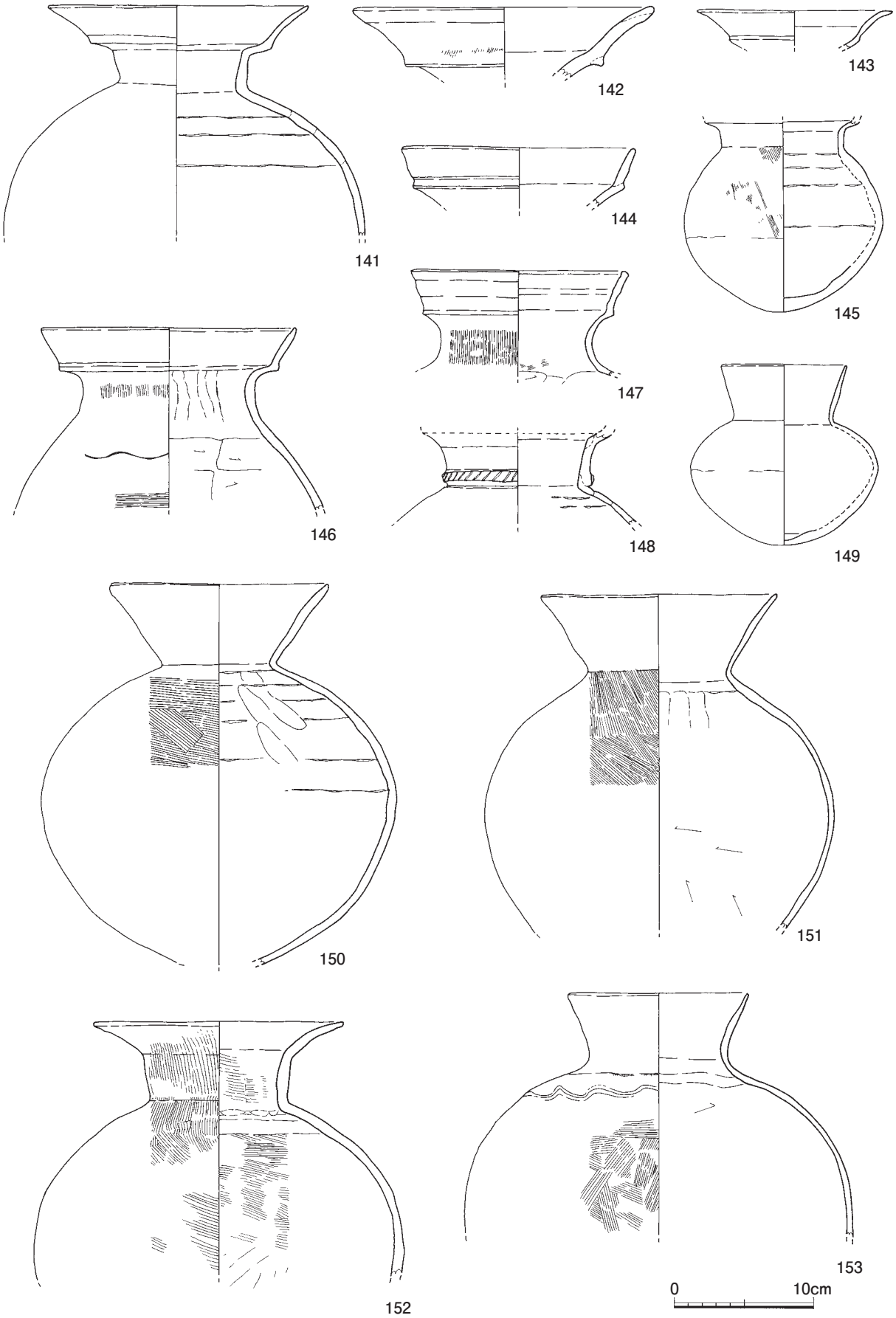


Fig.25　SD19 出土遺物実測図 .1（1/4）

でやや緩く屈曲する。低脚とは接合しないが径 17cm以上で大きく、裾部に径 8mmの透かし孔を 3 ヶ所施す。内底は径 1cm程窪む。浅黄橙色。125 は小型の低脚坏で口径 12.2cm。丸い体部で内面にケンマが残る。外面鈍い黄橙色内面は橙色。126・127 は小型器台。126 は口径 9.5cmで体部が深く口縁端部は面取りで内端の突出は無い。脚中位に径 7mmの透かし孔を 3 ヶ所施す。橙色。127 は庄内系で口径 9.4cmで体部が浅く、上位で屈曲し口縁が 5mm程短く外反直立する。内外面にケンマを内面に放射状の暗文を施す。橙色。128 は山陰系の小型低脚坏の脚部。径 12cmで端部は面取りする。浅黄橙色。129 ～ 133 は畿内系の甕。129 は口径 17cm。口縁は直線的に延び端部を丸く収める。頸部内面の稜はやや緩い。胴部外面に細かなハケと沈線の一部が残る。鈍い黄橙色。130 は口径 13.5cm。口縁は緩く外反し端部を丸く収める。灰白色。131 は口径 17.2cm。口縁は緩く内湾外傾し端部を丸く収める。頸部内面の稜は緩い。胴部外面に細かなハケが一部残る。浅黄橙色。132 は口径 15cm。口縁は直線的に延び端部を丸く収め内端がやや突出する。頸部内面の稜はやや緩い。口縁から胴部外面に左上がりの細筋タタキ後口縁を緩くナデる。外面橙色内面灰白色。133 は口径 17cm。口縁は直線的に延び端部を肥厚して丸く収め沈線を施す。内外にヨコナデ、頸部内面は稜を成さず以下にケズリを施す。黄橙色。134 は吉備系の多条沈線甕。口径 14cm。短く直立する二重口縁の外面にハケ工具による 7 条の沈線を施す。頸部内面の稜は緩く以下にケズリを施す。鈍い浅黄橙色。135 ～ 136 は山陰系二重口縁甕。135 は屈曲部が断面三角形に稜を成し上位は直線的に外傾し端部を丸く収める。内外面にヨコナデを施す。外面灰黄褐色内面鈍い浅黄橙色。136 は屈曲部が低い断面三角形に稜を成し上位は直線的に外傾し端部を面取りする。外面頸部にタテハケが残る。浅黄橙色。137 は口径 27.3cm。屈曲部が稜を成し上位は緩く外反し端部を肥厚し端面に沈線を施す。内外をヨコナデし胴外面に細かなナナメハケが残り、内面頸部以下の上位にヨコケズリ中位にヨコナナメハケを施す。鈍い黄橙色。138 は台形の支脚で上面幅 4.4cm。鈍い橙色。139 は半島軟質系土器の把手片、基部で幅 4.2 先端で 3.1 残存長 6.2 cmを測る。粗いナデ調整で、上面の切り込みの有無は不明。鈍い黄橙色。140 は中粒砂岩製の叩石転用の砥石。上平坦面を主な砥面に、浅い 2 条の縦凹面がある。先端と両側面を細かな敲きに使用。幅 7.8 厚 4 残存長 9.3cm 460g。前期前半を示す。

SD19（Fig.22　PL8・9）A6 ～ D5 グリッドの台地上に位置する。3.5m の陸橋部を挟んで SD05 の東延長上に連なる。幅 1.2 ～ 1.5m 程で、縦断底面は長さ 2 ～ 3m 単位で浅い船底形が連なる。SD05 と相似し段を有する北西端部で深さ 80cm・GL - 5.3m から 6m 先の調査区端で 100cm・GL - 5.35m とほぼ水平となる。方位は N ー 40° ー W にとる。底面に地山土が流入した黒灰色粘質土（8･7 層-下層）が自然堆積し一度粗い底浚えを実施し、この上に 6 ～ 1 層（上層）が堆積し、遺物の大半は上層の中位から上でまとまって出土する。遺物は上層でコンテナ 18 箱分、下層で少量出土している。

出土遺物（Fig.25 ～ 28）141 ～ 205 は上層出土。141 ～ 160 は壺。141 ～ 144 は畿内系二重口縁壺。141 は口径 18.6cm。内湾外傾する下位に屈曲部は低い三角突帯状に、上位は緩く外反し端部は細い。内面に接合痕が残り調整不明。明赤褐色。142 は口径 21.6cm。外反する下半に屈曲部は三角突帯状に、上位は緩く外反し端部は丸い。器壁が厚い。外面にタテハケ後内外をヨコナデ。橙色。143 は小型で口径 14cm。形態は 141 に似る。調整不明。外面橙色内面浅黄橙色。144 は口径 16.6cm。屈曲部稜上を沈線状に、上位は直線的に外反し端部は丸い。内外にヨコナデ。鈍い黄橙色。145 ～ 148 は山陰系二重口縁壺。145 は口径 11cmで口縁上部を欠く。頸部の屈曲はなだらか。内外にヨコナデ胴外面上位にナナメハケ内面に接合痕が残る。橙色。146 は口径 18.2cm屈曲部は三角突帯状に下面は水平。上位は緩く外反し端部は丸い。頸部から胴部になだらかに移行。外面頸部にタテハケ後ヨコナデ内面にタテナデ。胴外面上位に波状文、以下にヨコハケ内面頸部下にヨコケズリ。灰白色。147 は口径 15.6cmで屈曲部の角度は広い。端部面取りし内端がやや突出。内外にヨコナデ外面頸部にタテハケ後ヨコナデ内面にヨコハケ後ヨコナデ、以下にケズリ。橙色。148 は豊前系二重口縁壺で口縁上半を欠く。頸部に「コ字」の刻目突帯を施す。内面に接合痕、調整不明。橙色。149 は小型直口壺。口

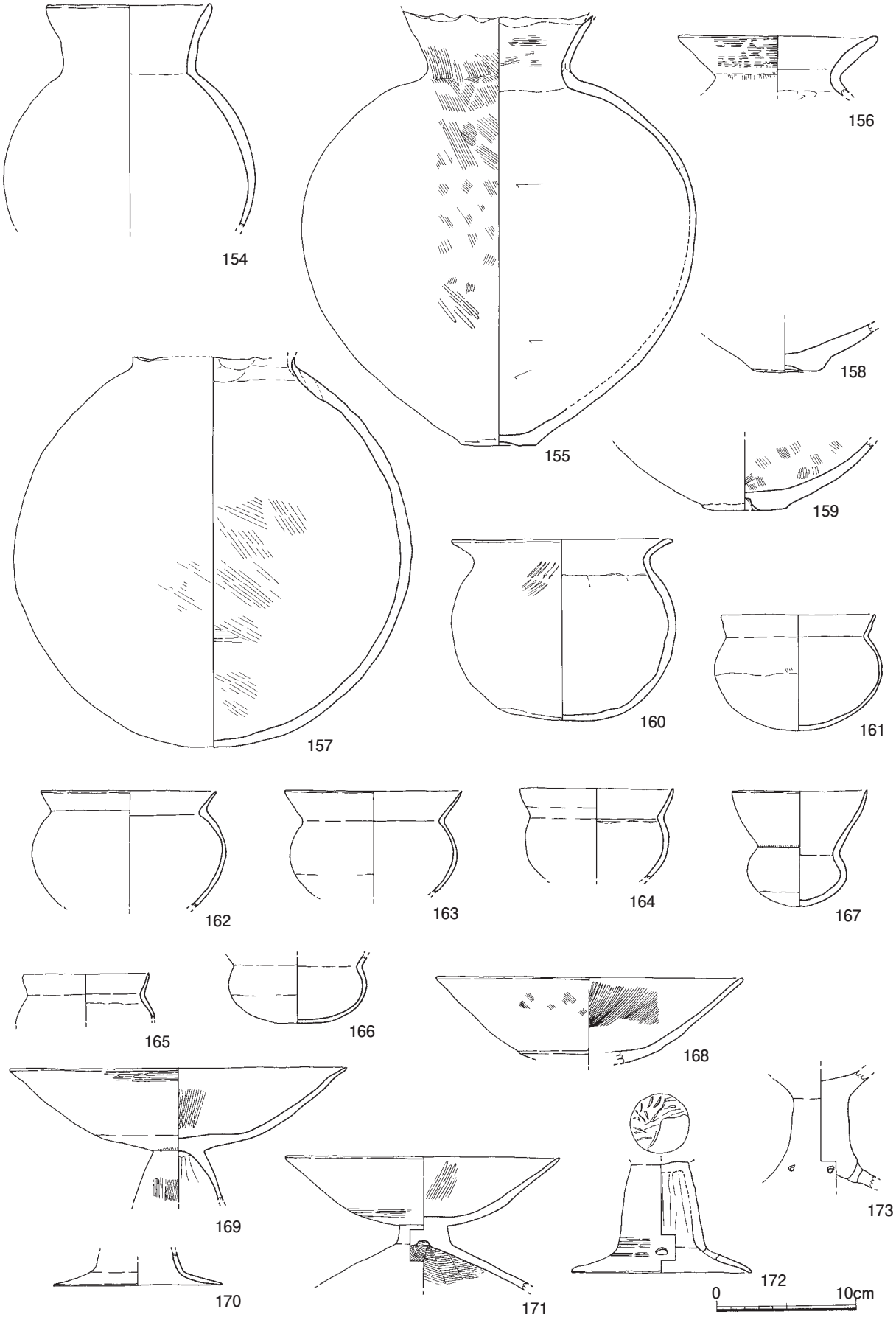


Fig.26　SD19 出土遺物実測図 .2（1/4）

径 9 器高 12.9cm。体部が尖底気味の丸底で下半はケズリか、調整は不明瞭。鈍い橙色。150・151 は布留系直口壺。150 は口径 15.6cmで胴上半にハケメ内面に接合痕、調整は不明瞭。鈍い橙色。151 は口径 17cmで胴上半にハケメ内面にタテナデが残るが、調整は不明瞭。橙～浅黄橙色。152 は口縁上半が開く単口縁で径 18cm。外面頸部～胴部にハケメ内面頸部に粗いヨコハケ後ナデ、指頭圧下の上半にナナメハケ下半にケズリ。外面橙～黄橙色内面浅黄橙色。153 は小口縁の直口壺。口径 13 胴径 27.5cm。胴上半にハケメ肩部に 3 条の波状文、調整は不明瞭。鈍い黄橙～浅黄橙色。154 は口径の広い直口壺。口径 12 胴径 18cm。調整不明。鈍い黄橙～橙色。155 は五様式系の直口壺。口縁を意図的に打ち欠く。現況で口径 13.5 胴径 28.3 器高 31cm。外面にハケメ後胴部ナデ・粗いケンマ口縁内面にヨコハケ後ヨコナデ、調整は不明瞭。外底は径 5.2cmの上げ底で外底脇はややくびれる。橙色。156 は短い単口縁の壺で口径 14.4cm。口縁内外面に粗いヨコハケ後ナデ、胴外面にタテハケ内面にケズリ。鈍い黄橙色。157 は布留系の直口壺と思われ口縁を意図的に打ち欠く。胴径 28.5 器高 28cm。胴外面に粗いハケメ後ナデ消し内面に左上がりハケ。鈍い橙色。158･159 は五様式系壺の底部。158 は径 4.6 cmの上げ底で外底のくびれが高い。粗いナデ後ケンマ。橙色。159 は径 5.6cmでくびれの小さい外底中央をヘラで抉る。外面にケンマ内面に左上がりハケ。鈍い橙色。160 は小型壺。口径 15.8 器高 13.1 cm。外面に右上がりタタキ外底はケズリ後ナデでレンズ底を呈し内面にケズリ、調整不明瞭。鈍い橙色。161 ～ 166 は小型丸底坩。161 は口径 11 器高 8.3cm。口縁は短く外面胴部上半にハケメ下半はケズリか、調整は不明瞭。橙色。162 は胴径が上回り口径 12.6 胴径 14cm。口縁は薄く短い。調整不明。橙色。163・164 は口縁が若干長い。163 は口径 12.6cm。調整不明。橙色。164 は口径 12.6cm。外面にハケ後ナデ・ケンマ、下半はケズリ後ナデ。橙色。165 は短口縁で若干内湾。口径 9cm。調整不明。橙色。166 は扁球胴で胴径 10cm。外面下半はケズリ後ナデか、調整は不明瞭。外面浅黄橙色内面灰黄色。167 は口縁が長く胴部が小さい。口径 9.7 器高 8.3cm。調整不明。浅黄橙～鈍い黄橙色。168 ～ 173 は高坏。168 は口径 22cm。下位屈曲部で小さな段を成す。外面にハケ後ナデ・ケンマ、内面に細かなタテケンマ。橙色。169 は口径 24.2 坏部が浅く下位屈曲は緩い。外面にナナメハケ後ヨコナデ・ケンマ内面はタテケンマ、脚は裾に広がり外面に細かなタテハケ。橙色。170 は裾の短い脚。径 12 cm。器壁が薄く裾は直線的。調整不明。黄橙色。171 は山陰系の低脚坏で口径 19.6cm。体部が浅く屈曲は無い。外面にヨコハケ後ヨコナデ・ケンマ内面はナナメハケ後ヨコナデ・ナナメケンマ、脚は裾が広がり外面にヨコハケ後ヨコナデ・ケンマ内底に蜘蛛の巣状のヨコハケ。橙色。172 は 169･170 と同類。裾径 13cm。裾部に径 10mmの透かし孔を 2 ヶ所施す。調整不明。坏接合面にヘラ刻みを多数施す。橙色。173 は瀬戸内系。坏部は深く脚は中実。裾部は厚く径 5mmの透かし孔を前面に 3 ヶ所対位置に 1 ヶ所施す。調整不明。黄褐色。174 ～ 176 は畿内系小型器台。174 は口径 11.5cmで体部が深く口縁端部は短く屈曲外反。調整不明。橙色。175 は口径 10.2cmで内面に細いタテケンマ。橙色。176 は脚で径 11.9cm。中位に径 8mmの透かし孔を 3 ヶ所施す。内面にヨコハケが残るが調整は不明瞭。橙色。177 ～ 191 は畿内系甕。177 ～ 183 は口縁が直線的。177 は口径 13.8 器高 15.3cm。口縁端部は丸く内端が若干突出。胴部は尖底気味の丸底で外面にヨコを主とした細筋タタキ内面上半に細かなヨコハケが残る。外面暗褐内面鈍い橙色。178 は口径 16cm。口縁端は面取り。調整不明。浅黄橙色。179 は口径 17.8cm。口縁端は面取りし内端が若干突出。内外にヨコナデ胴外面に細かなタテハケ内面頸部下にヨコケズリ。橙色。180 は口径 15.5cm。口縁端は面取りし外端が突出。内外にヨコナデ胴外面にナナメハケ内面頸部下にヨコケズリ。浅黄橙色。181 は口径 14.6cm。口縁端は丸く内端下を窪める。調整不明。鈍い黄橙色。182 は口径 16cm。口縁端は細く内端下を若干窪める。調整不明。浅黄橙色。183 は口径 13.5cm。口縁端部は丸く内端が若干突出。胴部に右上がり細筋タタキを施すが調整は不明瞭。外面鈍い黄橙内面浅黄橙色。184 ～ 189 は口縁がやや内湾外傾する。184 は口径 14.6cm。口縁端は面取りし内端が若干突出。調整は不明瞭。褐灰色。185 は口径 17.2cm。口縁端は面取りし内端が若干突出。外面タテハケ後内外ヨコナデ内面頸部下にケズリ。外面灰白内面浅黄橙色。186 は口径 16cm。口縁

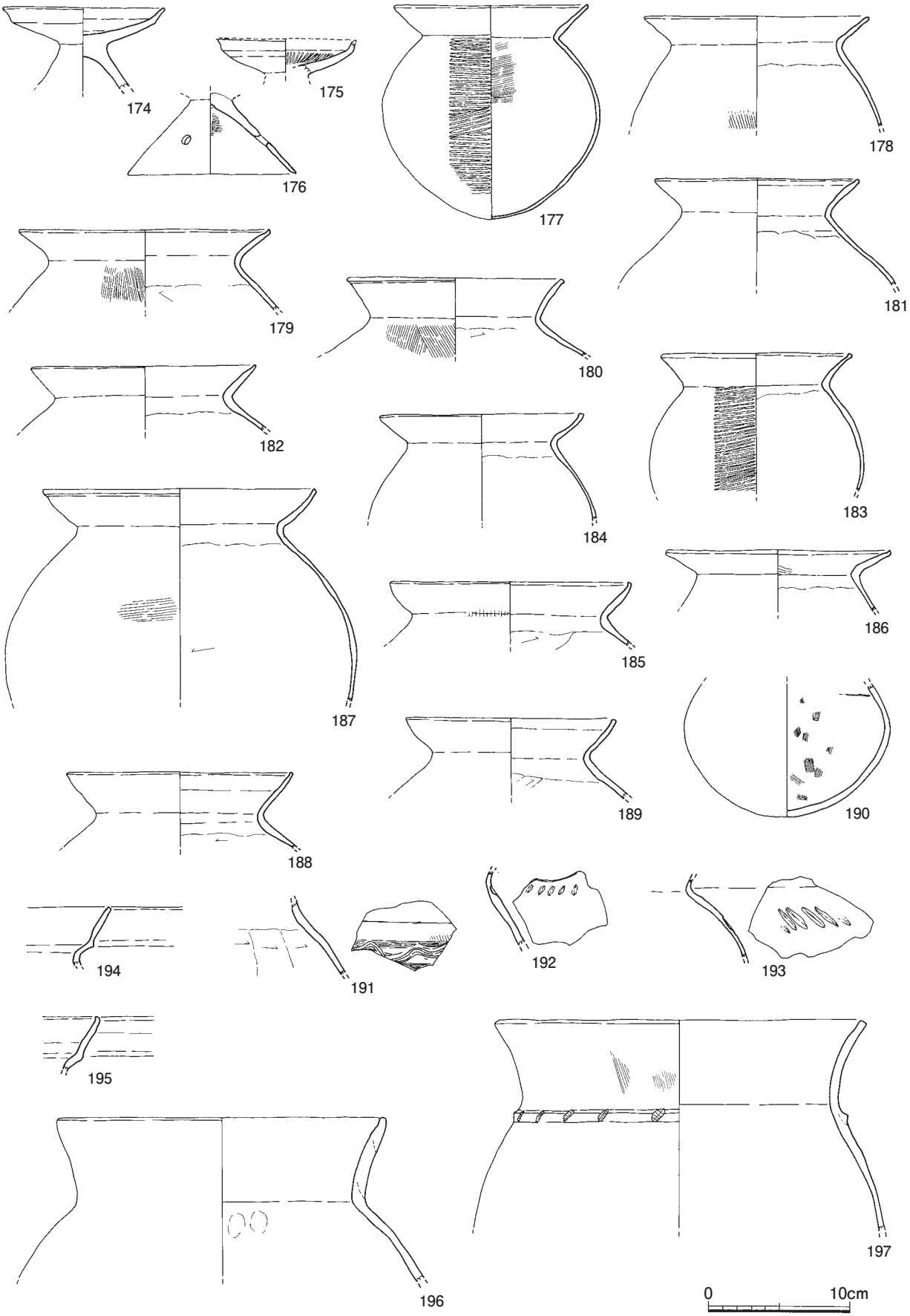


Fig.27 SD19 出土遺物実測図 .3（1/4）

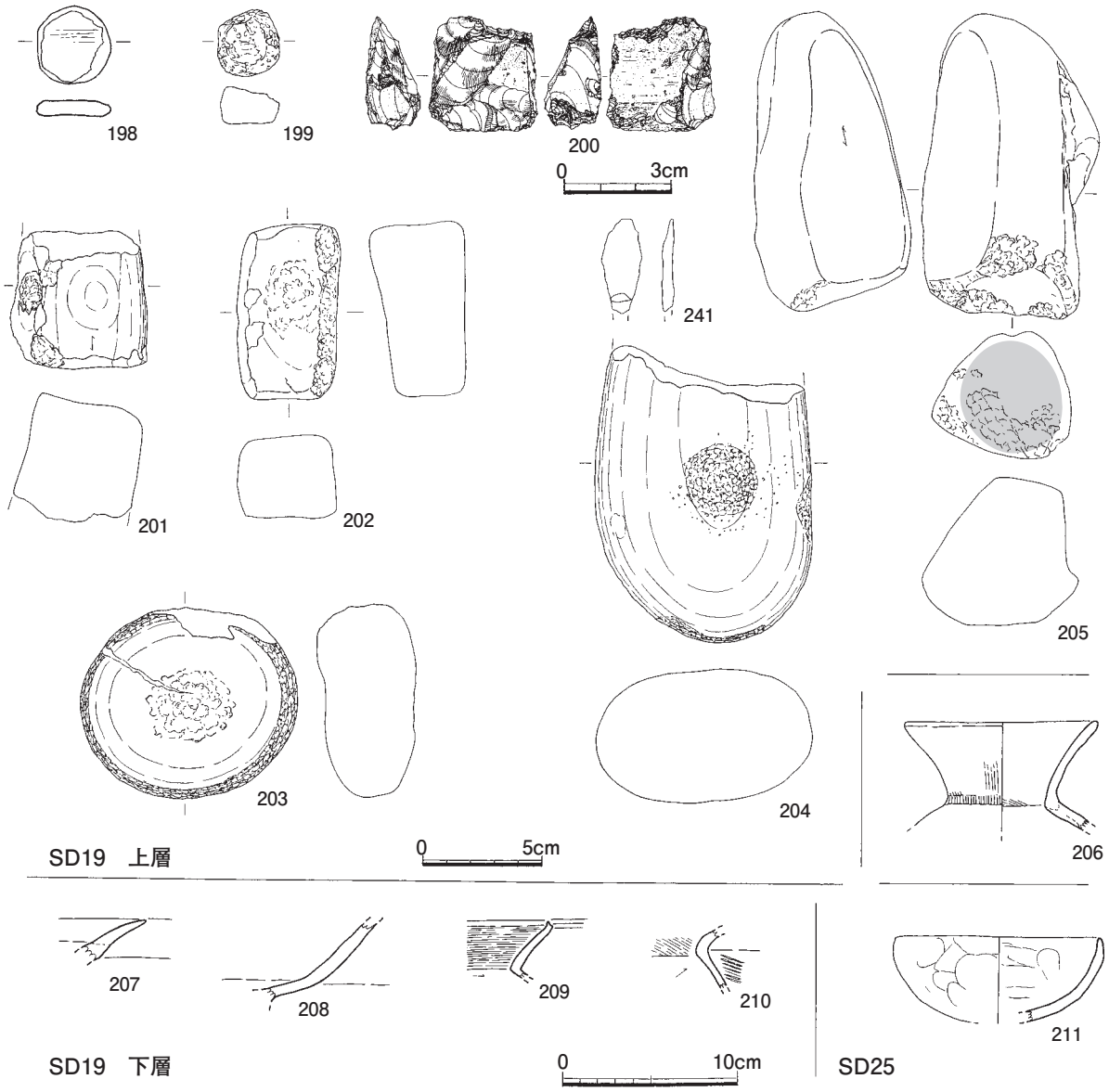


Fig.28 SD19･25 出土遺物実測図 .4（1/4･1/3･1/2）

端は丸く内端が突出。内面ヨコハケ後内外ヨコナデ内面頸部下にケズリ。浅黄橙色。187 はやや大型。口径 19.5cm。口縁端は面取り外端下が窪む。胴外面にヨコハケが残るが調整は不明瞭。浅黄橙～褐灰色。188 は口径 16.1cm。口縁端は丸く内端が突出。調整不明。鈍い橙色。189 は口径 15cm。口縁端は面取り内端下を広く窪ます。調整不明。褐灰色。190 は扁球形胴部の完形品で胴径 14.7cm。口頸部を打ち欠く。内面にハケメが残るが調整は不明瞭。外面鈍い黄橙内面橙色。191 は肩部の小片。外面にタテ・ヨコハケ後 4 条の波状文を施す。内面はヨコケズリ。外面灰白内面鈍い黄橙色。192 ～ 195 は山陰系甕。192・193 は肩部の小片。192 は緩く屈曲する頸部下に 2cm前後の長い列点文を施す。調整不明。鈍い黄橙色。193 はくびれの無い頸部に 1cm前後の縦長の列点文を施す。調整不明。浅黄橙色。194・195 は二重口縁片。194 は屈曲部が稜を成し上位は緩く外反し端部を面取りする。調整は不明。浅黄橙色。195 は屈曲が緩く、稜を成し上位は緩く外反し端部を面取り内端がやや突出する。内外面にヨコナデ。浅黄橙色。196・197 は在地系の直口の甕。196 は口径 23.3cm。口縁端は面取りし内端下を広く窪ます。頸部の屈曲は緩い。調整は不明。橙色。197 は口縁が緩く外反し端部は面取りする。頸部の屈曲

が無く、外面にナナメハケ後低い刻目三角突帯を施すが、調整は不明瞭。橙色。**198** は甕胴部片の土器片円盤。周縁を緩く磨って整形する。径 3.3 厚 0.7cm 8g。**199** は軽石製浮子。破面を緩く磨って整形。2.8 × 2.6 × 1.6cm 4g。**200** は腰岳黒曜石の石核。三角柱状の原石の平坦面に不定方向から剥片剥離を行う。3.3 × 3.1 × 1.6cm 18g。**201** は灰色中粒砂岩の砥石。角礫の 3 面を使用。現存長 6.9 幅 5.8 厚 5.6 cm 48g。**202** ～ **204** は磨石。**202** は暗青灰色石英斑岩の角礫全面を使用。上下 2 面を磨りと中央 3 × 2.4cm 2 × 2.5cmを敲きに、両側面を主に敲打に、両小口を粗く磨る。7.5 × 4.5 × 4.1cm 245g。**203** は花崗岩円礫を使用。上下 2 面を磨りと中央 2.9 × 3.4cm 3.4 × 3.4cmを敲きに、側面全面を敲打に用いる。9.3 × 8.1 × 4.2cm 479g。**204** は中粒砂岩円礫を使用。上下 2 面を磨りと中央径 3cm程を細かな敲きに、側面 3 ヶ所を敲打に用いる。12.6 × 9.2 × 5.8cm 1077g。**205** は緑灰色柱状の石英斑岩の砥石兼用の石杵。側面の 1 面を砥面に、下端平坦部を赤色顔料の磨り潰しに使用し径 4cm程ベンガラが表面に染みこむ。13.1 × 7.5 × 5.7cm 245g。前期前半を示す。

206 ～ **210** は下層出土。**206** は小口径の直口壺。口径 11cm。口縁端は丸く外面に粗いタテ内面にナナメハケ後ナデ消す。鈍い黄橙色。**207** は畿内系二重口縁壺の口縁片。上位が強く外傾し端部は細い。調整不明。橙色。**208** は高坏小片。坏部下位の屈曲は緩く外面にタテハケが一部残る。橙色。**209**・**210** は畿内系甕。**209** は緩く外反する口縁端を面取り沈線を施し内端が突出。内面にヨコハケ稜を成す頸部直下にケズリ。浅黄橙色。**210** は緩く外反する口縁の内面にヨコ・ナナメハケ、稜を成す頸部直下にケズリ外面に左上がり細筋タタキ。外面浅黄橙内面鈍い橙色。前期初頭か。

SD25（Fig.22　PL7-4）E5 グリッドに位置し、SD06 を切る。SD06 の延長上にあり全長 3.5m 幅 50cm前後で、東端の深さ 7cmから 15cmまで西に緩く下がる。方位は N － 30° － W にとる。黒灰色土が堆積し下層（3 層）は粗砂を半量含む。遺物は上層で少量出土している。

出土遺物（Fig.28）**211** は坏。口径 11.8cm。内外面に粗いナデ痕が残る。鈍い黄橙色。前期前半。

SD36（Fig.22　PL9-4）B 4 グリッドに位置し、3 × 3.6m で直角に曲がる。幅 1.0 m深さ 15cm前後で、周溝の一部か。遺物は布留系の甕等小片が少量出土する。前期前半。

SD03・04（Fig.29　PL9）　調査区西端に位置し、SK01・02 に切られる。80cm程の間隔で並行し、SD03 で幅 60 深さ 12、SD04 で幅 40 深さ 8cm程で、底面はほぼ水平。方位は N － 18° － W にとる。砂を含まない黒灰色土が堆積し水流は無い。遺物は少量の須恵器等が出土している。

出土遺物（Fig.29）**212** は 03 出土軟質土器甕片。外面に平行タタキ内面はナデる。暗赤褐色。**213** は須恵器甕片。外面に格子目タタキ内面に同心円当具痕が残る。暗灰色。古墳後期。

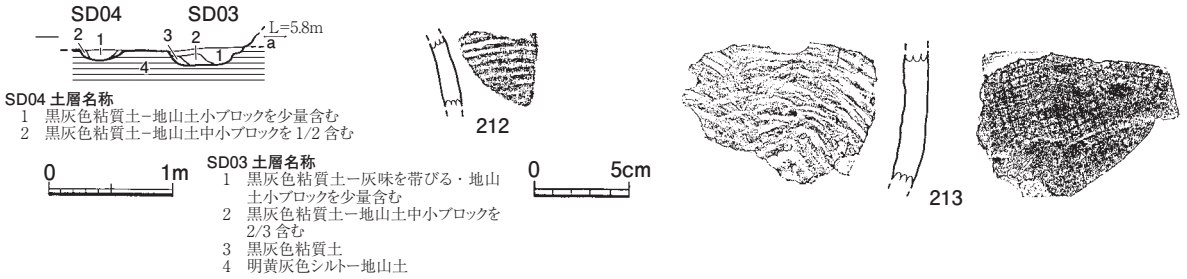


Fig.29 SD03･04 実測図（1/60）・出土遺物実測図（1/4）

5．古代・中世の調査

遺構は極めて少なく、西部にまとまり、低地部に古代の土壙を２基、台地状で古代の不整形土壙１基、中世の溝１条を検出したのみである。

１）土壙　調査区西端の低地部で、古墳後期の並行溝 SD03・04 を切って検出される。近世の切土造成で大部分を削平され、底面近くが残るのみである。

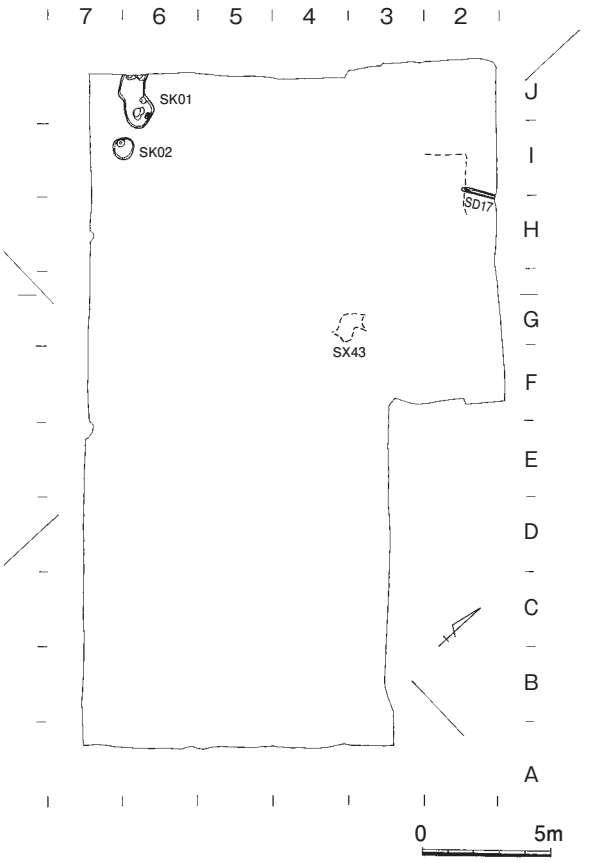


Fig.30 古代・中世遺構分布図（1/300）

SK01（Fig.31　PL9-6）調査区西端の J6 グリッドに位置し SD03・04 を切る。2.15+ α × 1.26m・深さ 7cmを測る長い不整形土壙で、褐色土が堆積し、底面に若干の凹凸がある。遺物はやや多くコンテナ 1/2 程出土しているが、殆どが弥生土器片で須恵器が５片出土している。

出土遺物（Fig.31）**214** は須恵器坏蓋小片。内端部の立ち上がりは低く内外面に回転ナデを施す。灰白色を呈する。8 世紀後半。

SK02（Fig.31）SK01 の南 50 cm に位置し SD03 を切る。0.9 × 0.9m のほぼ円形で、深さ 4 cmを測る。褐色土が堆積し、底面に小さな浅い凹凸が数カ所分布する。遺物は少量で、殆どを弥生土器片が占め須恵器が２片出土している。

出土遺物（Fig.31）**215** は須恵器甕の小片。外面に格子目タタキ内面に平行の当具痕が残る。灰色を呈する。SK01 と同時期と考えられる。

２）不整形土壙 SX43　台地上 G3 グリッドに位

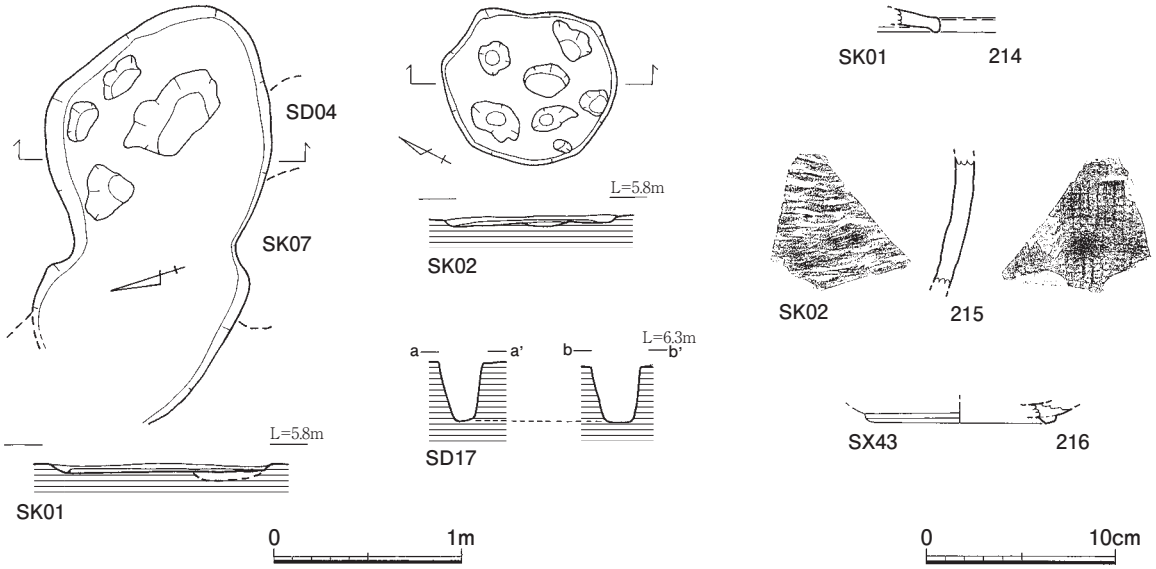


Fig.31 SK01･02･SD17 実測図（1/40）・出土遺物実測図（1/4）

置し、撹乱に切られSK16を切る。2+ α × 1.2+ α m・深さ20cm程を測る不整形土壙で、底面の凹凸がある。遺物は少量、殆どが弥生土器片で須恵器が1片出土している。

出土遺物（Fig.31）**216**は須恵器高台坏で底径10cmを測る。外底際に低く高台を貼付する。調整は摩滅のため不明。淡灰色を呈する。8世紀後半。

3）溝SD17（Fig.31） 西部の台地上I2グリッドに位置し、南部を近世の造成に切られ北側は調査区外に延びる。現況で長1.45m幅25cm前後で、深さ30cm程で東から西に2cm程緩く下がる。方位はN－58°－Eにとる。灰褐色砂質土が堆積し、遺物は弥生土器・土師器が20数片、白磁碗片が1片出土している。11～12世紀と思われる。

6．混入その他の資料

Fig.32は遺構の他時期の混入や撹乱等の出土遺物である。217～231は弥生土器。**217**は前期板付Ⅰ式の甕。如意形口縁の口唇端部全面に刻目を、外面にタテハケ内面にナデ。外面暗褐色内面橙色。218・219は中期初頭の甕。**218**は口径29.4cm。短い断面三角口縁で上面が湾曲する。胴が緩く張り内面にヨコナデを施す。外面橙色内面鈍い黄橙色。**219**は径8.5底厚4.9cmの上げ底の底部。外面にタテハケ内面にナデを施す。外面橙色内面黒褐色。220～224は中期後半の丹塗土器。**220**は大型筒形器台。口径12鍔径24.7cm。鍔はほぼ水平で端部は浅く窪ませる。鍔下に幅2.6cmの方形透かしを4ヶ所施す。露胎部は橙色。**221**は大型の丹塗高坏。口径38cm。「鋤先」口縁で上面が外傾する。外端部は浅く窪ませ坏部外面上位に低い「M字」突帯を施す。露胎部は浅黄橙色。**222**は瓢形壺胴部。突帯径24cmを測る。胴上位のくびれ部外面に高い「M字」突帯を施し、端面に刻目を施す。露胎部は橙色。**223**は口径25cm前後の樽形無頸壺で、口縁下に高い「コ字」突帯を施す。器壁が摩滅するが丹塗りと思われる。橙色。**224**は袋状口縁壺。外面に丹塗りが残る。露胎部は橙色。**225**は中期前半の甕。口径28cm。「逆L字」口縁で上面は若干内傾し端部は丸い。内外面にヨコナデ。暗褐色。**226**は中期中頃の甕で口径35cm。「鋤先」口縁で外端部は丸く沈線を1条施し上面は水平。胴上位外面に低い三角突帯を、内外面にヨコナデ。黄橙色。**227**は中期中頃の大型甕。「逆L字」口縁で上面は若干内傾し端部は浅く窪ませる。胴上位外面に三角突帯を、内外面にヨコナデ。橙色。**228**は中期後半の大型甕。「T字」口縁で上面は水平。両端面を浅く窪ませる。胴上位外面に「コ字」に近い三角突帯を、内外面にヨコナデを施す。外面灰褐色内面暗赤褐色。**229**は終末期二重口縁壺。口径17cm。屈曲部下端が突出し上位が若干内傾して直線的に延びる。端面を浅く窪ませ浅い刻目を施す。内外面にヨコハケ後ヨコナデ。橙色。230は後期前半の甕。口径46cm。「く字」口縁で外端は丸く内端は稜を成す。外面口縁下に三角突帯を施し内外面にヨコナデを施す。鈍い橙色。**231**は後期前半二重口縁壺。口径16cmを測る。「逆く字」口縁で屈曲部が稜を成し上位が緩く内湾する。端面は浅く窪める。調整は不明。浅黄橙色。**232**は山陰系二重口縁壺。屈曲部から上位は直線的に延び外傾する。端面を窪ませ内端がやや突出する。頸部から胴部の屈曲は無く、頸部外面にハケ工具を用いた有軸羽状文の上半が残る。灰白色～浅黄橙色。**233**は古墳後期の軟質土器甕。外面に格子目タタキ内面に平行の当具痕が残る。鈍い黄橙色。**234**はⅣ期の須恵器無蓋高坏。外面沈線下に。ハケ工具の連続刺突文、ヘラ記号を刻む。淡灰色。**235**は8世紀後半須恵器高台坏で底径10cmを測る。外底際に低い高台を貼付する。内外面に回転ナデ。外面暗灰色内面明灰色。**236**は朝鮮雑釉碗。底径4.5cmを測る。灰白色胎土の高台内を兜巾状に削り、全面に淡青灰色透明釉を掛け内外に砂目が4ヶ所残る。238～240は鉄器。**238**は刀子鋒。厚3mm幅1.5残存長3.1cm 1g。239・240は中茎。**239**は径6～5mm残存長4.2cm 7g。**240**は2本の錆着で上が径8～6mm残存長3.2cm、下が径7～5mm残存長4.9cmで計12gを測る。

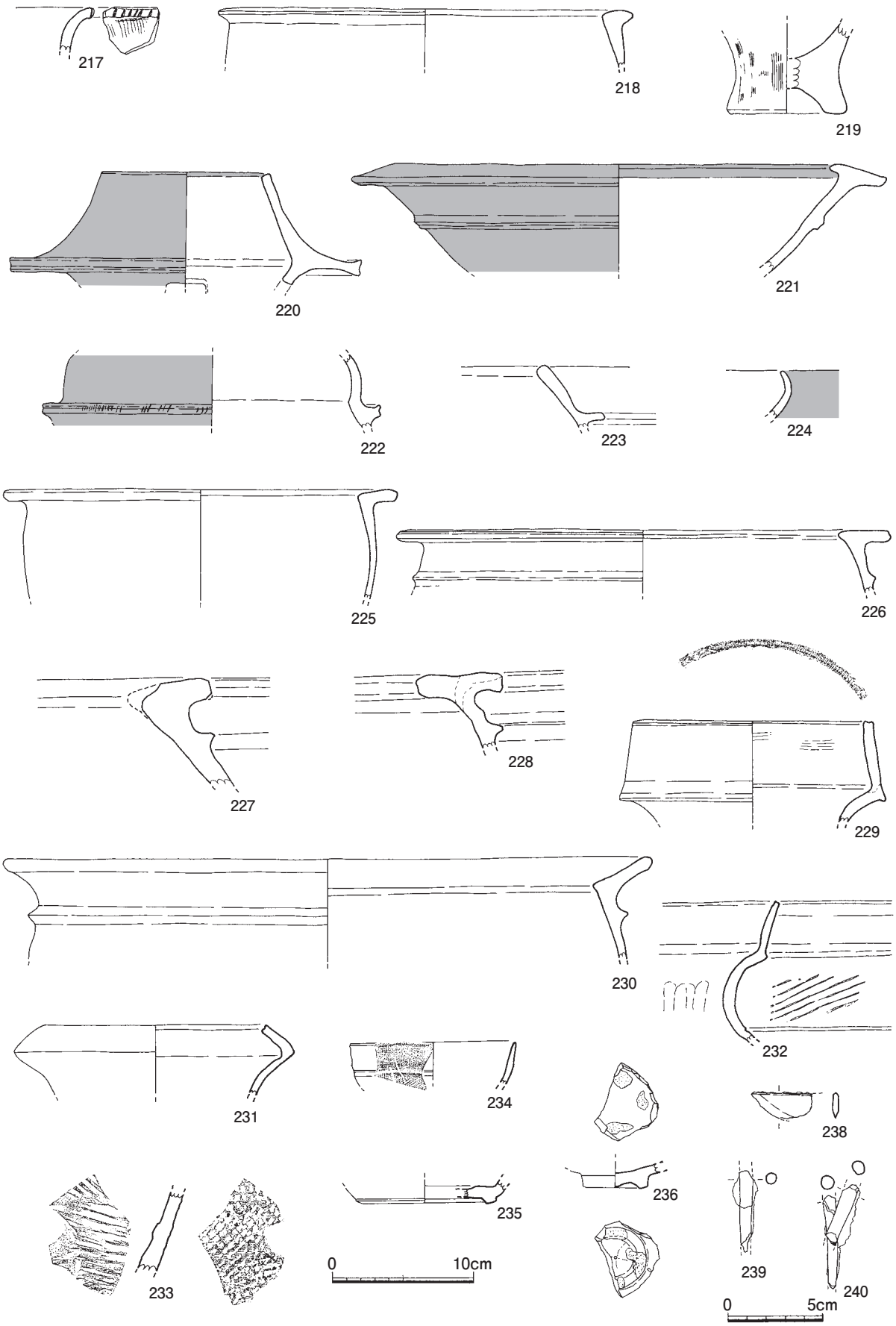


Fig.32 混入その他の遺物実測図（1/4･1/3）

Ⅳ.　小結

調査の結果、弥生時代中期後半を主に、中期初頭の土壙２基、中期前半の竪穴住居１軒、中後半の竪穴住居３軒・土壙14基・溝４条・不整形土壙２基、中期末～後期前半の竪穴住居１軒・井戸１基・溝４条、後期後半の土壙１基、終末～古墳時代前期井戸１基・土壙２基・溝４条、後期溝２条、古代土壙２基・不整形土壙１基、中世溝１条、柱穴を96検出した。遺物はコンテナ38箱分出土しており､台地落ち際の集落周縁に位置するため､周辺調査地点に比べると遺構･遺物の量は少なめである。

中期の遺構では周辺で珍しく、中期初頭の並列する土壙SK33・34の２基を検出している。破損した甕が廃棄されており墓ではない。住居はいずれも方形で、周辺の調査成果も同様であり、弥生中期後半期がひとつの盛期となる。SC47の中期前半の住居は方形プランでは古期に属する。中期後半は小型で北東の同方位に主軸をとる。

調査区西の台地落ち際で、調査区を縦断する中期末～後期初頭の溝SD05・23・21は中央に陸橋を持つ可能性が高く、終末期のSD06・19と方位が近く陸橋の位置も重なり、掘削位置が踏襲され、集落が西の谷部に開いている。これは本調査区北西70m程の第132次調査区でも、同じく終末期の溝と近い方位に形態・堆積状況が似た中期後半～後期初頭のSD63・88が検出されており、一連の遺構である可能性が高い。終末期の２条並列溝に先だってほぼ同位置に弥生中期後半～末に大規模に掘削された溝の一部を検出している。遺存期間は短く、後期前半には埋没して直交方向に、北側に緩い弧を描く区画溝SD20が掘削される。台地上の深さは1.5mと深く、東の延長線上には第50次調査のA区が位置するが、同種の溝は検出されておらず、環濠にはならない。内側1m程にこれに平行する浅い中期後半のSD26があり、先行する可能性がある。

終末から古墳前期前半の中心は溝で、中期のSD05・23・21と重なって、両端部が階段状に下がり中央に幅3.5mの陸橋を持つSD06・19が掘削される。周辺では南15m程の第50次調査D区で間５～7mの２条並列溝SD292・294が検出され、40m北西の第22次調査区でも幅9.5～10mの２条並列溝が、北西70m程の第132次調査区でもこれらに連なる溝SD15が検出され、本調査区のSD06・19はこの２条並列溝の東側に連なり、西溝は調査区外にあると思われる（Fig.33)。比恵・那珂遺跡群を1.5㎞にわたって南北に縦断する、２条並列の側溝を持つ幅7m前後の道路で、中期後半から存在の可能性を久住猛雄が指摘しており、今回の調査はそれを補完する。該期での多量の畿内系山陰系土器や少量の瀬戸内系半島系土器等搬入遺物の多種多様さも特徴の一つである。古墳初頭～前半の台地上のSD06・25からは粗砂がまとまって検出されている。水流に伴うものではなく、集落内に多量に持ち込まれたものが流れ込んでいる状態で、第138次調査地点をはじめ周辺の調査区の住居･土壙･柱穴等の底面からまとまって検出される。前期中頃の井戸SE09からは廃棄時に多量の畿内系甕が胴部穿孔・口縁打ち欠き等棄損して出土しており、弥生中期後半からの井戸廃棄祭祀として連綿と受け継がれている。また、廃棄された甕内部から出土した鉄製針金は、国内出土では最古期に属する。先進遺物であるが意図的に巻いて整形したものではなく恣意的に握り込んだものが流れ込んだ状態で、祭祀の一環で廃棄されたものか判断できない。井戸底の甕内で、2m以上の粘土で密閉され空気から遮断された極めて良好な状態で埋没したため遺存したもので、住居や土壙等浅い遺構では径1㎜に満たない鉄製品は巻き纏めた状態でないかぎり完全に錆化して検出不可能な遺物と思われる。

以降の古墳後期・古代・中世の遺構は極めて少量で衰退期にあたり、周辺調査区でも同様の傾向が伺える。

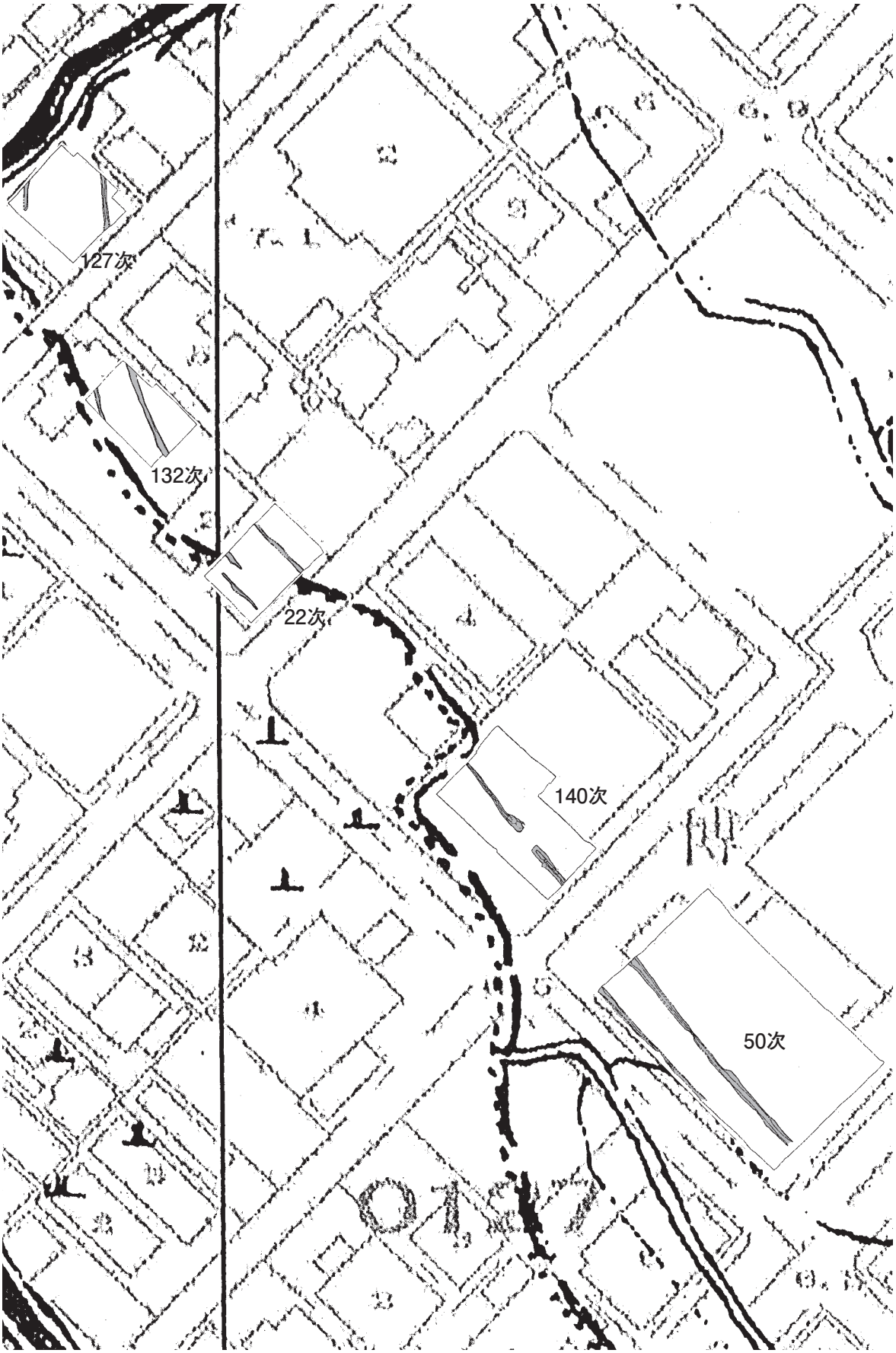


Fig.33 古墳前期溝分布図（1/1000）

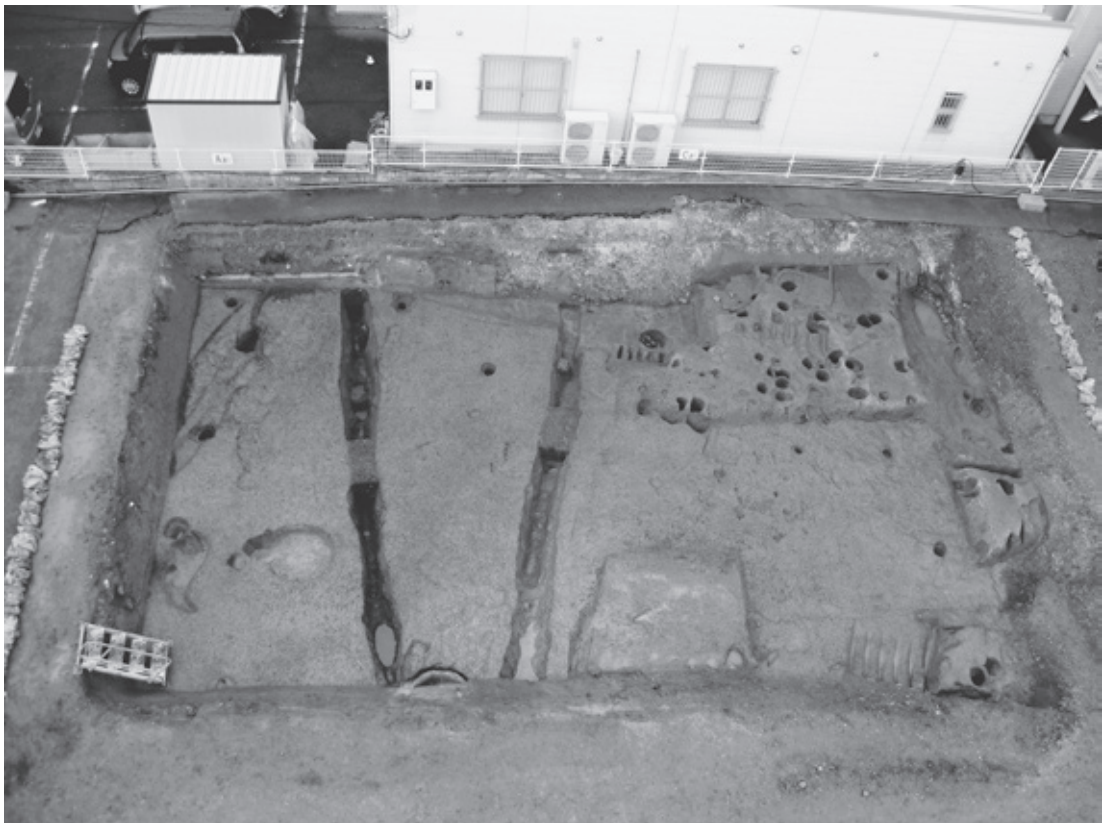
Ｔａｂ．遺構一覧表

住居番号	グリッド	時期	規模 縦×横×深さ（標高・m）	平面形	主な出土遺物	備考	写真番号	挿図番号
SC18	Ａ５	弥生後期初～前半	5.5+α×1.0+α×0.2（6.12）	方形	弥生土器（丹塗壺・壺・高坏・甕・器台）・扁平片刃石斧	ＳＤ２１を切る	２－１	6
SC30	Ｅ３	弥生中期後半	2.44×1.6+α×0.06（6.19）	方形	弥生土器（丹塗壺高坏大型筒形器台・壺・高坏・甕・鉢）・石器（磨石・叩石）・ob（石核・fl）	SC４７・３２を切る	２－３	6
SC３１	Ｆ２	弥生中期後半	3.0+α×2.0+α×0.13（6.1）	方形	弥生土器（壺・高坏・甕・器台・支脚）・叩石・投弾	SC４７・３２を切る		6
SC３２	Ｆ３	弥生中期後半	2.1×1.8+α×0.03（6.22）	方形	弥生土器（丹塗壺高坏甕・壺・甕）・ob（fl）・溶岩？	SC４７を切る	２－４	6
SC４７	Ｆ３	弥生中期前半～中頃	3.5×3.0×0.2（6.07）	方形	弥生土器（壺・甕）・ob（fl）		２－５	6
井戸番号	**グリッド**	**時期**	**規模 縦×横×深さ（標高・m）**	**平面形**	**主な出土遺物**	**備考**	**写真番号**	**挿図番号**
ＳＥ０９	Ｊ４	古墳前期中頃	0.54×0.56×0.58（5.0）	円形	土師器（壺・甕・高坏・坏・小型丸底坩・畿内系甕・山陰系低脚坏）・鉄器（針金・器具取手）・弥生土器	甕内部から針金出土	巻頭・６－３．４	20
ＳＥ４５	Ｂ５	弥生後期初頭	0.9×0.9×0.8（5.0）	円形	弥生土器（丹塗壺高坏・壺・甕）		６－２	14
土壙番号	**グリッド**	**時期**	**規模 縦×横×深さ（m）**	**平面形**	**主な出土遺物**	**備考**	**写真番号**	**挿図番号**
ＳＫ０１	Ｊ６	８Ｃ後半	2.15+α×1.26×0.07	不整形	須恵器（坏蓋・甕）・土師器・弥生土器・磨製石剣	ＳＤ０３・０４を切る	９－６	31
ＳＫ０２	Ｉ５	８Ｃ後半	0.9×0.9×0.04	円形	須恵器（甕）・土師器（甕）・弥生土器	ＳＤ０３を切る		31
ＳＫ０７	Ｊ７	弥生中期後半	0.97×0.56×0.32	円形	弥生土器（甕）			
ＳＫ１０	Ｊ３	弥生中期中頃	1.45+α×1.15+α×0.24	円形	弥生土器（甕・高坏・器台）・ob（fl）		２－６・３－１	8
ＳＫ１１	Ｊ２	弥生中期後半	1.35+α×0.75×0.17	長方形	弥生土器（壺・甕）			8
ＳＫ１２	Ｊ３	弥生中期後半	1.68+α×0.32+α×0.08	不整形	弥生土器（甕）・須恵器・ob（fl）	ＳＫ１０を切る		8
ＳＫ１３	Ｉ２	弥生後期	1.6+α×1.35×0.07	不整方形	弥生土器（甕）			14
ＳＫ１６	Ｇ３	弥生中期後半	1.88×1.45×0.4	長方形	弥生土器（壺・甕・高坏・鉢・器台・支脚）・石器（砥石）		３－２・３	8
ＳＫ２２	Ｄ６	弥生中期後半	2.6×1.55+α×0.23	円形	弥生土器（丹塗甕・壺・甕・器台）・ob（fl）		３－４	8
ＳＫ２４	Ｄ６	弥生中期	1.46×1.08×0.23	隅丸方形	弥生土器（甕・器台）	柱穴状	３－５	8
ＳＫ２７	Ｅ４	古墳前期前半	0.57+α×0.57×0.13	円形	土師器（布留甕・坏）			
ＳＫ２８	Ｃ７	弥生中期後半	1.04×0.55×0.23	長方形	弥生土器（甕・器台）		３－６	8
ＳＫ３３	Ｄ４	弥生中期初頭	2.05×0.6×0.42	長方形	弥生土器（甕）・土師器・ob（fl）		４－１・２	8
ＳＫ３４	Ｄ４	弥生中期初頭	2.45+α×0.8×0.22	長方形	弥生土器（甕）・ob（石核）			8
ＳＫ３７	Ｄ５	弥生中期中頃	196+α×1.3×0.16	不整形	弥生土器（甕・器台）・土師器			10
ＳＫ３８	Ｂ４	古墳前期	0.85+α×0.37+α×0.21	方形	土師器（坏）・弥生土器			
ＳＫ４０	Ｃ５	弥生中期後半	1.18×1.2×0.18	隅丸方形	弥生土器（甕・器台）・石器（砥石）・ob（fl）	柱穴状		10
ＳＫ４１	Ｅ３	弥生中期後半	1.15+α×0.8×0.22	楕円形	弥生土器（甕）	ＳＣ３０屋内土壙		10
ＳＫ４４	Ｄ３	弥生中期後半	1.5×0.55×0.15	不整長方形	弥生土器（壺・甕）・ob（fl）			10
ＳＫ４６	Ｅ６	弥生中期	0./85×0.25+α×	円形	弥生土器（壺・甕）			
不整形土壙番号	**グリッド**	**時期**	**規模 縦×横×深さ（m）**		**主な出土遺物**	**備考**	**写真番号**	**挿図番号**
ＳＸ１４	Ｉ３	弥生中期後半	2.35+α×1.63×0.15	不整形	弥生土器（丹塗壺甕・壺・甕）・ob（fl）	倒木痕か		10
ＳＸ３９	Ｄ３	弥生中期	1.4+α×1.0+α×0.03	不整形	弥生土器（甕）			
ＳＸ４２	Ｄ４	弥生中期初頭	1.8+α×0.7+α×0.05	不整形	鉄器（中茎）	ＳＫ３３に切られる・混入の可能性大		
ＳＸ４３	Ｇ３	８Ｃ後半	2.0+α×1.2+α×0.2	不整形	須恵器（高台坏）・弥生土器			
溝番号	**グリッド**	**時期**	**規模 幅×深さ（標高・m）**		**主な出土遺物**	**備考**	**写真番号**	**挿図番号**
ＳＤ０３	Ｊ７	古墳後期	0.6×0.12（5.57）		須恵器（壺）・土師器（甕）・弥生土器・白磁		9	29
ＳＤ０４	Ｉ７	古墳後期	0.4×0.08（5.6）		須恵器（甕）・土師器（甕・高坏・坏）・弥生土器		9	29
ＳＤ０５	Ｈ～Ｊ－６	弥生中期末～後期初	0.4×0.9（5.0）		弥生土器（丹塗壺甕無頸壺大型筒形器台高坏鉢・壺・甕・蓋・高坏・器台・支脚）・坩堝?・石器（磨製鏃・磨製石剣・扁平打製石斧）・ob（fl）・土師器・須恵器		４・５	15
ＳＤ０６	Ｅ３～Ｊ４	古墳初～前期前半	1.8×0.5（5.3）		土師器（畿内系壺甕小型器台小型丸底坩高坏・山陰系壺甕低脚坏・豊前系壺・吉備系甕・半島系軟質土器・壺・甕・鉢・支脚・ミニチュア土器）・土器片円盤・石器（砥石・叩石・石皿）・ob・弥生土器・現代鉄	ＳＤ２０・２３を切る	６～８	22
ＳＤ０８	Ｉ６	弥生中期後半	0.5×0.04（5.68）		弥生土器（甕）			
ＳＤ１５	Ｊ２	弥生中期後半	0.5×0.12（6.16）		弥生土器（甕・高坏）			
ＳＤ１７	Ｉ２	１１～１２Ｃ	0.25×0.3（5.9）		白磁（碗）・土師器・弥生土器・ob			31
ＳＤ１９	Ａ６～Ｄ５	古墳初～前期前半	1.5×1.0（5.3）		土師器（畿内系壺甕小型器台小型丸底坩高坏・山陰系壺甕低脚坏・瀬戸内系高坏・壺・甕・鉢）・鉄器（鏃）土器片円盤・石器（砥石・石杵・磨石・叩石・浮子）・ob・弥生土器	ＳＤ２１を切る	８・９	22
ＳＤ２０	Ｅ３～７	弥生後期前半	1.0×1.05（5.3）		弥生土器（丹塗壺瓢形壺甕大型筒形器台高坏・壺・甕・鉢・高坏・器台・支脚）・坩堝?・石器（磨製鏃・磨製石剣・扁平打製石斧）・ob（fl）・土師器・現代鉄	ＳＤ２３を切る	5	15
ＳＤ２１	Ａ～Ｃ５	弥生中期末～後期初	1.46×0.8（5.36）		弥生土器（丹塗壺瓢形壺・壺・甕・器台・支脚）・坩堝?・石器（石包丁）・ob（fl）・土師器	ＳＥ４５を切る	5	15
ＳＤ２３	Ｅ５	弥生中期末～後期初	0.9×0.2（5.9）			SD06に混入		
ＳＤ２５	Ｄ～Ｅ５	古墳前期前半	0.5×0.15（6.05）		土師器（山陰系壺・甕・坏・小型丸底坩）・弥生土器	ＳＤ０６・２６を切る	７－４	22
ＳＤ２６	Ｅ－４・５	弥生中期中頃	0.5×0.1（6.06）		弥生土器（甕・壺）・土師器			10
ＳＤ２９	Ｂ７	弥生中期後半	0.7×0.2（5.4）		弥生土器（甕・壺）・染付			10
ＳＤ３６	Ｂ４	古墳前期前半	1.0×0.15（6.17）		土師器（畿内系甕・甕・坏・高坏）・弥生土器・須恵器・現代鉄	ＳＣ９１を切る	9	29

図　　版

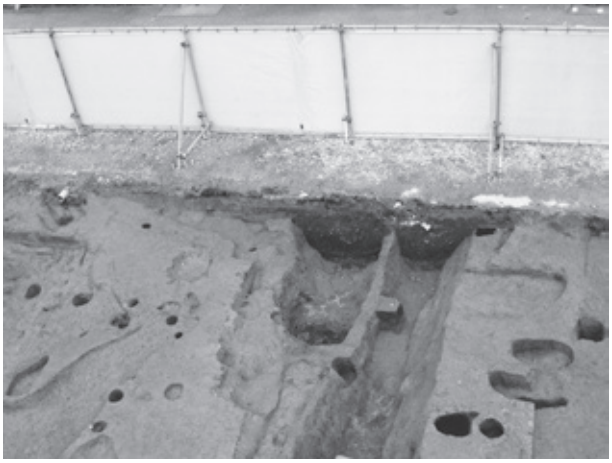
PLATES

1．1区全景（南西から）

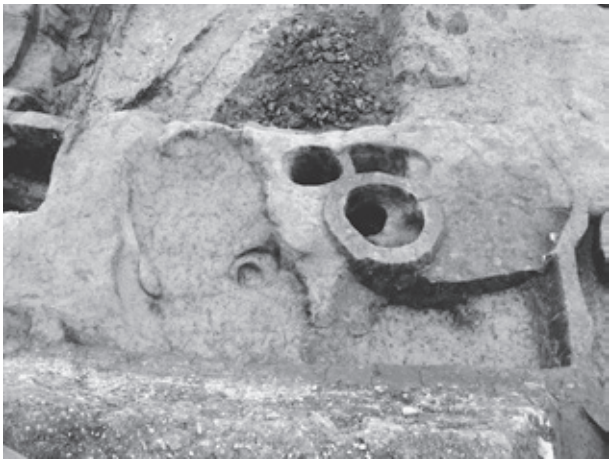


2．1区全景（南東から）

1．2区住居密集部（南西から）



2．SC18（北西から）

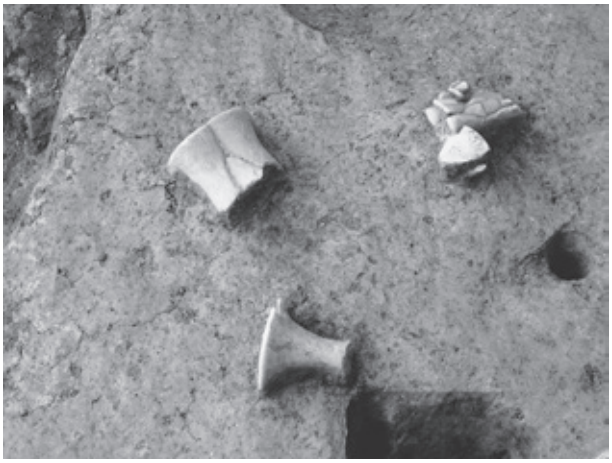


3．SC30（北東から）

4．SC31・32（北東から）

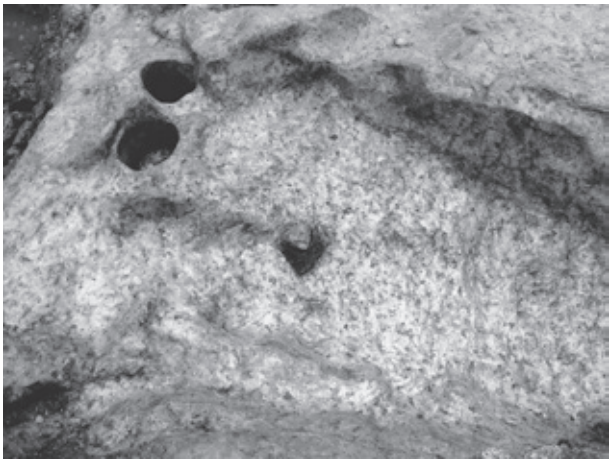
5．SC47（北西から）

6．SK10（北西から）



1．SK10 遺物出土状況（南西から）

2．SK16（東から）



3．SK16 遺物 40 出土状況（南から）

4．SK22（西から）

5．SK24（西から）

6．SK28（南西から）

1．SK34（東から）

2．　SK34 遺物出土状況（北から）

3．SK34 完掘状況（東から）

4．SD05 上層下面（北西から）

5．SD05 北壁土層断面（南東から）

6．SD05 遺物 62 出土状況（南から）

1．SD05 完掘状況（南東から）

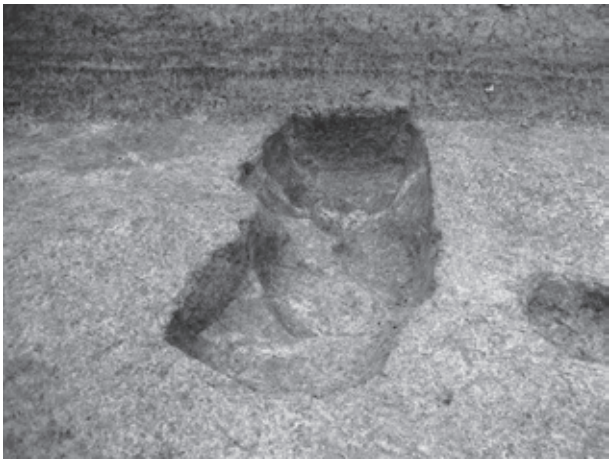
2．SD20 西壁土層断面（北東から）

3．SD20 完掘状況（南西から）

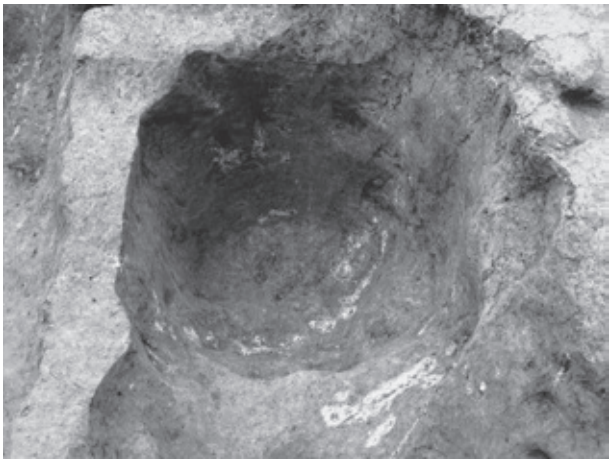
4．SD21・19（右）土層断面（北西から）

5．SD21 上層遺物出土状況（南西から）

6．SD21 完掘状況（北西から）

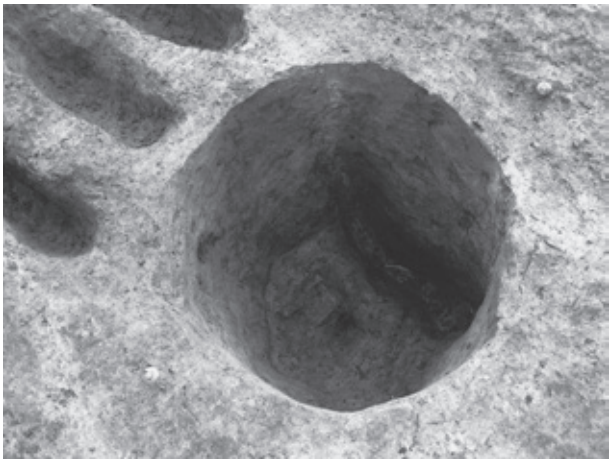


1．SD29（北東から）



2．SE45（南東から）

3．SE09 遺物出土状況上面（北から）



4．SE09 完掘状況（北から）

5．SD06 上層遺物出土状況（南東から）

6．SD06 上層遺物 1 群出土状況（南西から）

1．SD06 上層遺物 3 群出土状況（南西から）

2．SD06 上層遺物出土状況（北西から）

3．SD06 上層遺物 5 群出土状況（南西から）

4．SD06・20・25 土層断面（北から）

5．SD06 土層断面（南東から）

6．SD06 上層下面（南東から）

1．SD06 完掘状況（南東から）

2．SD06・2 区完掘状況（南東から）

3．SD19 上層遺物出土状況（北西から）

4．SD19 上層遺物 1 群出土状況（南西から）

5．SD19 上層遺物 2 群出土状況（南西から）

6．SD19 上層遺物 3 群出土状況（南西から）

1．SD19 上層遺物 4 群出土状況（南西から）

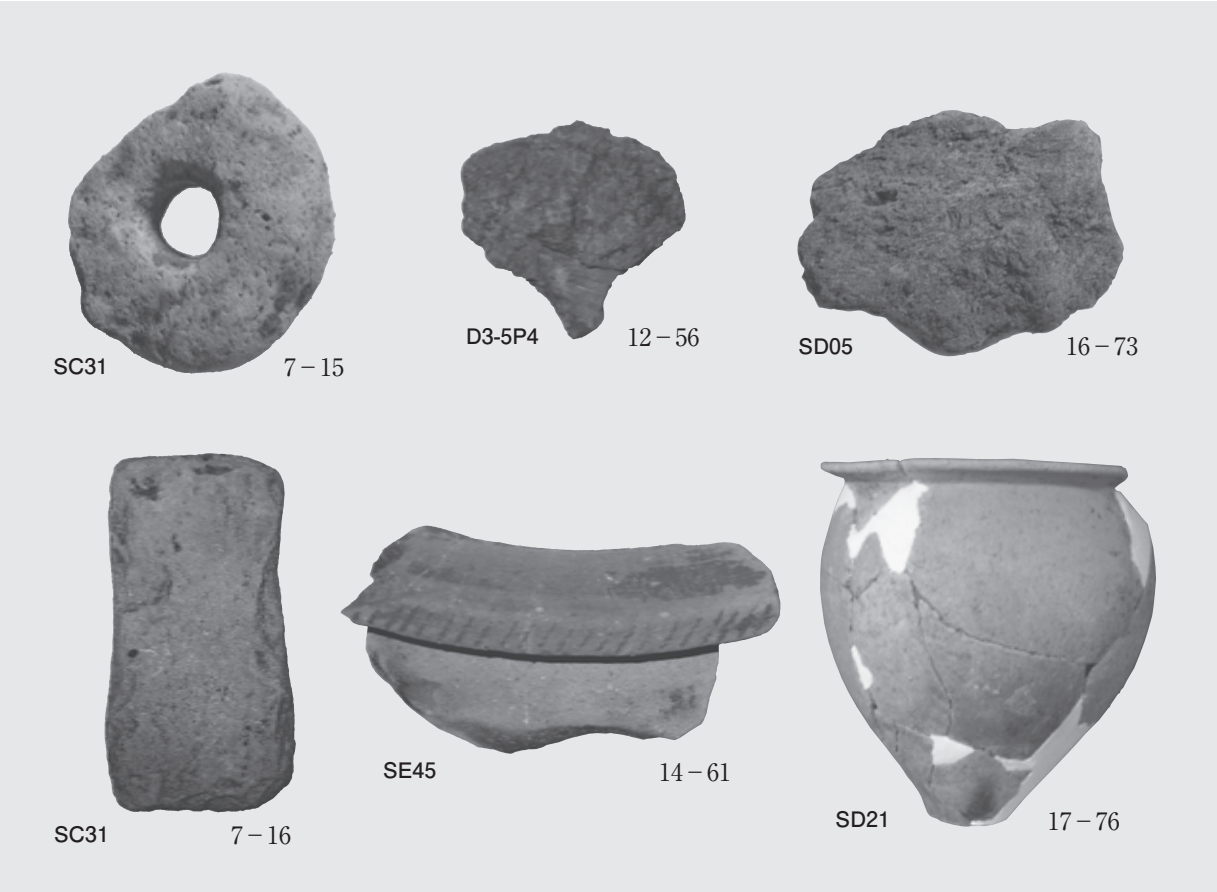
2．SD19 完掘状況（北西から）

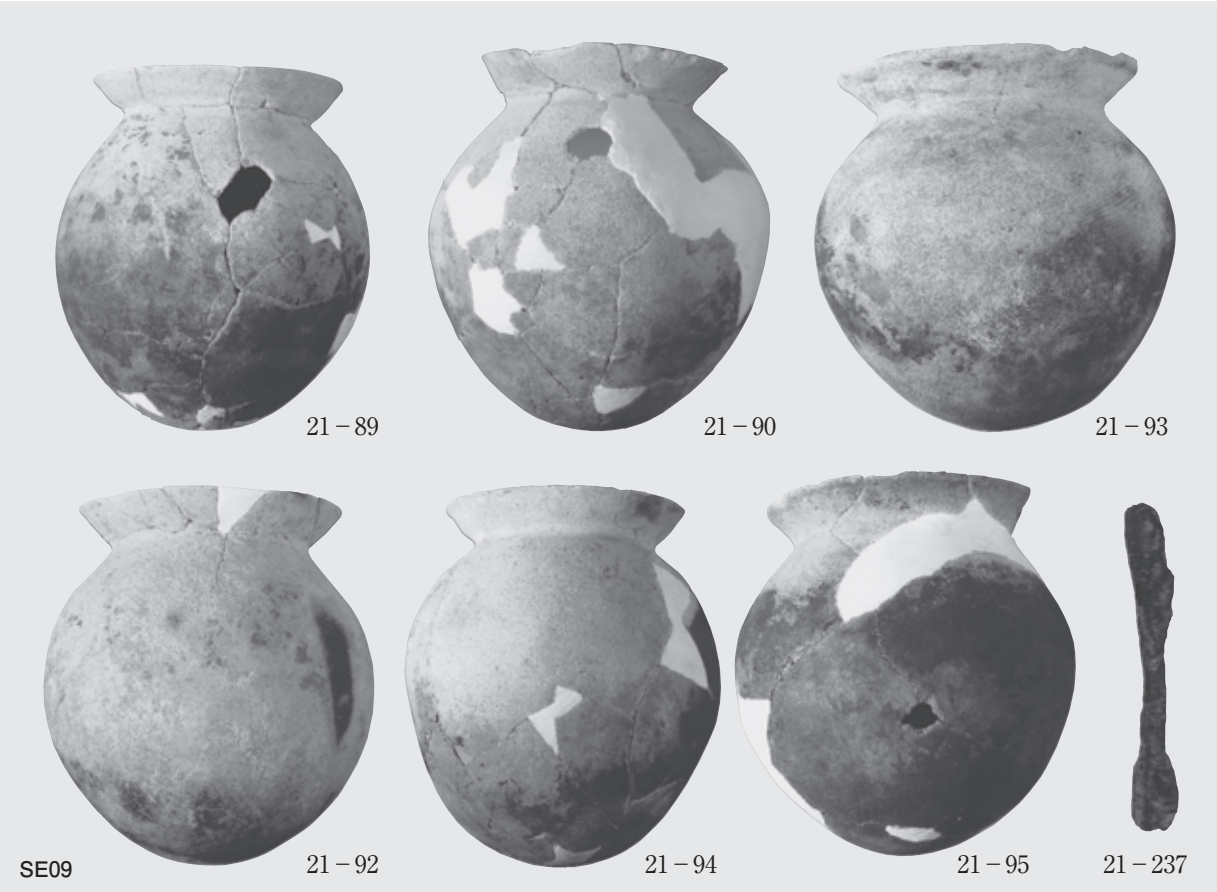
3．SD06・19 陸橋部（南西から）

4．SD36（西から）

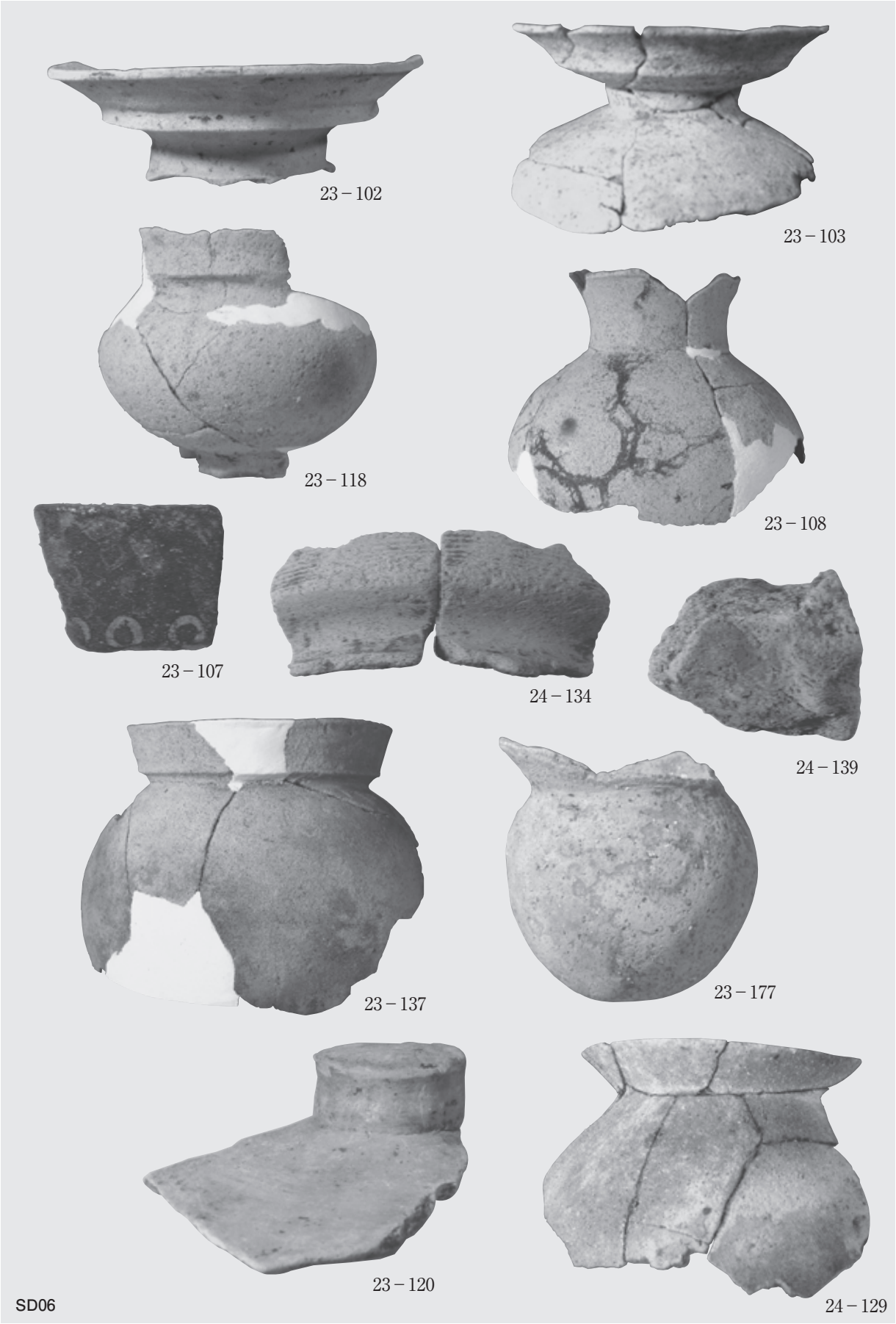
5．SD03・04 土層断面（北から）

6．SK01・SD03・04（右）（南から）

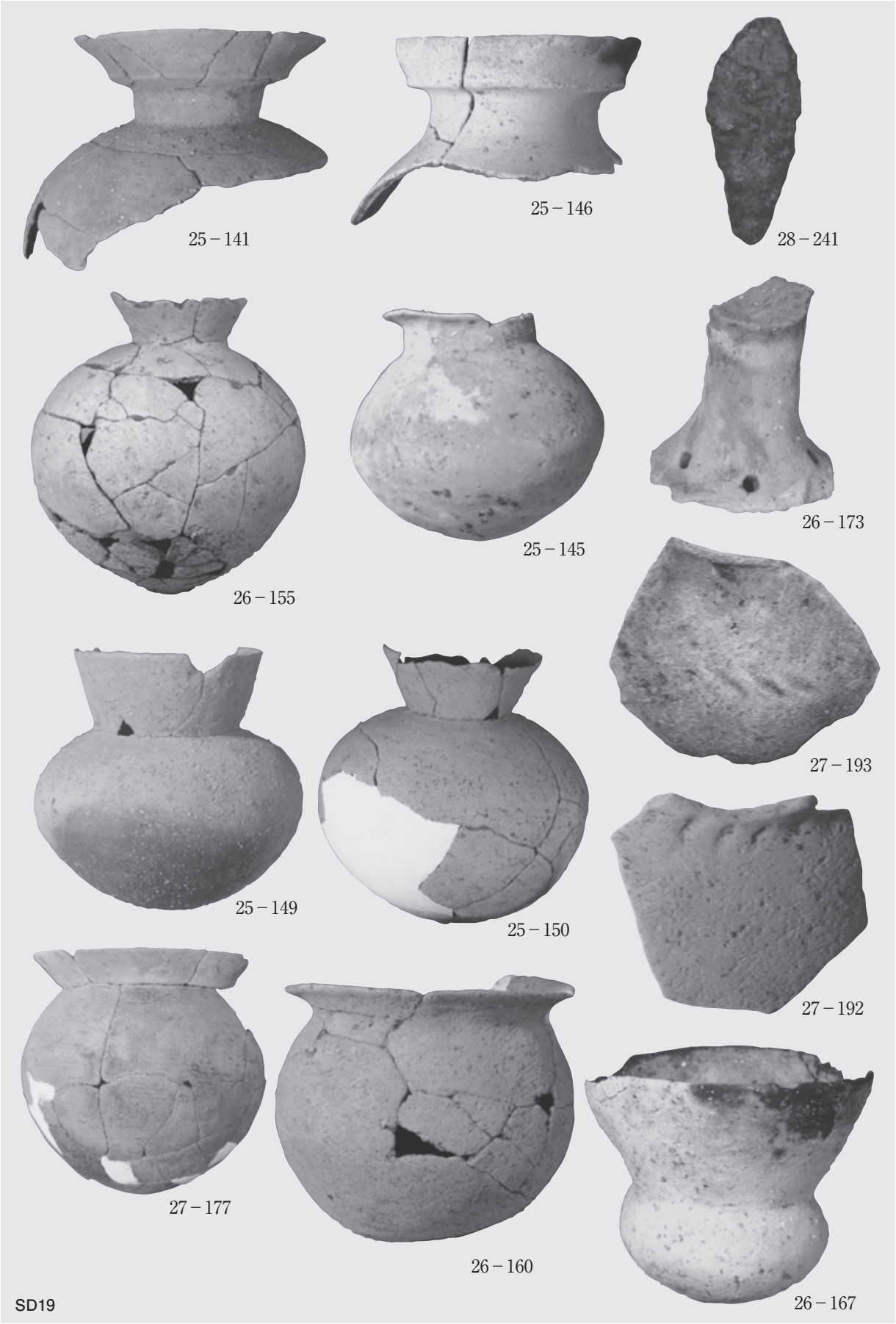

SC31
7－15
D3-5P4
12－56
SD05
16－73
SC31
7－16
SE45
14－61
SD21
17－76


21－89
21－90
21－93
SE09
21－92
21－94
21－95
21－237

出土遺物 1


23－102
23－103
23－118
23－108
23－107
24－134
24－139
23－137
23－177
23－120
24－129
SD06

出土遺物２


25－141
25－146
28－241
26－155
25－145
26－173
27－193
25－149
25－150
27－192
27－177
26－160
26－167
SD19

出土遺物３

報告書抄録

ふりがな	ひえ
書名	比恵７８
副書名	比恵遺跡群第 140 次調査報告
巻次	７８
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1321
編著者名	加藤良彦
発行機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神 1-8-1　TEL092-711-4667
発行年月日	20170327

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひえ 比恵遺跡群 第 134 次	ふくおかしはかたくはか 福岡市博多区博 たえきみなみ 多駅南 4 丁目 62 ・63 番	40132	0127	33° 34′ 40″	130° 25′ 47″	20151026 ～ 20160114	441.18	記録保存

種別	集落
主な時代	弥生・古墳
主な遺構	竪穴住居・井戸・土壙・溝
主な遺物	弥生土器・土師器・外来系土器・半島系軟質土器・石器・鉄器
特記事項	弥生時代中期末・古墳時代初頭の道路側溝と近畿・山陰など多くの外来系土器と古墳前期中頃の鉄製針金の出土
要約	弥生中期～古墳前期の遺構が分布し、集落西を画する道路側溝の出土、鉄器・半島系・近畿・山陰等外来系土器が多量出土し、集落の広域交流・集約・先進性が確認された。

比恵78
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1321集

2017年（平成29年3月27日）

発　行　福岡市教育委員会
〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　髙良印刷
〒810-0075　福岡市中央区港2-4-1